長野市の埋蔵文化財第92集

# 松　原　遺　跡　V

## —JA長野県経済連LPガス充填所建設地点—

1998年3月

長野市教育委員会

# 序

社会生活の変化とともに「ものの豊かさ」から「こころの豊かさ」が求められる今日、文化財は現代人の心の糧として欠くことのできない貴重な国民的財産であると考えます。

歴史は単なる時間の流れの集積ではなく、私たち祖先の長い間の知恵と文化の集積であります。特に埋蔵文化財は先人たちの文化を伝えているだけでなく、現代文化のあり方を見つめ直す上でも貴重な国民共有の財産ともいえます。

このたび、JA長野県経済連LPガス充填所建設に先立って松原遺跡の一部を発掘調査いたしました。ご存じのように松原遺跡は上信越自動車道建設に伴い(財)長野県埋蔵文化財センターにより大規模な発掘調査が実施され、弥生時代中期から平安時代にかけての複合遺跡であることがわかってきました。特に弥生時代中期では環濠を有する大集落が形成されていたようです。当教育委員会でも小規模ながら数回の調査を行い松原遺跡の内容解明にその一端を担ってきたものと自負しております。

今回の調査範囲も施設の建設地と限定されたものでありましたが、貴重な遺構および遺物を発見しております。本書はその成果を要約し、松原遺跡の資料を追加補填するとともに地域の古代史解明の一助になればとの願いを込めて刊行いたします。関係各位に広く活用いただければこの上ない喜びといたします。

最後に発掘調査から報告書刊行に至るまで公私にわたり多大なご支援・ご援助をいただいたJA長野県経済連はじめ関係諸機関ならびに各位に心からお礼申し上げます。

平成10年3月

長野市教育委員会
教育長　　滝澤　忠男

# 例　言

1　本書は、JA長野県経済連LPガス充填所建設事業に伴い平成８・９年度に実施した埋蔵文化財緊急発掘調査報告書である。

2　調査は、長野県経済事業農業協同組合連合会代表理事会長木下順一と長野市長塚田　佐との埋蔵文化財発掘調査委託契約書に基づき、長野市教育委員会埋蔵文化財センターが直轄事業として実施した。

3　調査地は、長野市松代町東寺尾字松原東3317番地他に所在する。

4　発掘調査は、平成９年２月12日から３月28日（稼働29日）、４月７日から４月25日（稼働15日）にかけて行い、保護対象面積は1,670㎡である。

5　遺跡名の「Ⅴ」は、長野市教育委員会が松原遺跡において実施した発掘調査歴順による。ちなみにⅠが長野南農業協同組合集出荷場施設建設事業地（長野市の埋蔵文化財第40集）、Ⅱが市道松代東111号線道路改良地点（第51集）、Ⅲが主要地方道中野更埴線道路改良地点（第58集）、Ⅳが市道松代東63号線道路改良地点（第63集）である。

6　調査によって得られた諸資料は長野市教育委員会（長野市埋蔵文化財センター）で保管している。遺跡の略号は「MMLG」である。

7　本書は、調査によって確認・検出された遺構・遺物を中心に、その基本資料を提示することに重点をおいた。資料掲載の要点は下記のとおりである。

＊　資料は、検出されたものの中から時期が明確に把握しうるものを中心に掲載した。ただし、特殊なものはこの限りでない。時期・性格不明のものは掲載対象からはずしたが、これらに関しての図面・出土遺物等は閲覧し得るように保管している。

＊　遺構番号等は、出土遺物等の検索の都合上から調査時に用いた番号をそのまま使用している。平安時代は１～代、弥生時代は101～代を遺構ごとかつ調査順に付してある。

＊　遺構に略号を用いた。SAは竪穴住居址、SCは環状溝址、STは掘建柱建物址、SKは土坑、SDは溝址・河川跡、SXは性格不明遺構をそれぞれ表す。

＊　遺構の測量は、平面直角座標系第Ⅷ系の座標値と日本水準原点の標高を基準とするコーデックシステムを援用するため株式会社写真則図研究所に委託した。現地にて１：20の縮尺で基本原図を作成し、本書では基本的に１：80の縮尺で提示した。ただし、カマド等の微細図は１：20の縮尺である。

＊　遺物実測図は、土器類を１：４、石器類を１：２・１：３と１：６、小型の特殊なものについては１：２の縮尺を表示してある。

＊　土器実測図の内、スクリーントーンで弥生時代の赤彩部は密点アミ掛け、黒色処理部は粗点アミ掛けで表示した。種類別では実測図断面に表示し、白抜きのものは弥生土器・土師器、黒塗り潰しのものは須恵器、アミ掛けのものは陶磁器類を表す。

＊　出土土器観察表の記載は次の要領で行った。

番号：実測図番号と写真番号は一致する。

法量：実際の計測値または図上復元による計測値を記した。

遺存度：図示した部分の遺存状態を記した。

# 目　次

序・例言・目次

Ⅰ章　調査に至る経過…… 1

第１節　　調査に至る経過…… 1

平成８年度…… 1　平成９年度…… 1

第２節　　調査日誌抄…… 2

平成８年度…… 2　平成９年度…… 3

第３節　　調査の体制…… 4

第Ⅱ章　調査地周辺の環境…… 5

第１節　　地理的環境…… 5

第２節　　松原遺跡発掘調査歴…… 9

第Ⅲ章　調　査……13

第１節　　調査の概要……13

第２節　　弥生時代中期後半の遺構と遺物……16

(1)竪穴住居址……16　(2)環状溝址……28　(3)弧状溝址……35

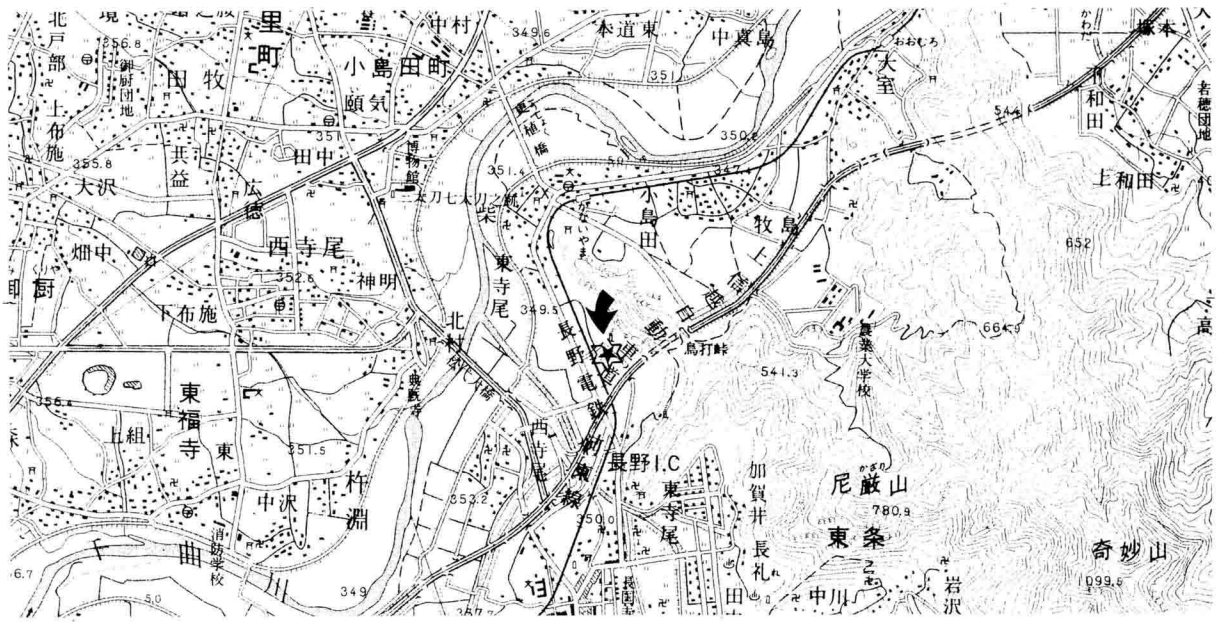
(4)掘建柱建物址……36　(5)土坑……38　(6)溝址……38

第３節　　平安時代の遺構と遺物……55

(1)竪穴住居址……55　(2)土坑……60　(3)溝址……62

第Ⅳ章　結　語……68

報告書抄録




1図　調査地位置図（1：50,000）

# 挿　図　目　次


１図　調査地位置図 …… 目次
２図　松原遺跡位置図 …… ６
３図　松原遺跡周辺表層地質図 …… ７
４図　松原遺跡周辺字境図 …… ８
５図　農協地点弥生時代以降分布図 …… 10
６図　松原遺跡発掘調査地点 …… 11
７図　調査地及び周辺地形図 …… 14
８図　弥生時代中期遺構分布図 …… 15
９図　ＳＡ101 実測図 …… 16
１０図　ＳＡ101 出土土器実測図･拓影 …… 16
１１図　ＳＡ102 実測図 …… 17
１２図　ＳＡ102 出土土器拓影 …… 17
１３図　ＳＡ103 実測図 …… 17
１４図　ＳＡ103 出土土器実測図 …… 18
１５図　ＳＡ104 実測図 …… 19
１６図　ＳＡ104 出土土器実測図･拓影 …… 19
１７図　ＳＡ105 実測図 …… 20
１８図　ＳＡ105 出土土器実測図 …… 21
１９図　ＳＡ106 実測図 …… 22
２０図　ＳＡ106 出土土器実測図① …… 23
２１図　ＳＡ106 出土土器実測図②･拓影 …… 24
２２図　ＳＡ106 出土土器実測図③･拓影 …… 25
２３図　ＳＡ107 実測図 …… 26
２４図　ＳＡ107 出土土器実測図 …… 26
２５図　ＳＡ108 実測図 …… 27
２６図　ＳＡ108 出土土器実測図 …… 27
２７図　ＳＡ109 実測図 …… 28
２８図　ＳＡ0.9 出土土器実測図･拓影 …… 29
２９図　ＳＣ101、ＳＤ102、ＳＫ103 実測図 … 30
３０図　ＳＣ102 実測図 …… 30
３１図　ＳＣ103、ＳＫ117 実測図 …… 31
３２図　ＳＣ104 実測図 …… 32
３３図　ＳＣ105、ＳＫ107･108 実測図 …… 33
３４図　ＳＣ106･109、ＳＫ106 実測図 …… 34
３５図　ＳＣ107･108、ＳＫ112･114～116 実測図 35
３６図　ＳＴ101 実測図 …… 36
３７図　ＳＴ102 実測図 …… 36
３８図　ＳＴ103 実測図 …… 36
３９図　ＳＲ104～106 実測図 …… 37
４０図　ＳＴ107 実測図 …… 37
４２図　土坑溝址、土坑出土土器実測図 …… 39
４３図　土製品･ミニチュア土器実測図 …… 40
４４図　石器･石製品実測図 …… 41
４５図　石器･石製品実測図 …… 42
４６図　平安時代等遺構分布図 …… 54
４７図　ＳＡ１実測図 …… 55
４８図　ＳＡ１カマド実測図 …… 55
４９図　ＳＡ１出土土器実測図 …… 56
５０図　ＳＡ２出土土器実測図 …… 57
５１図　ＳＡ２実測図 …… 57
５２図　ＳＡ３実測図 …… 57
５３図　ＳＡ３出土土器石製品実測図 …… 58
５４図　ＳＡ５実測図 …… 58
５５図　ＳＡ５出土土器実測図 …… 58
５６図　ＳＡ６･７実測図 …… 59
５７図　ＳＡ６出土土器実測図 …… 60
５８図　ＳＡ７出土土器実測図 …… 60
５９図　土坑･溝址実測図 …… 61
６０図　ＳＤ２出土土器実測図 …… 62
６１図　検出面出土土器実測図 …… 62

# 第Ⅰ章　調査に至る経過

## 第１節　調査に至る経過

松原遺跡所在地にJA長野県経済連LPガス充填所建設事業計画が具体化する中で、埋蔵文化財保護協議を進めてきた。主に埋蔵文化財に与える影響が大きい建築物基礎部の深度変更・工法等の再検討を協議題としたが、期間・経費等を考慮して掘削を伴う建物部に限定して発掘調査を実施することにした。また、発掘調査から調査報告書刊行に至るまで複数年を要すると予想されたため調査工程および総調査費についての協定書を締結した。当初、発掘調査は平成８年10月中旬から開始予定であったが、用地取得の遅延等の影響から２月中旬にずれ込み、単年度調査が２カ年に亘ることになった。このため書類等の流れに若干の齟齬がみられる。以下、日を追って調査事務の経過を記載する。

**［平成８年度］**

４月18日　JAグリーン長野開発部稲里営業所長が来所し、LPガス充填所建設に伴う保護協議の申し出でがある。開発予定地は松原遺跡内にあり、工法によっては発掘調査が必要である旨伝達する。

５月31日　LPガス充填所建設基礎部分の仕様（掘削深約１m50cm）について協議を行う。

６月11日付　文化財保護法第57条の２第１項（以下「法」）の規定に基づく「埋蔵文化財発掘の届出について」の書類の提出がある。６月28日付で「開発予定地は発掘調査の実施が適当と判断されます。」旨の意見を付して長野県教育委員会教育長（以下「県教委」）宛に進達する。

７月25日付　県教委より発掘調査を行う旨の「周知の埋蔵文化財包蔵地における土木工事等について（通知）」がある。

９月11日　調査対象範囲・調査費・調査期間等発掘調査にむけての保護協議を行う。

９月25日付　「開発行為に伴う埋蔵文化財発掘調査について（依頼）」提出がある。

10月31日付　調査期間・総調査費等を定めた「埋蔵文化財発掘調査協定書」を締結する。

11月８日付　「埋蔵文化財発掘調査委託契約書」を締結する。履行期間11月11日～３月31日・保護対象面積1,670㎡・委託料8,200,000円。

11月15日付　有限会社小林正信工務店と重機・プレハブ等の賃貸借契約書を締結する。

11月26日　土地買収が遅延しているため、調査期間等調整協議を行う。

12月13日付　株式会社写真則図研究所と遺構測量業務委託契約書を締結する。

２月12日付　法第98条の２第１項の規定により「埋蔵文化財発掘調査の通知について」を県教委経由で文化庁長官宛に提出する。

２月12日～３月28日　発掘調査を実施する。

３月27日付　減額に伴う「埋蔵文化財発掘調査変更委託契約書」を締結する。

３月28日付　発掘調査委託業務実績報告書を提出する。調査費精算額5,300,000円。

**［平成９年度］**

４月４日付　整理調査・調査報告書刊行に向けた「埋蔵文化財発掘調査委託契約書」を締結する。履行期間４月７日～３月31日・保護対象面積1,670㎡・委託料5,700,000円。

４月４日付　有限会社小林正信工務店と重機・プレハブ等の賃貸借契約書を締結する。

4月7日～24日　発掘調査を実施する。

4月22日付　株式会社写真則図研究所と遺構測量業務委託契約書を締結する。

4月28日付　長野南警察署長宛「埋蔵物発見届」、県教委宛「埋蔵文化財保管証」、県経済連代表理事会長・県教委宛「発掘調査終了届（通知）」をそれぞれ提出する。

6月12日付　県教委より「埋蔵物の認定について（通知）」がある。

11月25日～28日　県経済連と共催で、新築のLPガス充填所において「松原遺跡発掘調査速報展」を開催する。

3月5日付　発掘調査委託業務実績報告書を提出する。調査費精算額5,700,000円。

3月30日付　『松原遺跡Ⅴ—JA長野県経済連LPガス充填所建設地点—』を刊行する。

## 第2節　調査日誌抄

**［平成8年度］**

2月12日　A区：重機による表土除去作業（1次面）。

2月17日　A区：遺構検出・壁面削平作業。

2月18日　A区：遺構検出・下層確認トレンチ掘削作業。B区：重機による表土除去作業。

2月19日　作業休止。重機による排土処理作業。

2月20日　A区：SA1～4のプラン確定作業。B区：表土除去作業継続。

2月24日　B区：遺構検出作業。

2月25日　B区：トレンチ掘削作業。遺構なし。

2月26日　B区：平安時代面の包含層除去作業。

2月27日　B区：平安時代面は弥生時代の河川跡（SD1）の上面堆積土と確認。

2月28日　A区：重機による表土除去作業（3月3日まで）。B区：SD1土層確認のトレンチ掘削調査。

3月3日　A区：遺構検出作業。

3月4日　A区：遺構検出作業継続。トレンチ調査。

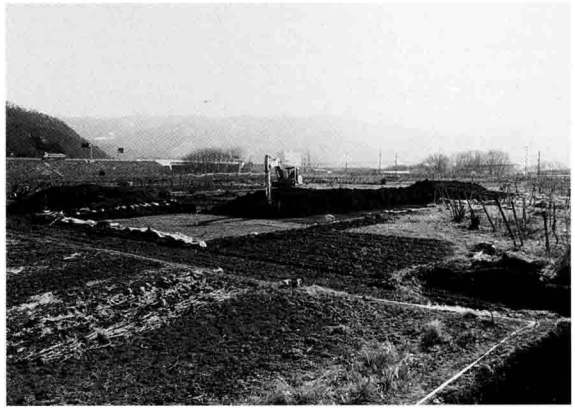
3月5日　遺構プラン不明瞭につきトレンチ調査継続。

3月6日　A区：SA1～3の調査開始。B区：遺構測量。

3月7日　A区：SA1～3の調査継続。SA3より石製巡方出土。

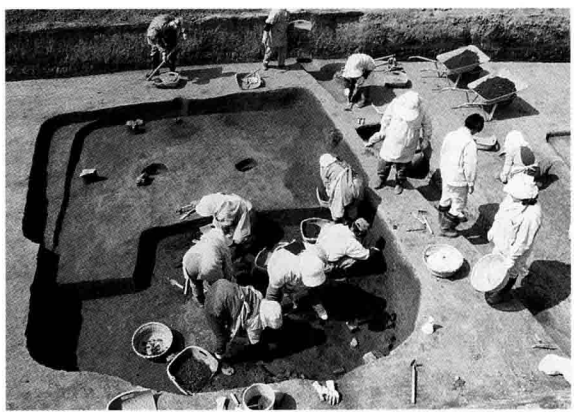
3月10日　A区：SA1～3の精査。SA2の写真撮影。SD2のトレンチ調査。

3月11日　A区：SA4・SD2の調査開始。SA2・3カマドの精査。



Ⅰ－1　A区表土除去

Ⅰ－2　A区遺構検出



Ⅰ－3　SA6・7の調査

3月12日　A区：昨日の調査継続。SA１～３カマドの平面実測。SA１・３写真撮影。

3月13日　A区：昨日の調査継続。調査地全体の写真撮影。重機による排土処理作業。

3月14日　A区：SD２の調査継続。遺構測量。C区：重機による表土除去作業。

3月17日　作業休止。遺構図結線。

3月18日　A区：重機により２次面（弥生時代面）の露呈作業（～24日）。C区：壁面削平・遺構検出作業。

3月19日　C区：住居址・溝址プランの追求と掘り下げ。

3月21日　A区：遺構検出作業。

3月24日　A区：SA104～106・108、土坑の調査開始（～28日）。

3月28日　A区：完掘後写真撮影・遺構測量。C区：遺構測量。

**［平成９年度］**

4月７日～９日　C区：重機により２次面の露呈作業。

4月８日～14日　A区：SA101～103・107、SC101～106、ST101～107、溝址、小穴等の調査。完掘遺構から順次写真撮影。

4月10日　C区：壁面削平・遺構検出作業。D区：重機による表土除去作業。遺構検出作業。遺構なし。

4月15日　A区：全体写真撮影。遺構測量。C区：遺構検出作業を継続。

4月16日～24日　C区：SA109、SC107・108、小穴等の調査。完掘遺構から順次写真撮影。

4月21日・22日　重機により排土整地処理作業。

4月22日　A区・C区清掃後、ラジコンヘリによる空中写真撮影。

4月23日　D区：重機により２次面の露呈作業。遺構検出作業。SD104の掘削。

4月24日　D区：SD104の完掘後写真撮影。

4月25日　A区・C区・D区：遺構測量。

Ⅰ－４　SA 103の調査

Ⅰ－５　A区遺構測量

Ⅰ－６　A区清掃作業

Ⅰ－７　空中写真撮影用ラジコンヘリ

## 第３節　調査の体制

長野市域における埋蔵文化財の保護については、学術調査および史跡等の保護保存に係わる調査は長野市教育委員会社会教育課が対応し、開発行為に対する緊急発掘調査は埋蔵文化財センターの直轄事業として実施している。

松原遺跡Ｖにおける組織・業務分担は以下のとおりである。

調査主体者　長野市教育委員会教育長　滝澤忠男
総括責任者　埋蔵文化財センター所長　丸田修三
庶務係　所長補佐兼庶務係長　小林重夫
職員　青木厚子
調査係　所長補佐兼調査係長　矢口忠良（編集・遺物実測）
主査　青木和明（Ｈ９社会教育課文化財係長異動・兼務）
千野　浩
主事　飯島哲也（調査主任・事前協議・遺構写真・遺物実測）
風間栄一（遺物写真）
小林和子
専門主事　清水武
専門員　小野由美子（調査員・遺構整図）・小林まゆ佳（調査員・遺物整理）
中殿章子・山田美弥子・西澤真弓・堀内健次・藤田隆之・宮川明美・
勝田智紀（Ｈ８）
特別調査員　寺島孝典（弥生時代土器実測、長野県考古学会員）
整理調査員　青木善子（遺物浄書）・池田寛子（遺構浄書）・多羅沢美恵子（石器実測・浄書）
発掘作業員　飯沼美千代・石田利明・上田　清・大島春江・太田千代美・木下保雄・木村重子・近藤利子・清水富子・杉村寿枝・須坂万大・鈴木太い子・関口よし子・関屋キヨ子・田沢純子・時澤富士子・永井百合子・中村一夫・平沢庸子・堀内ます子・宮沢勝子・米山正三
整理作業員　岡沢治子・倉島敬子・塚田容子・徳成奈於子・西尾千枝・松澤ナオエ・三好明子・向山純子
遺構測量業務委託　株式会社写真測図研究所代表取締役杉本幸治

調査を遂行していく上において多くの皆様からご指導・ご協力をいただいた。特に長野県経済事業農業協同組合連合会瀬在章雄・山本和男両考査役、JA グリーン長野酒井幸一稲里営業所長には何かとお世話をかけ、有限会社小林正信工務店の方々には安全面での面倒をみていただいた。記して感謝申し上げます。

# 第Ⅱ章　調査地周辺の環境

## 第１節　地理的環境

調査地の西側に位置するする千曲川は、上流の坂城町で長野盆地に流入し、更埴市で流路を北東に転ずる。犀川との合流点まで蛇行しながら流下し、その後直線的な流れとなり豊野町と中野市境に至ると流出口として先行性峡谷を経て飯山盆地に至る。この間直線距離にして約25kmに対して高度差は僅か20m にすぎない。犀川の堆積土に押され東側山系の山裾を縫うように流下するものの、流路攻撃面には河食涯をつくり堆積面には顕著な自然堤防と後背湿地を形成する。地形的には水勢の強い直線的に流下するのに対して、緩やかに蛇行する千曲川がつくり出した複雑な山麓線はリアス式海岸の様相を想起させる。

1752（宝暦２）年、松代城から北へ約１km遠ざけ、蛇行を小さくした現流路を開削する以前の千曲川は、松代城の北側から象山離山・愛宕山（寺尾城山先端）を通って東寺尾の山沿いを流れていた。現在では調査地より東

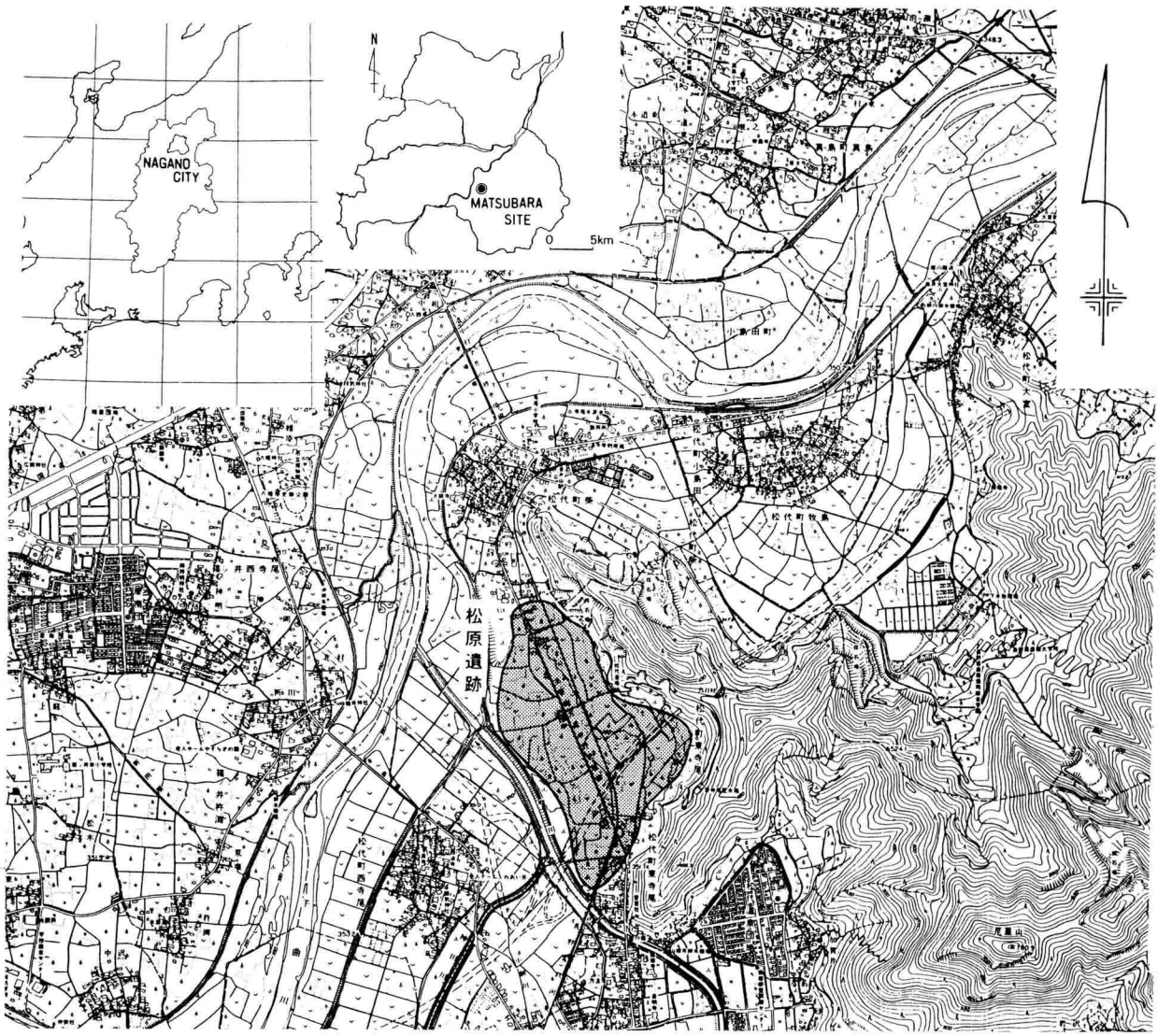
Ⅱ－１　松原遺跡航空写真（平成２年撮影、（株）ジャステック）

側の地形の落ち込みと北に位置する柴地籍の三日月湖的な金井池の存在によってかろうじて読み取ることができる。この千曲川流路は自然堤防の形成により後背湿地となり、清野・大室地籍等では水田や一部に蓮田として地目利用されている。また、長野市域における千曲川右岸の自然堤防上には、上流部から四ツ屋遺跡・松代城北遺跡・松原遺跡・牧島遺跡・町川田遺跡・綿内遺跡群等が展開している。

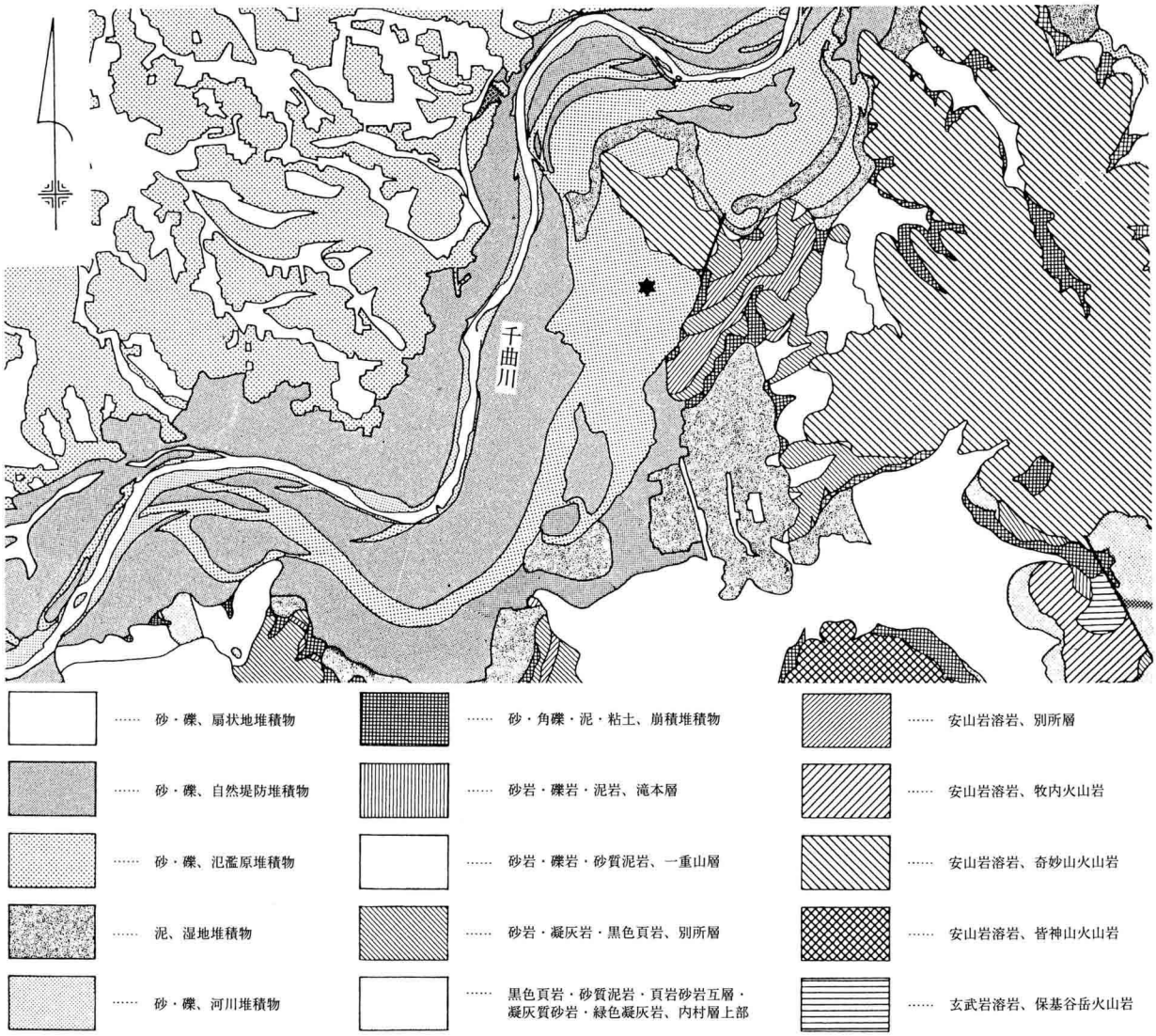
松原遺跡も松原自然堤防の一角に所在する。『長野市表層地質図』によると、旧千曲川流域および松原自然堤防は砂と礫の氾濫原堆積物が表出しており（３図)、県道中野更埴線（現国道403号線）道路改良事業に伴う発掘調査でＪ区で検出された礫層面は、地表面からの深浅にかなりの差を有しながらも広く東寺尾地籍に展開しているものと思われる。

現在，松原自然堤防上は桑畑や長芋栽培が行われ、近年リンゴやブドウの果樹栽培も盛んになっている。また、上信越自動車道長野インターに近いことや周辺の道路改良も進み近い将来において急速な変貌も予想される。

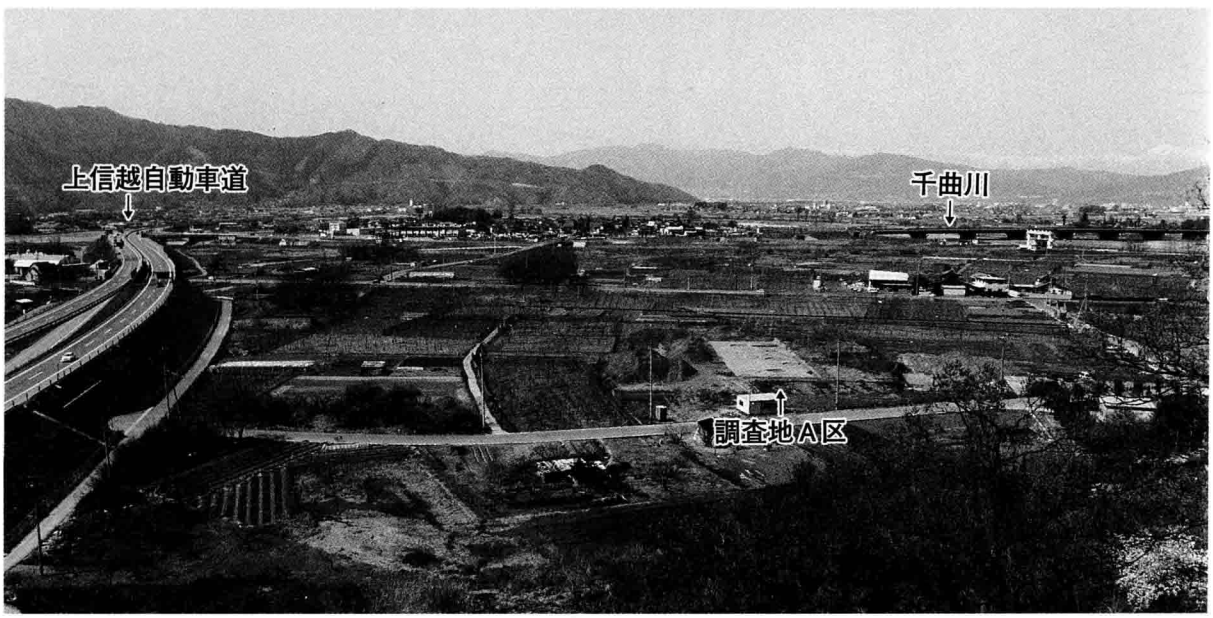
（注）『松原遺跡Ⅳ』から加筆転載した。




２図　松原遺跡位置図（１：30,000）




3図　松原遺跡周辺表層地質図（1：50,000、『長野市表層地質図』より）




Ⅱ－2　調査地遠景

4図　松原遺跡周辺字境図（1：10,000）

## 第２節　松原遺跡発掘調査歴

松原遺跡は松代町東寺尾地籍に所在し、金井山と西側に流れる蛭川との間に展開する自然堤防上の遺跡である。しかし、千曲川の氾濫原でもある当地はその都度地形の変化が著しかったものと判断され、各時代においてもこの地形変化に影響を受けたものとみられる。そのため遺跡の占地や遺構の密集度に大きな差異が認められる。

本遺跡は古くから弥生時代以降の複合集落跡として周知されており、遺物の散布状況からその規模は大きいものと予想されてきた。上信越自動車道が遺跡の中央付近を横断し、その影響もあって周辺の関連開発事業も活発となり、これまでに多くの緊急発掘調査が実施されてきた。現在のところ今回の発掘調査をもって松原遺跡内の開発による調査は一段落したものと思われる。

以下、事業地点毎に記載する。番号は「６図調査区と既往調査地点番号」と一致する。

### １　上信越自動車道地点（高速道地点）

平成元年度より３年度にかけて発掘調査が（財）長野県埋蔵文化財センターにより実施された。その結果縄文時代前期から中世に至る複合遺跡であることが明らかになった。調査では各時代の竪穴住居址を中心に多くの遺構が検出された。竪穴住居址は縄文時代前期末～中期初頭31軒、縄文時代中期後半～後期前半11軒、弥生時代中期後半296軒、弥生時代後期45軒、古墳時代前期18軒、奈良・平安時代750軒など総数1,151軒におよぶ。縄文時代は前期末から後期前半の集落で、住居址のほか土坑や焼土跡、多数の小穴による柵状遺構も検出され、今後の研究に一石を投じそうである。弥生時代中期後半の大集落は、断面Ｖ字を呈する大溝に囲まれたいわゆる環濠集落である。打製・磨製など多量の武器形石器の出土から、この集落が戦闘的緊張状態にあったことを伺わせものとして注目される。出土した土器についても充実しているほか、住居址と直接的な関係がないものの覆土より出土した人面付土器も注目に値する。なお、県道と長野電鉄河東線に挟まれた調査区では28基からなる礫床木棺墓群が検出されている。弥生時代後期と古墳時代前期にも小規模ながら集落が展開する。また、遺跡東側の金井山山麓から古墳時代後期の松原１号古墳が発見され、当該期の住居址等は確認されていないが周辺に小規模な集落の存在が予想される。再び大規模集落が形成されるのは奈良・平安時代に至ってからである。遺構数や出土遺物量が膨大なものであり、現段階においては全容が明らかになっていない。調査報告書の刊行がまたれる。特記遺物に磬の鋳型と思われる仏具の鋳造関係資料や石製のサイコロが住居址から出土している。中世は主だった遺構は観察しえないものの、土壙墓や井戸址のほか曲物に納められたと思われる火葬骨・五輪塔等が金井山山麓の傾斜面から集中して発見されている。

（注）ここに示した数字は、（財）長野県内蔵文化財センター『年報』記載の遺構検出数を単純に合計したものである。今後刊行される調査報告書の数値と齟齬を生じる可能性がある。

［引用・参考文献］

（財）長野県埋蔵文化財センター　1989「（８）松原遺跡」『年報』６
（財）長野県埋蔵文化財センター　1990「（５）松原遺跡」『年報』７
（財）長野県埋蔵文化財センター　1991「（５）松原遺跡」『年報』８

### ２　南長野農業協同組合出荷場施設建設地点（農協地点）

平成２年度に発掘調査を実施し、弥生時代中期後半と平安時代の遺構・遺物を検出した。弥生時代中期後半は住居址26軒のほか多くの遺構が確認されている。３次面25号住居址床面からは石戈が１点出土している。高速道

地点においても３点出土しているという。また、高速道地点で検出され、本地点においてもその一角が確認された河川跡は、弥生時代中期後半には集落内を蛇行して横切り、集落が分断した形になる。高速道地点では環濠もこの河川跡を一部利用して巡らされているようであるが、当調査地点では確認されない。奈良・平安時代の住居址は35軒検出した。２次面（平安時代前半）33号住居址から出土した土師器と須恵器の坏底部に同一の刻印が押されていた。このことは土師器と須恵器を同じ集団が製作しているという可能性を示すもので、今後当該期における土器製作集団の在り方を考える上で良好な資料といえる。

［引用・参考文献］

長野市教育委員会　1991『松原遺跡』長野市の埋蔵文化財第40集

**５図　農協地点弥生時代遺構分布図（１：500）**

### ３　主要地方道中野更埴線道路改良地点（県道地点）

平成２年度から４年度にわたり発掘調査を実施した。遺跡の東から南に弧を描きながら横断する調査区になる高速道地点に対し、この県道を南北に縦断する形で調査され、これによって遺跡の範囲がほぼ確定したといえる。高速道長野 IC に接続する新設道路（バイパス）については最大幅18m を確保できたことから遺構の検出件数も多いが、現県道の拡幅部分に関しては幅５m 前後の調査しか行えなかった。そのため遺構全体を把握できた例は少ない。弥生時代中期後半は住居址51軒・環状溝址13基・土壙墓１基等を確認した。環状溝址は松原遺跡内において普遍的に存在する円形状に巡る溝状遺構で、その区画内には多数の小穴、中央付近には炉址と思われる焼土も確認されている。平地式の住居址と考えられている。土壙墓は骨の残存状態はあまり良くないものの胸部肋骨に接して基部の折れた石鏃が１点出土した。高速道地点で記したように弥生時代中期後半の松原遺跡が政治的に緊張状態にあったとの想定のもとに、戦乱による犠牲者の墓の可能性がある。古墳時代では後期の住居址を２軒検出した。後述する松代東111号線地点の調査で４軒の住居址が確認されており、周辺に小規模な集落の存在が予想される。ただし、松原１号古墳との関係は今のところ不明である。奈良・平安時代の住居址は36軒確認されている。特筆すべき遺構としては精錬炉状遺構が10基まとまって検出され、内部から炉内滓や流動滓のほか鍛冶羽口・

6図　松原遺跡発掘調査地点（1：5,000、弥生時代遺構）

フイゴ羽口などが出土した。10世紀前半から中頃の所産と思われる。

［引用・参考文献］

長野市教育委員会　1993『松原遺跡Ⅱ』長野市の埋蔵文化財第51集

### 4　市道松代東111号線道路改良地点（松代東111号地点）

平成２年度と３年度に発掘調査を実施した。遺構面は３面あり、上層から奈良・平安時代および中世面、古墳時代後期面、弥生時代中期後半面である。弥生時代住居址は他の調査地点よりも密集度が低く７軒検出したにすぎなく、調査地が遺跡の西端付近に位置するものと思われる。この他古墳時代の住居址４軒、奈良・平安時代住居址13軒、中世土坑を検出した。この内21号住居址は奈良時代の所産で、煙道先端部を除きほぼ完掘できた焼失住居址である。特記遺物に占骨・ガラス製丸玉がある。

［引用・参考文献］

長野市教育委員会　1993『松原遺跡Ⅲ』長野市の埋蔵文化財第58集

### 5　松代斎場周辺環境整備事業地点（松代斎場地点）

平成３年度に発掘調査を実施したが、明確な遺構の検出に至らなかった。遺物の出土量も僅少であり、旧千曲川の流路上に位置するものと想定されることから松原遺跡の集落外と思われる。

（注）以上の１～５地点については『松原遺跡Ⅳ』から加筆転載した。

### 6　市道松代東63号線道路改良地点（松代東63号線地点）

平成４年度・５年度に発掘調査を実施した。調査起因が道路改良ということで調査幅３ｍ前後で狭長なものであるため、遺構全体を露呈できたものは少ない。ただし、調査地は松原遺跡の東端付近を南北に調査したため遺跡の内容が徐々に判明してきたといえる。周辺の調査地点と比較すると遺構の密集度は高くない。調査で確認された遺構は、弥生時代中期後半住居址７軒・土坑２基・溝址13条、平安時代住居址１軒・井戸址５基および溝址・土坑等があるにすぎない。弥生時代では集落の東側の外れに位置するものと思われ、平安時代においては旧千曲川の氾濫における地形変化が幾度となく繰り返された反映として無遺構地域になったものと推定される。

［引用・参考文献］

長野市教育委員会　1994『松原遺跡Ⅳ』長野市の埋蔵文化財第63集

# 第Ⅲ章　調　査

## 第１節　調査の概要

調査区は便宜的にガスタンク・作業所建設地をＡ区、事務所建設地をＢ区、貯水槽建設地をＣ区、倉庫建設地をＤ区とした。平成８年度は主にＡ区・Ｂ区を調査し、９年度はＡ区・Ｂ区の掘り残し遺構とＣ区・Ｄ区を調査した。検出または確認した遺構は弥生時代中期後半の住居址９軒・周溝を有する平地式住居址と考えられる環状溝址９基・掘建柱建物址７棟・溝址８条・土坑20基・小穴等である。平安時代前期では住居址４軒・溝址１条・土坑４基・小穴等である。

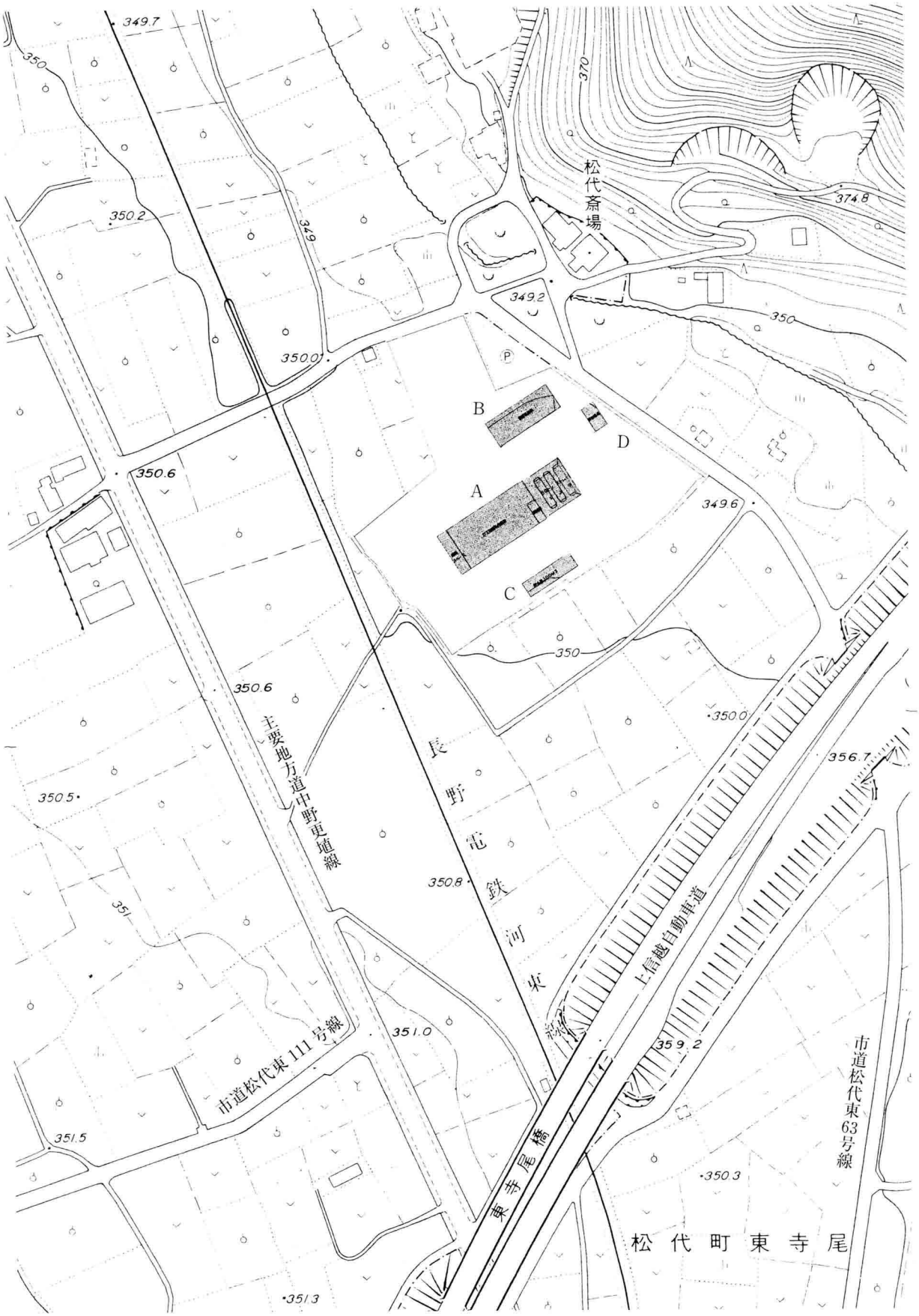
**【Ａ区】**　開発予定地内において最も面積の大きい調査区である。地表下約80cmで平安時代前期の１次面を確認する。遺構は平安時代前期住居址４軒・溝址１条・焼土、時期不明河川跡１条、近代以降の長方形土坑群等がある。住居址は散在的に分布しており、すべて単体での検出である。１号住居址のカマドは支脚石が抜き取られていたものの比較的残存状態が良好で、石芯材を用いた両袖部や煙道入口の張り石を検出した。２号・３号住居址のカマドは支脚石のみ認められた。遺物では３号住居址の覆土から出土した石製巡方が特筆される。

地表下約160cmにおいて弥生時代中期後半の遺構面を検出した。住居址８軒・環状溝址７基・掘建柱建物址７棟・土坑11基・溝址３条・小穴を確認した。住居址はやや東側に集中傾向があるものの調査地全域に散在する。すべて単体での検出であるが、主軸方向に相違がみられ３系統に大別される。環状溝址・掘建柱建物址も住居址と同様な分布状態を示すが、住居址や同形態の遺構と重複関係にあるものが多い。

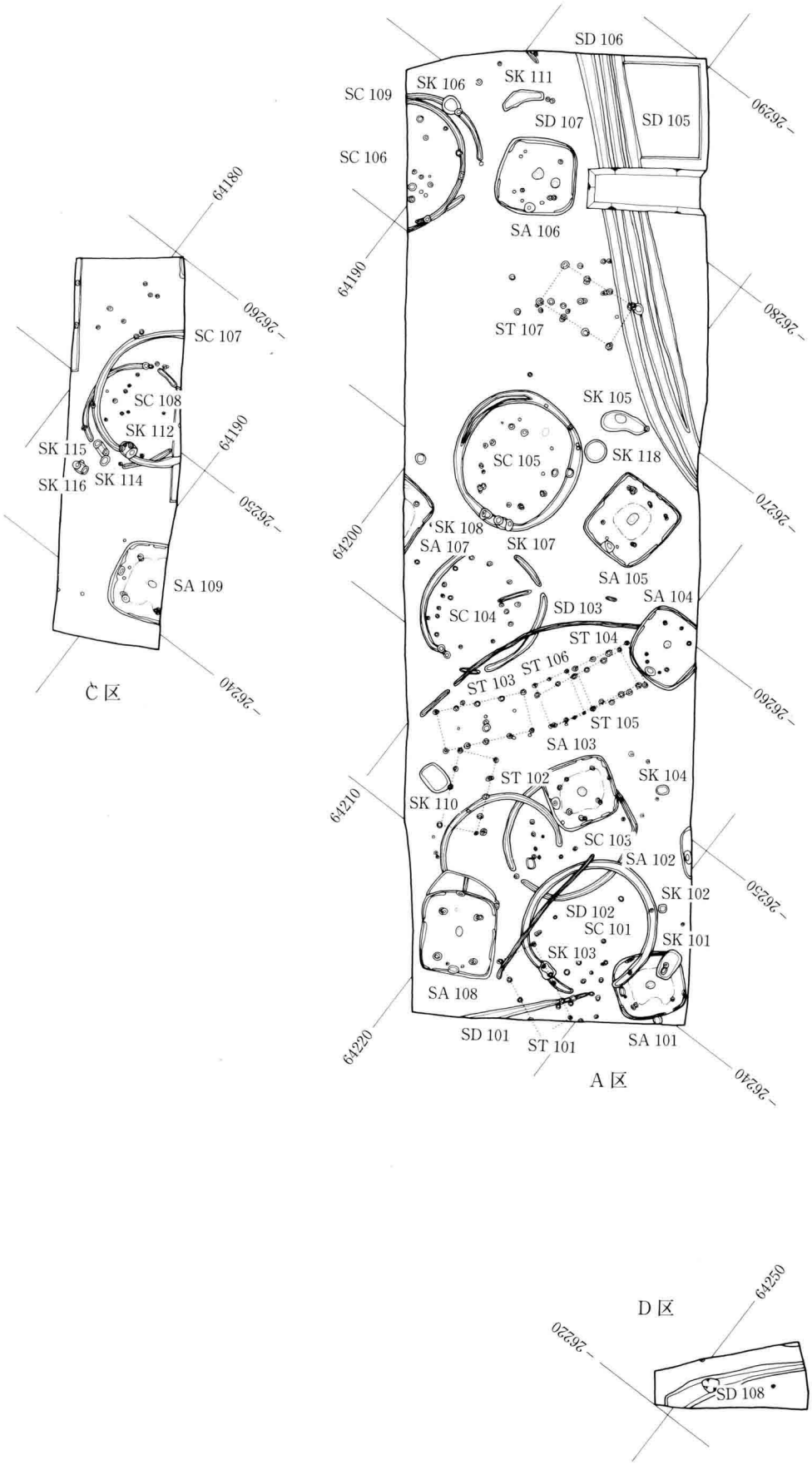
**【Ｂ区】**　開発予定地の北に位置する。平成３年度に実施した松代斎場環境整備地点と近接する調査区である。前記の調査では埋蔵文化財の包蔵はほとんど認められず、僅かに近世以降と思われる暗渠排水遺構を検出したにすぎない。おそらく中世以前は河川跡であった可能性を示唆した調査結果となっている。今回の調査においてもそれを傍証することができた。すなわち検出した遺構は河川跡と思われる堆積土壌の落ち込みと近現代の撹乱の痕跡のみである。河川跡の落ち込みは現在の農道に沿って北東に延び、松代斎場に向かっている。おそらくこれより北側には中世以前の遺構が存在しないものと考えられる。出土した遺物は土師器・須恵器の小破片が数点あるにすぎない。

**【Ｃ区】**　開発予定地内の南に位置し、高速道地点と最も近い調査区である。高速道地点は松原遺跡の中心部と考えられ、特に弥生時代中期後半と平安時代に遺構密度のピークが認められる。本調査区では小面積ながら１次面において住居址３軒・溝址４条を確認した。６号・７号住居址は本調査で唯一重複関係にある住居址である。２次面においては住居址１軒と重複関係にある２基の環状溝址・土坑３基および小穴を検出した。各遺構からの遺物の出土量も多く、これより南の高速道地点にかけて遺構密度が濃くなるものと予想される。

**【Ｄ区】**　開発予定地の東に位置する。平安時代・弥生時代面は確認されなく、遺構としては近世以降の所産と考えられる溝址を１条確認したにすぎない。土器の出土量も極めて少ない。千曲川の旧河川敷内に位置するものと思われる。




7図　調査地及び周辺地形図（1：2,500）




8図　弥生時代中期遺構分布図（1：400）

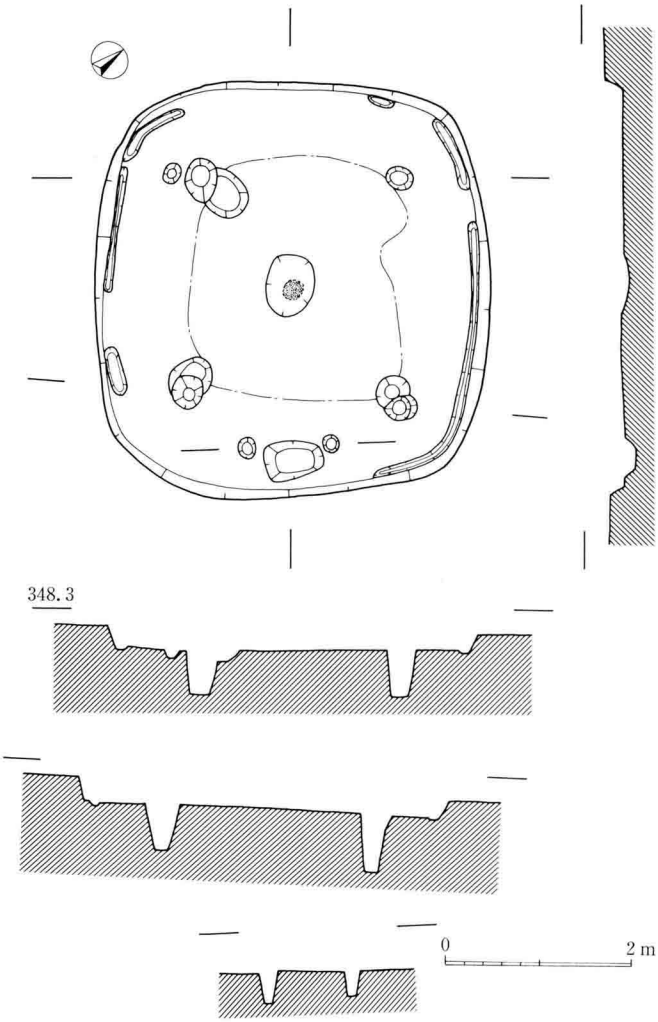
## 第２節　弥生時代中期後半の遺構と遺物

### (1)　竪穴式住居址（住居址）

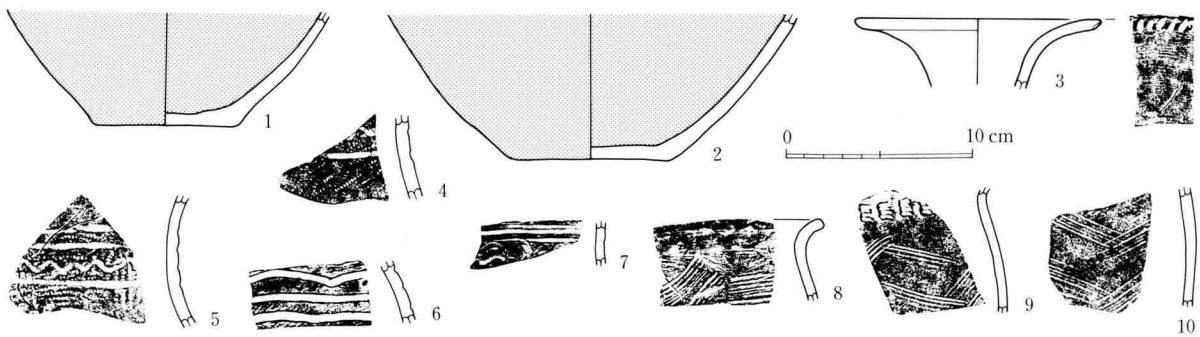
#### 101号住居址（SA101）

［遺構］（９図）　Ａ区の北東隅に位置し、全形を単体で露呈した。SK101およびSC101と重複関係にあり、これらの遺構よりも古い。形態は胴張りの隅丸方形を呈する。主軸方向はN49°Ｗを指し、主軸（南北軸）4.3m・直交軸4.18m・最大壁高25cmの規模になる。主柱穴は４個方形配列で、主柱穴内の床面は平坦で堅緻である。炉は住居址および主柱穴間の中央に設けられた地床炉である。形状は主軸方向65cm・直交軸50cm規模の楕円形を呈し、底面が８cm程鍋底状に窪み、中央付近に直径20cmの焼土塊化した火床を残す。入口の施設は南壁沿いの中央に設けられ、長軸62cm・短軸40cm・深さ10cm程の楕円形土坑と長軸両脇上に小穴各１個を配置している。東壁と西壁下に不連続な周溝状の溝が掘られている。

［遺物］（10・43・44図）　出土遺物は少量にすぎず、すべて破片出土である。器種には浅鉢（１・２）・壷（３～７）・甕（８～10）がある。鉢は内外面共にヘラミガキ調整で赤色塗彩が施される。壷の口唇部は半截の棒状工具による押引き列点文が巡らされ（３）、頸部文様には縄文地に平行沈線文・山形文を巡らすもの（５）、体部文様には縄文地に平行沈線文と波状沈線文が施文されるもの（６）などがみられる。甕は頸部に櫛描列点文




９図　SA 101 実測図（１：80）




10図　SA 101 出土土器実測図・拓影（１：４）

（9）、体部上半に羽状文（8～10）が施文される。この他にミニチュア壷形土器（173～176）・同台付甑形土器（177）、土器製有孔円板（181～184）の土製品、打製石鏃（198）・石錐（222）の石製品が出土している。

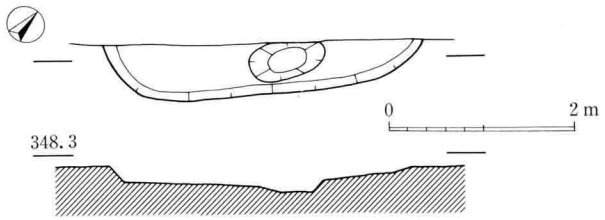
### 102号住居址（SA102）

［遺構］（11図）　A区の北東隅付近に位置し、調査では南壁部分を確認したにすぎない。形態は隅丸方形と推測されるが、規模等は不明である。南壁添いの中央付近に深さ10cm程の隅丸長方形土坑が認められ、入口施設の一部であろう。これをもとに主軸方向はSA101と同様方向を指すものと考えられる。

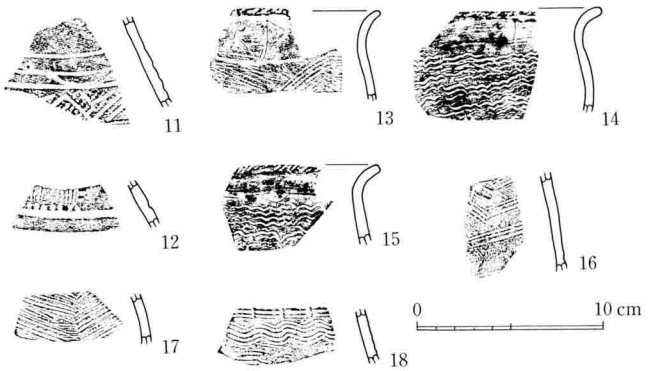
［遺物］（12・43図）　出土量は少なく、すべて破片出土である。器種には壷（11・12）と甕（13～18）がある。壷の体部には3条の沈線文とその下部に縄文地重山形文が施されるもの（11）、沈線文と縦位の櫛描直線文・横位の列点文が施文されるもの（12）がある。甕は口唇部に縄文（13～15）、頸部に廉状文（18）、体部に波状文（14・15・18）と羽状文（16・17）が施文される。この他に土器製有孔円板（185）が出土している。

### 103号住居址（SA103）

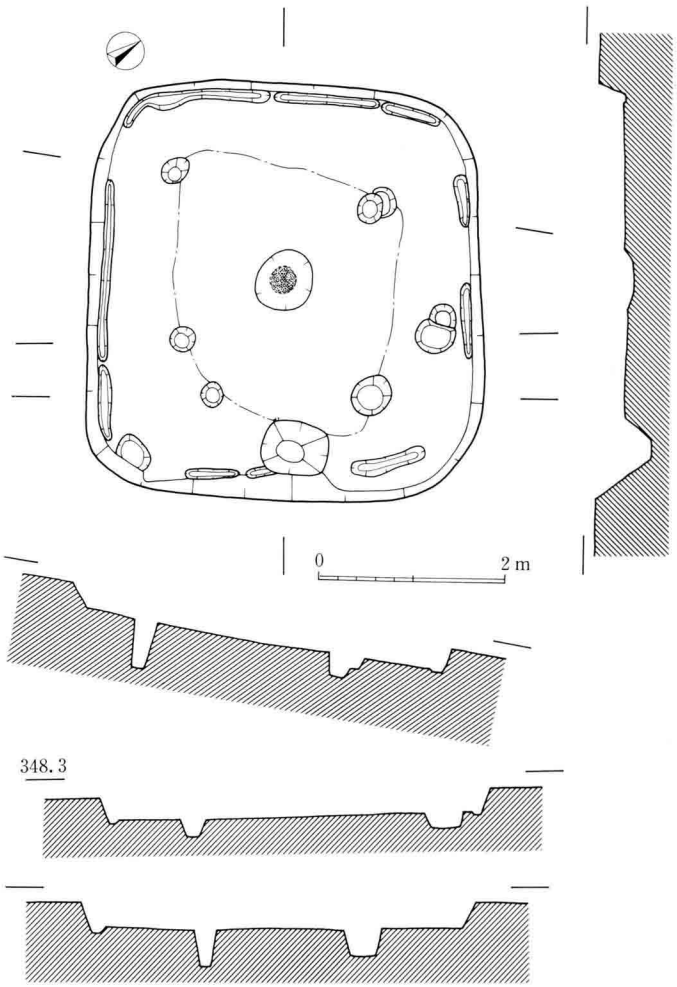
［遺構］（13図）　A区の北東中央に位置し、全形を単体で露呈した。SC103と重複関係にあり、この遺構よりも古い。形態は隅丸方形を呈する。南壁東の小溝の位置からこの部分は拡張された可能性がある。主軸方向はN57°Wを指し、主軸（南北軸）4.4m・直交軸4.1m・最大壁高28cmの規模になる。主柱穴は4個不整方形配列で、主柱穴内の床面は平坦で堅緻である。炉は住居址および主柱穴間の中央に設けられた地床炉である。形状は主軸方向65cm・直交軸60cm規模の卵形を呈し、底面が12cm程鍋底状に窪み、中央に直径30cmの焼土塊化した火床を残す。入口の施設は南壁添いの中央に設けられ、長軸70cm・短軸56cm・深さ28cm程の隅丸長方形土坑が掘り込まれているものの長軸両脇の小穴は確認されない。各壁下には不連続な周溝状の溝が巡らされている。




11図　SA 102 実測図（1：80）

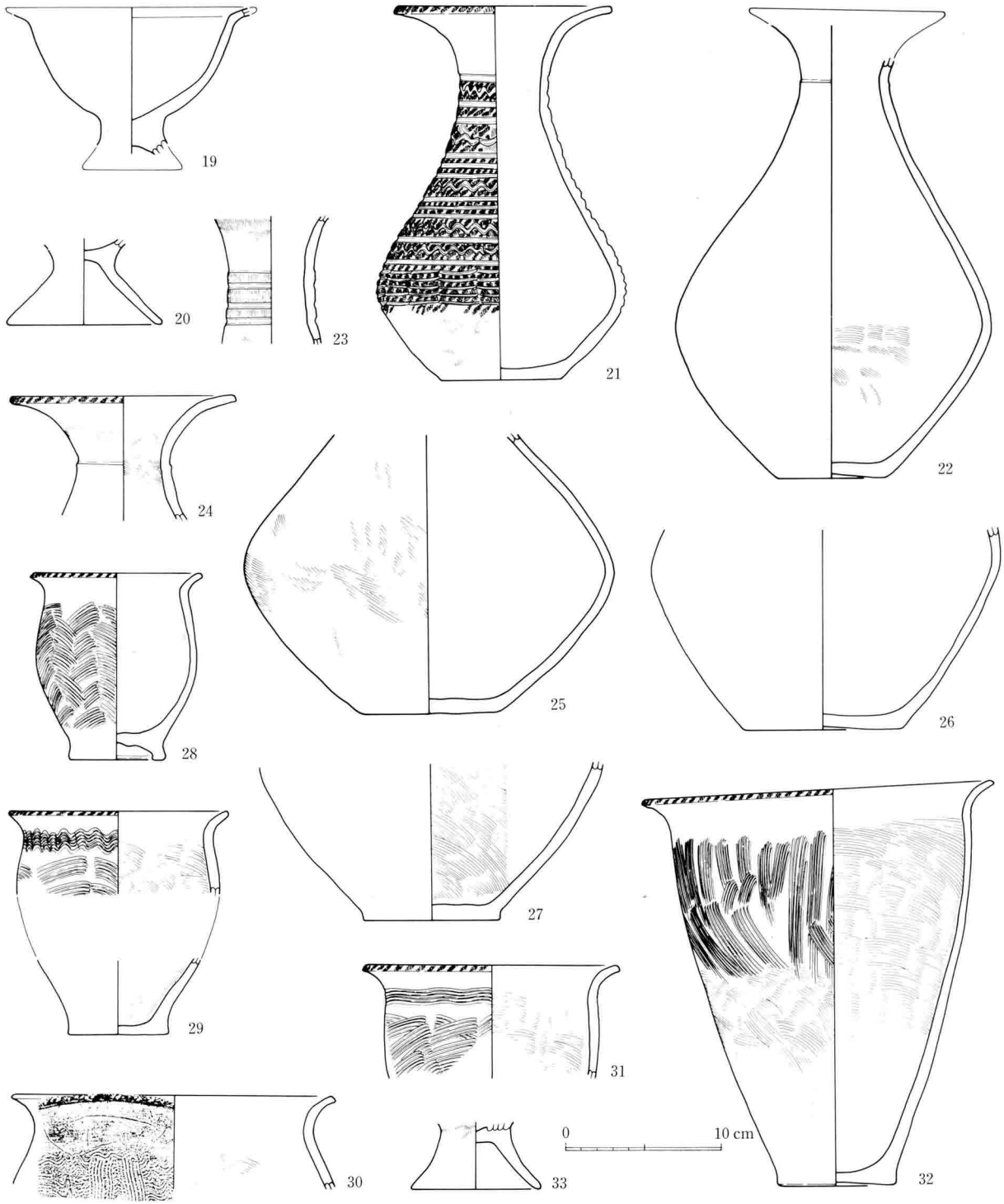



12図　SA 102 出土土器拓影（1：4）




13図　SA 103 実測図（1：80）

［遺物］（14図）　出土遺物量は比較的多いが、完形品は壷１個体（21）にすぎない。器種には高坏（19・20）・壷（21～27）・台付甕（28・33）・甕（29～32）がある。19の高坏は台状の脚部で、内外面共にヘラミガキが施され赤色塗彩される。20は赤色塗彩がみられない。壷の口唇部は面取りされて縄文が施されるもの（21・24）と素口縁で無施文のもの（22）がある。21の文様は縄文地に、頸部から体部上半にかけて区画された平行沈線文間に山形文が交互に施され、下半部は断絶する曲線的な平行沈線文が描かれる。22は無施文であり、25から27も体部文



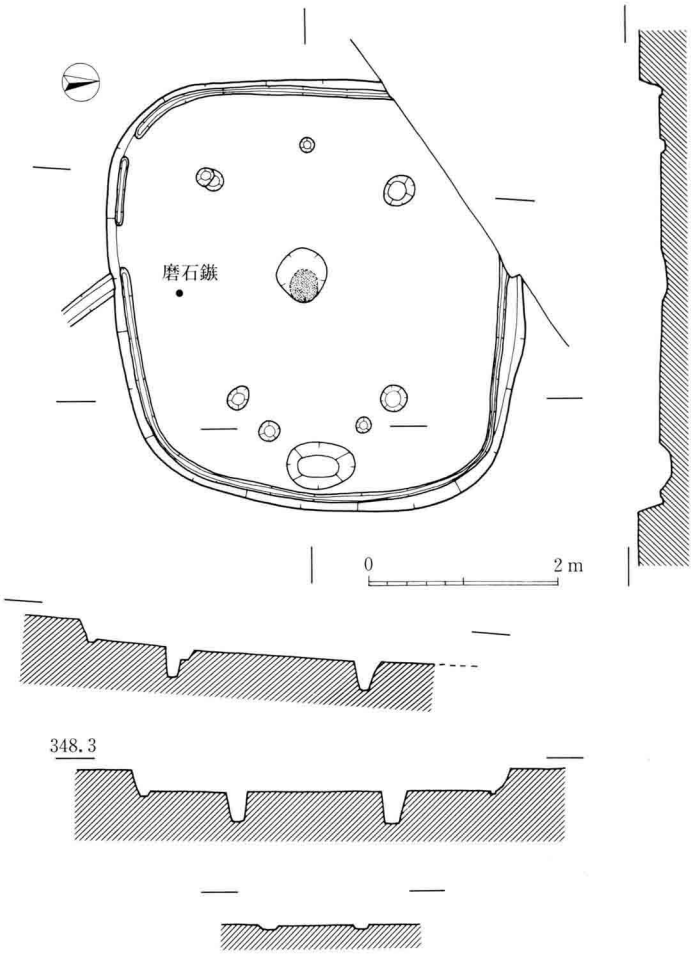

14図　SA 103 出土土器実測図（１：４）

様がみられない。甕の口唇部は壷と同様の縄文（28～32）が施され、頸部には波状文（29）・直線文（31）が、体部には波状文を施したのち垂下する２帯の直線文が描かれたもの（30）と羽状文を施すもの（28・29・31）がある。32の甕は体部の膨らみがみられず頸部から底部にかけて直線的な器形を呈する。体部文様も描かれず、かわりにハケナデ痕を明瞭に残す。

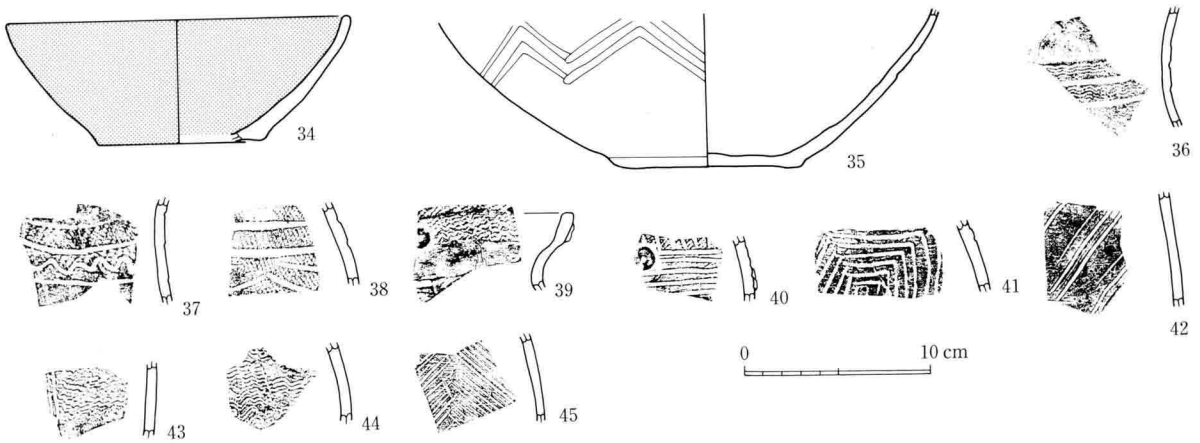
### 104号住居址（SA104）

［遺構］（15図）　Ａ区の中央東に位置し、北西隅部を除き全形を単体で露呈した。ST104と重複するが、新旧関係は不明である。形態は胴張りの隅丸方形を呈する。主軸方向は東西軸線上にあり、主軸4.55m・南北軸4.35m・最大壁高20cmの規模になる。主柱穴は４個不整方形配列である。床面は中央付近が幾分窪み、それほど堅緻なものではない。炉は住居址および主柱穴間の中央付近に設けられた地床炉である。形状は主軸方向58cm・直交軸52cm規模の不整円形を呈し、底面が５cm程鍋底状に窪み、長軸35cmの焼土塊化した火床を残す。入口の施設は南壁添いの中央に設けられ、長軸70cm・短軸50cm・深さ15cm程の楕円形土坑と長軸両脇上に小穴各１個を配置している。各壁下に周溝状の溝が巡らされるが、南壁北側は不連続である。

［遺物］（16・43・44図）　出土量は少なく、完形品はない。器種には浅鉢（34）・壷（35～38）・甕（39～45）がある。鉢は内外面共にヘラミガキ調整で赤色塗彩が施される。頸部の文様は３条の平行沈線文間に波状文を巡ら




15図　SA 104 実測図（１：80）



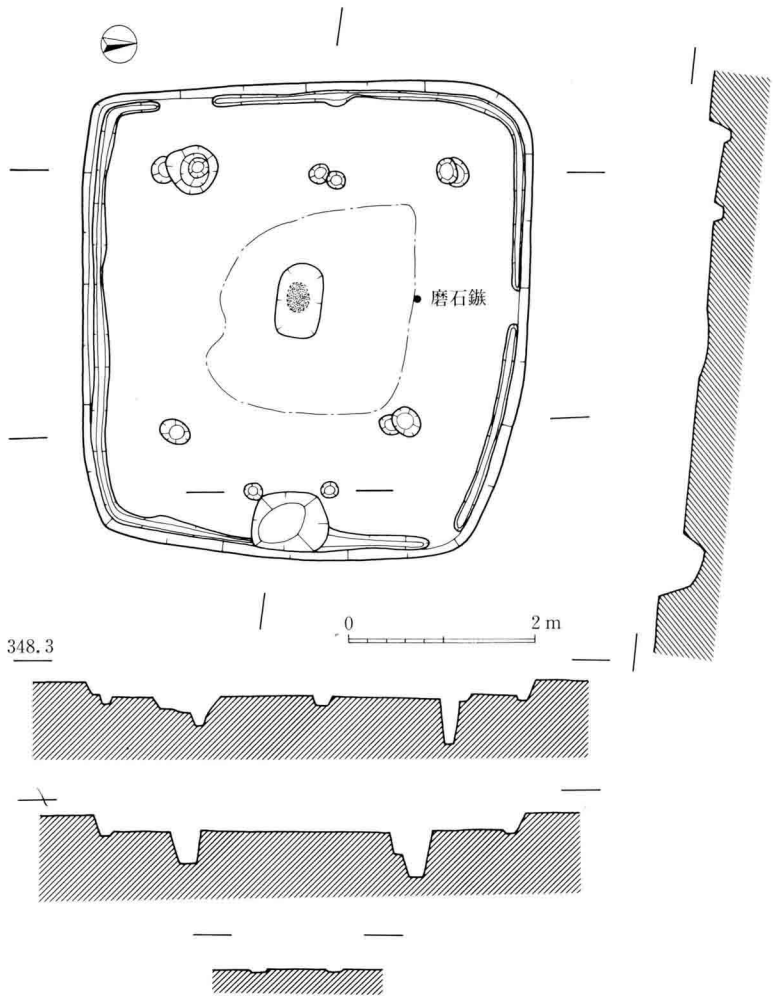

16図　SA 104 出土土器実測図・拓影（１：４）

せるもの（36）と縄文地に３条の平行沈線文・１条の篦描波状文を施文するもの（37）がある。体部下半には２条の重山形文が描かれる（35）。39は受口口縁を呈する甕で、口唇部は面取りされて縄文が、口縁部には櫛描波状文と円形貼付文が施される。体部の文様にはコの字重ね文（40・41）・羽状文（42・45）・波状文などがある。40には円形貼付文、43には縦方向の櫛描直線文がみられる。この他に土器製円板（186）・打製石鏃（199・200）・磨製石鏃（209・210）が出土している。

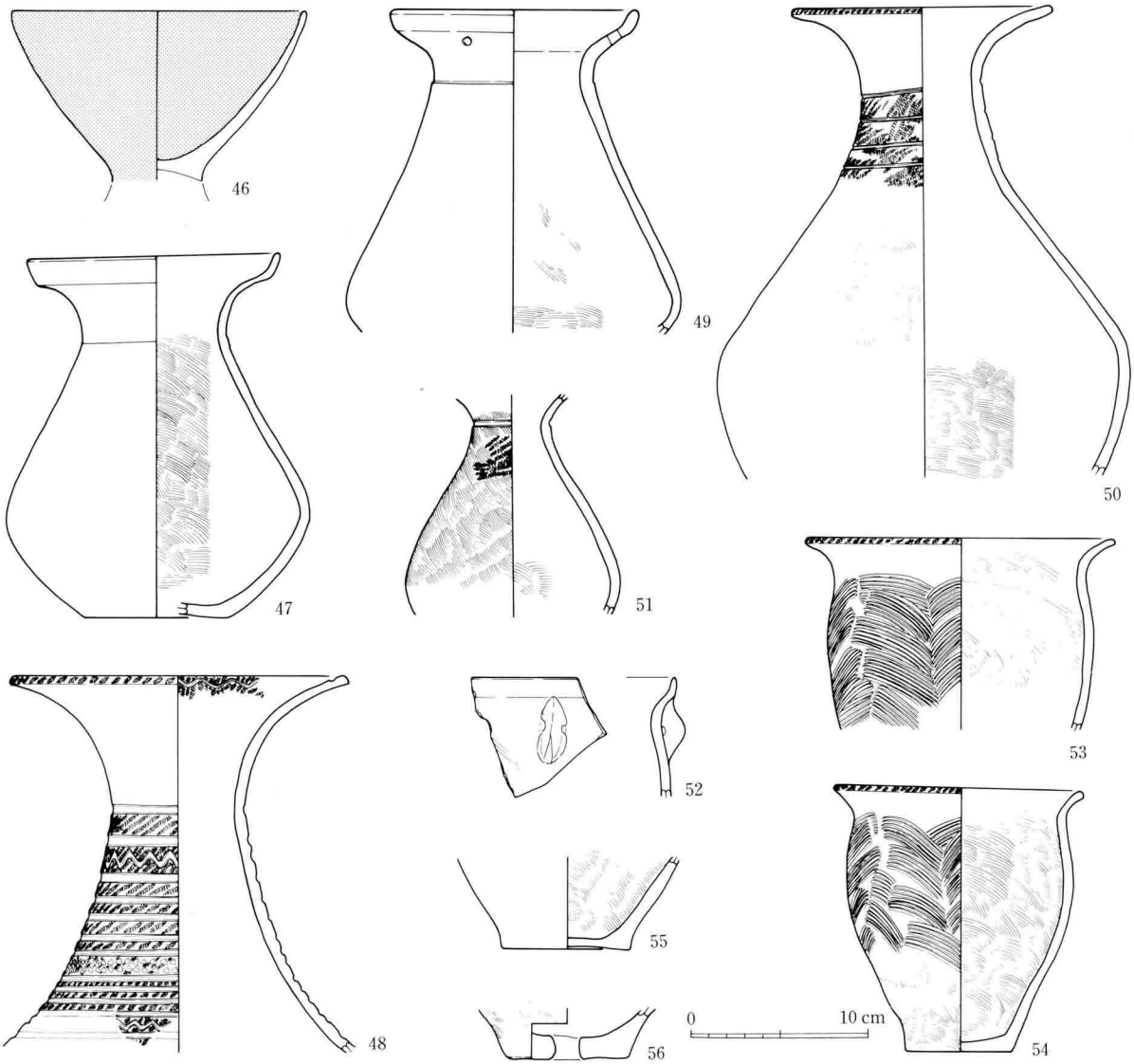
**105号住居址（SA105）**

［遺構］（17図）　Ａ区の中央に位置し、全形を単体で露呈した。重複関係にある遺構はない。形態は隅丸方形を呈するが、北壁が丸味を帯び，他の壁は直線的で、南壁の両隅は直角に近い。主軸方向はN84°Ｗを指し、主軸（東西軸）5.05m・直交軸4.7m・最大壁高20cmの規模になる。主柱穴は４個不整方形配列である。床面は東にやや傾斜を有するものの平坦で、炉の周辺は堅緻である。炉は住居址および主柱穴間の中央付近に設けられた地床炉である。形状は主軸方向80cm・直交軸48cm規模の隅丸長方形を呈し、底面が５cm程鍋底状に窪み、中央付近に直径約25cmの焼土塊化した火床を残す。入口の施設は南壁添いの中央に設けられ、長軸70cm・短軸60cm・深さ23cm程の隅丸方形状土坑と長軸両脇上に小穴各１個を配置している。各壁下に周溝状の溝が巡らされているが、不連続である。

［遺物］（18・43～45図）　出土量は比較的多いが、ほぼ完形のものは壷（47）１個体にすぎない。器種には高坏（46）・壷（47～51）・甕（52～55）・甑（56）がある。高坏は内外面共にヘラミガキされ、赤色塗彩が施される。壷の口縁部形態は受口口縁のもの（47・49）と直線的に外開するもの（48・50）ある。前者は頸部に沈線施文法により稜を形成するほかは無施文である。後者は口唇部に縄文が施され、縄文を地文とすることが共通するが文様構成に相違がみられる。48は口縁部内に縄文地山形文を描き、頸部から体部下半まで平行沈線文で区画し、その間に山形文や半月形の押引き列点文を施文する。50の文様帯は頸部に限られ４条の平行沈線文が巡る。甕は口唇部に縄文、体部に羽状文を施文する。52には粘土板による耳状装飾が施されるが個数は不明である。この他に土製紡錘車（195）・土器製有孔円板（187～194）の土製品、打製石鏃（201・202）・磨




17図　SA 105 実測図（1：80）




18図　SA 105 出土土器実測図（1：4）

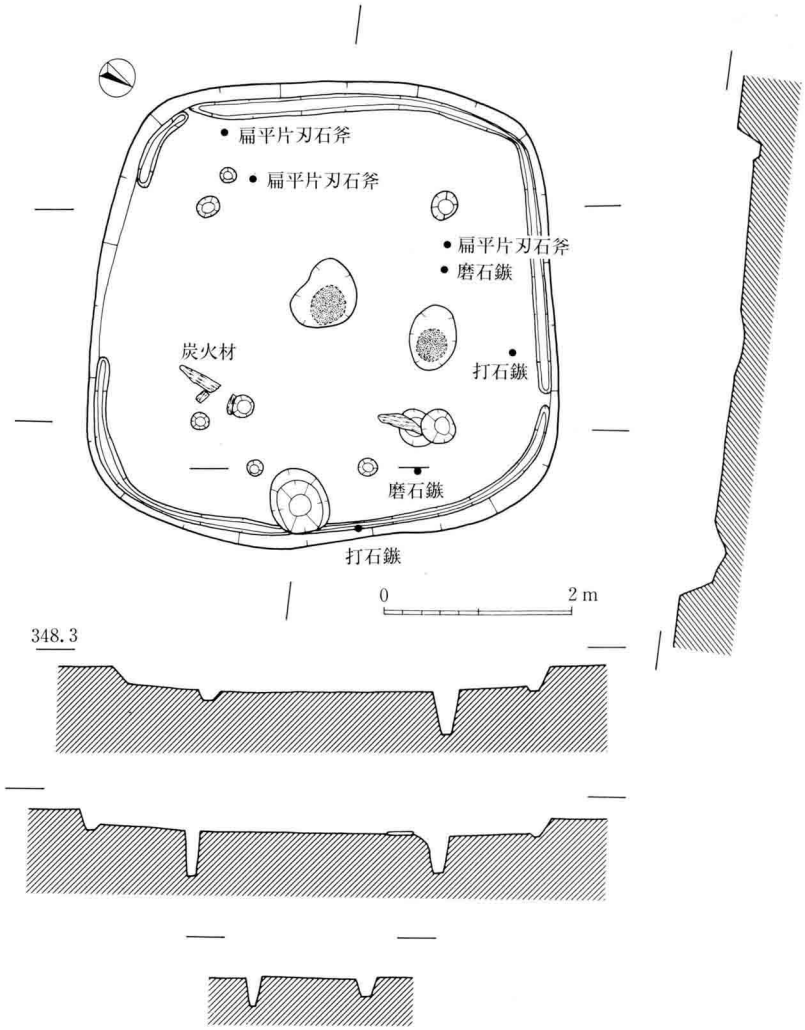
製石鏃（211～214）および同未製品（215）・石錐（221）・太型蛤刃石斧（229）・軽石製品（230）・叩き石（231）の石製品が出土している。

**106号住居址（SA106）**

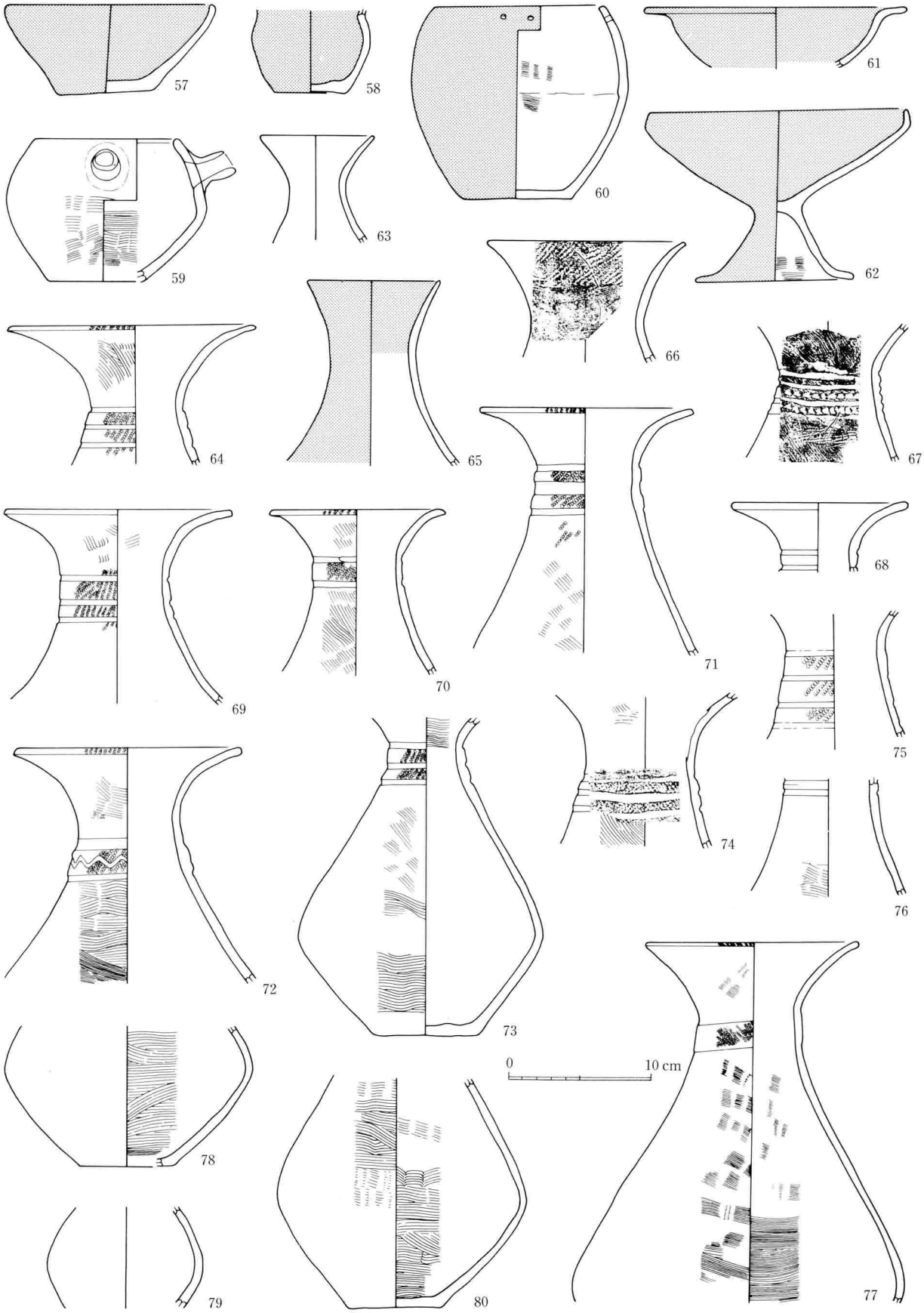
［遺構］（19図）　A区の西側に位置し、全形を単体で露呈した。重複関係にある遺構はない。形態は隅丸方形を呈するが、入口部がある東壁が長く一見台形状になる。主軸方向はN67°Eを指し、主軸（東西軸）4.95m、直交軸東壁4.9m・西壁4.4m、最大壁高27cmの規模になる。主柱穴は4個方形配列である。床面は中央に向かってやや傾斜を有し、堅緻な部分は認められなかった。炉は住居址および主柱穴間の中央付近に設けられた地床炉である。形状は主軸方向70cm・直交軸70cm規模の不整円形を呈し、底面が10cm程鍋底状に窪み、直径約36cmの焼土塊化した火床を残す。また、北壁に併行する主柱穴間にも地床炉とみられる楕円形掘り込みを伴う火床が存在する。規模は長軸70cm・短軸50cm・深さ5cmである。入口の施設は東壁添いの中央付近に設けられ、主軸方向70cm・短軸65cm・深さ16cm程の楕円形状土坑と短軸両脇上部に小穴各1個を配置している。各壁下に周溝状の溝が巡らされ

ているが、南壁に空白部分がある。この住居址はいわゆる焼失住居で床面に炭化材が残存し、石器を含め多量の土器が出土している。

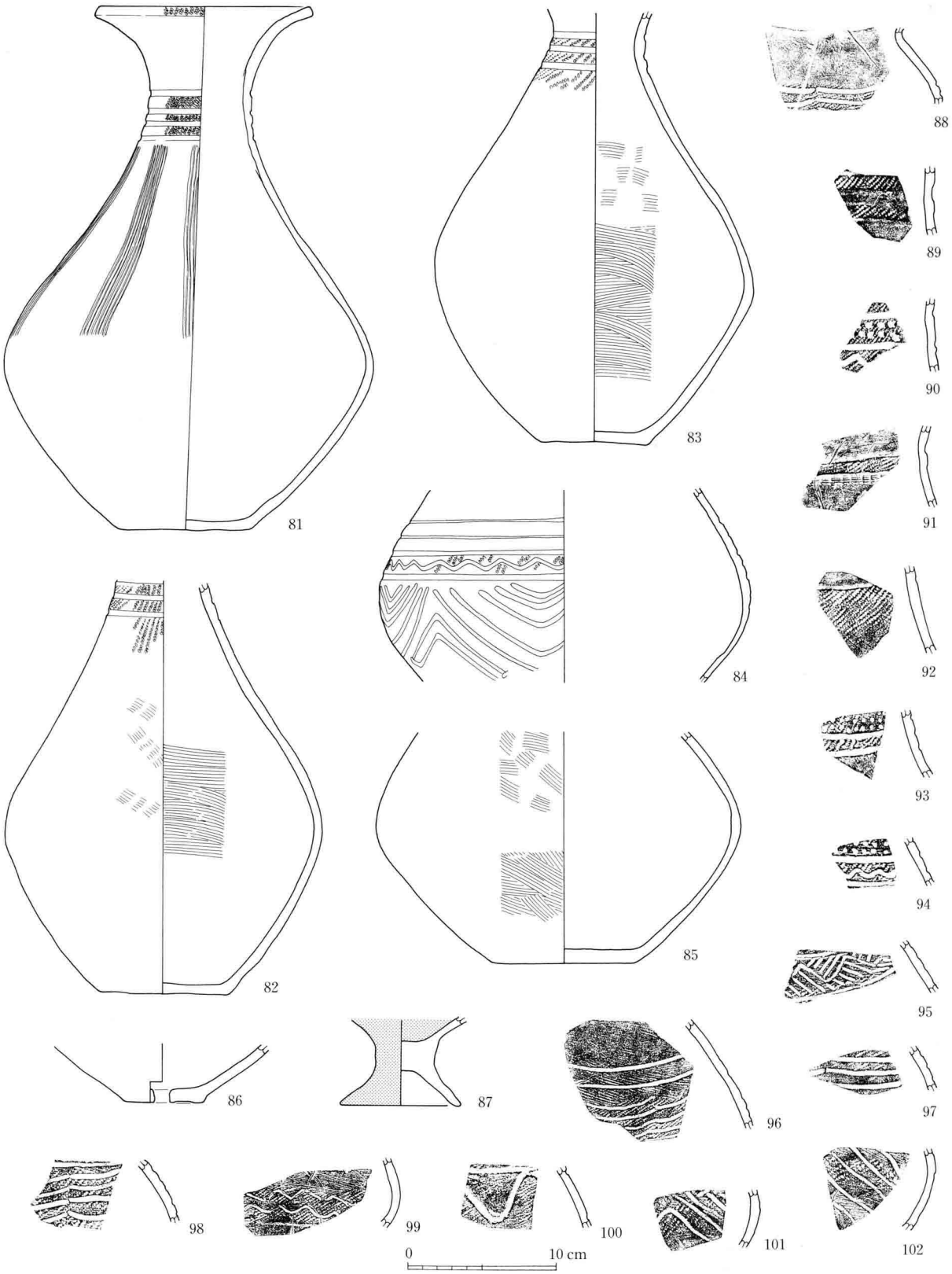
［遺物］（20～22・43～45図） 器種は多彩で浅鉢（57）・鉢（58・60）・注口鉢（59）・高坏（61・62・87）・細口壷（63・65）・壷（64・66～102）・甕（103～110・113～134）・台付甕（111・112）・甑（86）が出土している。浅鉢・鉢・高坏・細口壷は内外面共にヘラミガキが施され赤色塗彩される。ただし、60の内面および細口壷の口縁部以外の内面は赤色塗彩が施されていない。壷の文様は口唇部が面取りされ縄文が施されるもの（64・70～72・77・81）、頸部の平行沈線文によって区画された微隆帯に地文の縄文が残るもの（64・69～75・77・81～83・89～94）が多く、総体的にはこの部位に限定された文様帯を構成する。これに廉状文（91）・半円形の連続刺突文（68・90）・山形文（72・90）などが加飾される。体部の文様には垂下する櫛描直線文（81）、中位に平行沈線文（84・96～98）・曲線的な不連続平行沈線文（96～98）・円形の連続刺突文（93・94）・山形文（84・94）・山形文に斜行短線文を充填するもの（95）などが施文される。下半部には重山形文（84・101・102）・不連続平行山形文（99）などがみられる。甕の口縁部形態は外開口縁のものと受口口縁のもの（105・114～117）がある。両形態とも口唇部に縄文が施されているが、後者の口縁部文様には波状文（105・114）・縄文地に山形文（115・116）・縄文のみのもの（117）がある。頸部は波状文（106～109）・廉状文（103・107・118～121・127・131）・直線文（110・127）が施文される。体部施文は横位の波状文のみのもの（104・105・117・125・133）、これに斜行または垂下する篦描沈線文で加飾するもの（121・122・124・130）、斜行または垂下する櫛描波状文のもの（110・118・126・127）そして羽状文を主体とするもの（103・106～108・119・120・131・132・134）などがみられる。この他にミニチュア赤彩注口土器（178）・同壷形土器（179）・形態不明土製品（180）・土器製円板（196・197）の土製品、打製石鏃（203・204）・磨製石鏃（216）・石錐（223）・扁平片刃石斧（224・230・231）・石槌（232）・磨石（234）・台石（246）の石製品が出土している。



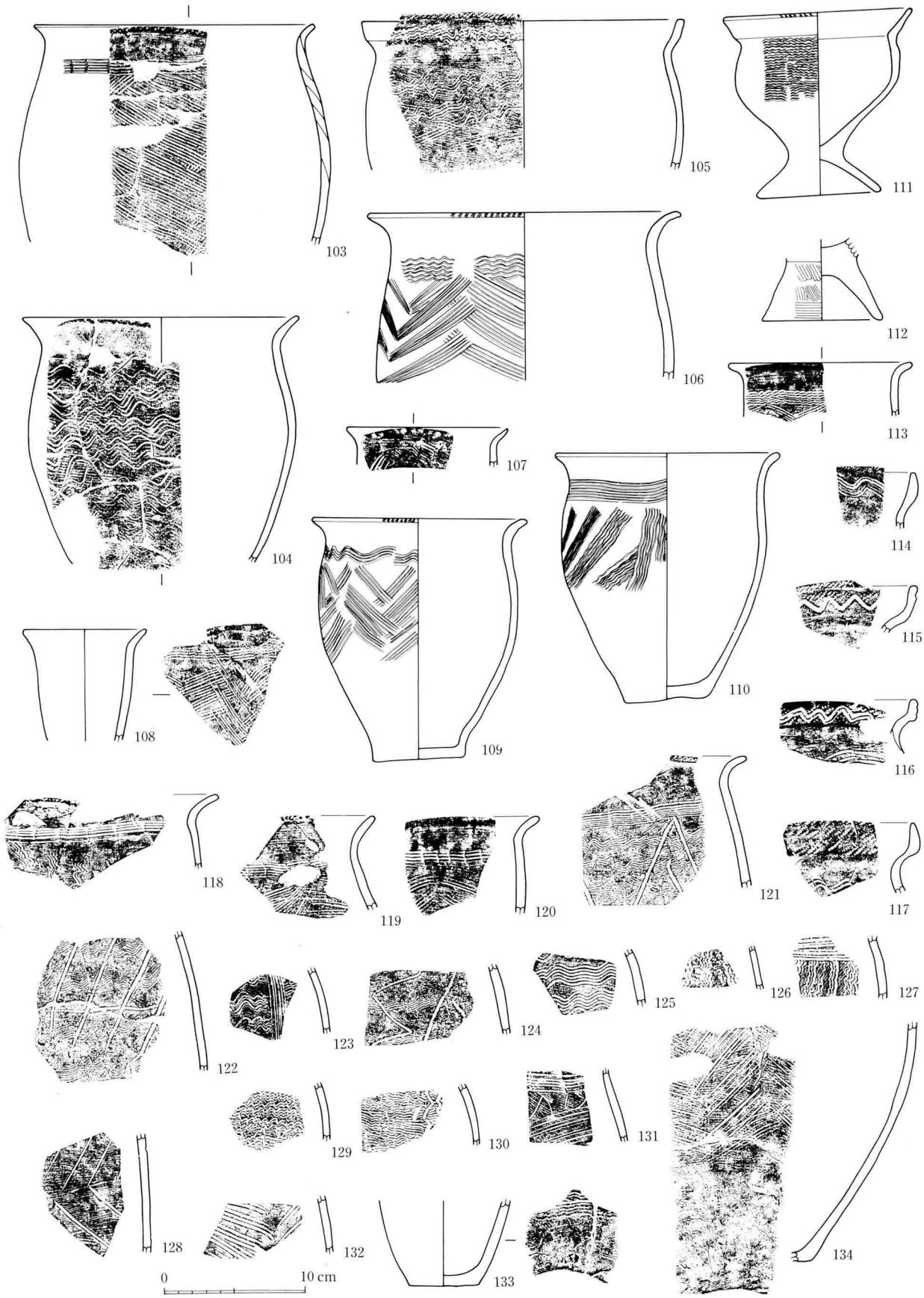

19図　SA 106 実測図（1：80）




20図　SA 106 出土土器実測図①（1：4）




21 図　SA 106 出土土器実測図②・拓影（1：4）

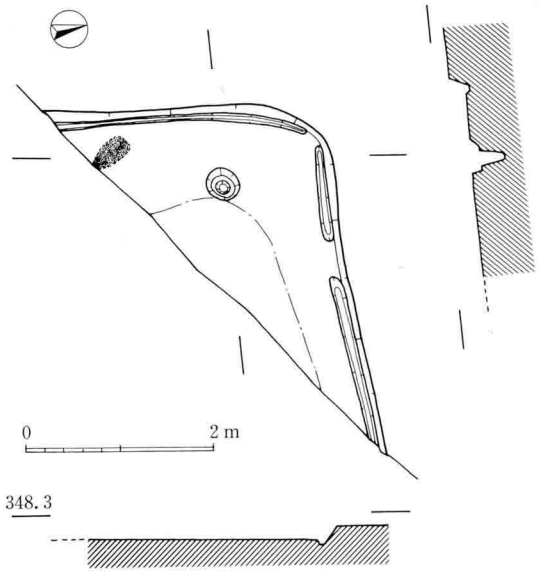



22図　SA 106 出土土器実測図③・拓影（1：4）

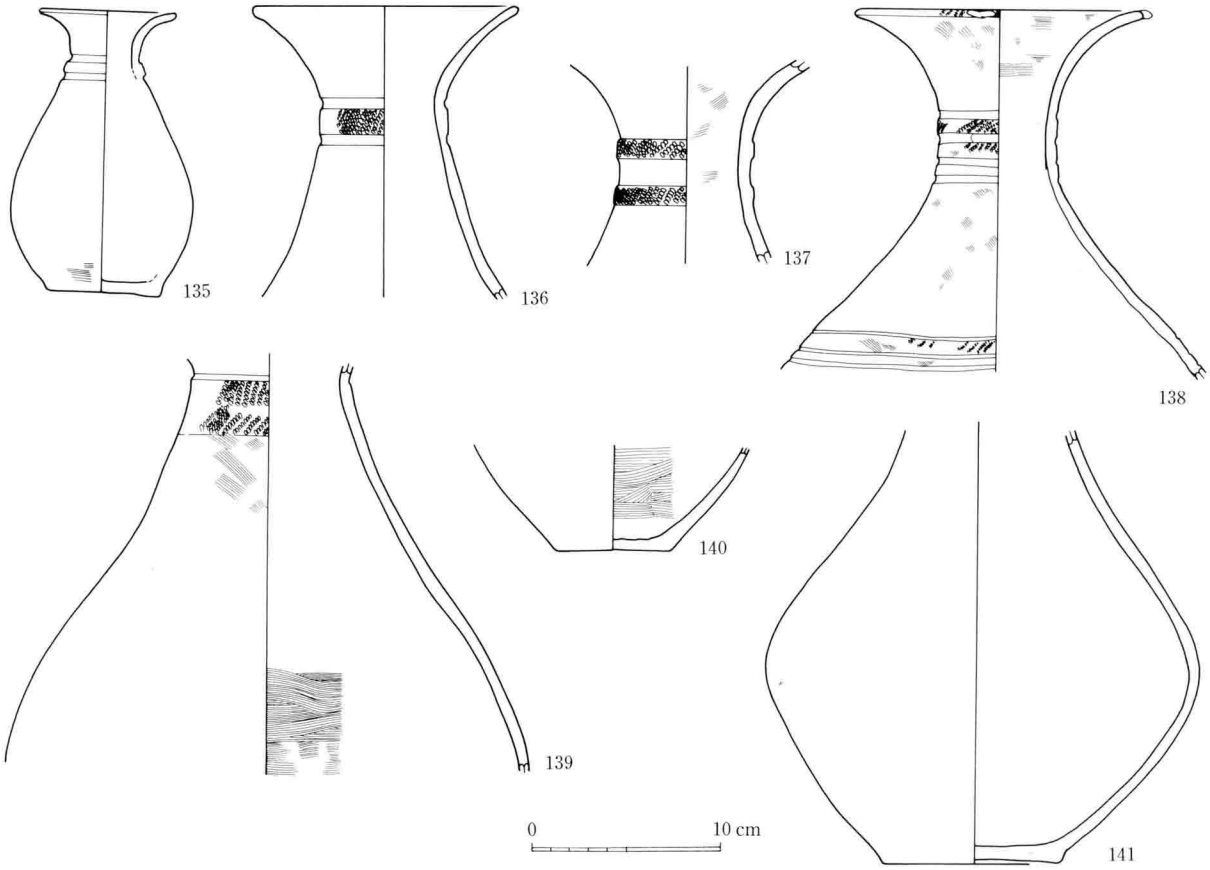
### 107号住居址（SA107）

［遺構］（23図）　A区の中央付近に位置するが、調査では北西隅の一部を確認したにすぎない。形態は隅丸方形と推測されるが、規模等は不明である。北壁の方向から主軸方向はほぼ東西を指すものと思われる。主柱穴は1個検出され、また堅緻な床面の範囲から4個方形配列を予想する。床面は平坦で主柱穴間が堅緻なものと推定される。

［遺物］（24図）　遺構の検出状況の割には実測個体が多く、それもすべて壷である。文様は口唇部と頸部に多くみとめられ、体部では縄文地平行沈線文を描くもの（138）1個体がみられるだけである。口唇部には縄文が施され、頸部は平行沈線文に区画された微隆帯に縄文がみられるもの（136～139）とみられないもの（135）がある。




23図　SA 107 実測図（1：80）



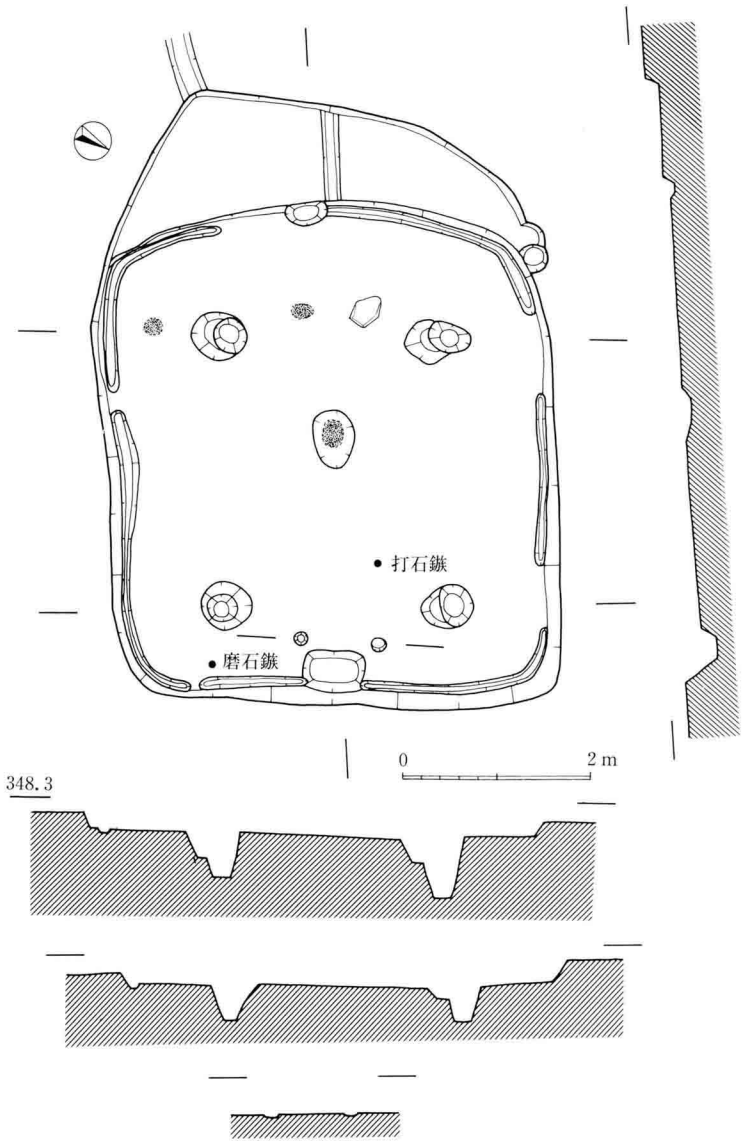

24図　SA 107 出土土器実測図（1：4）

### 108号住居址（SA108）

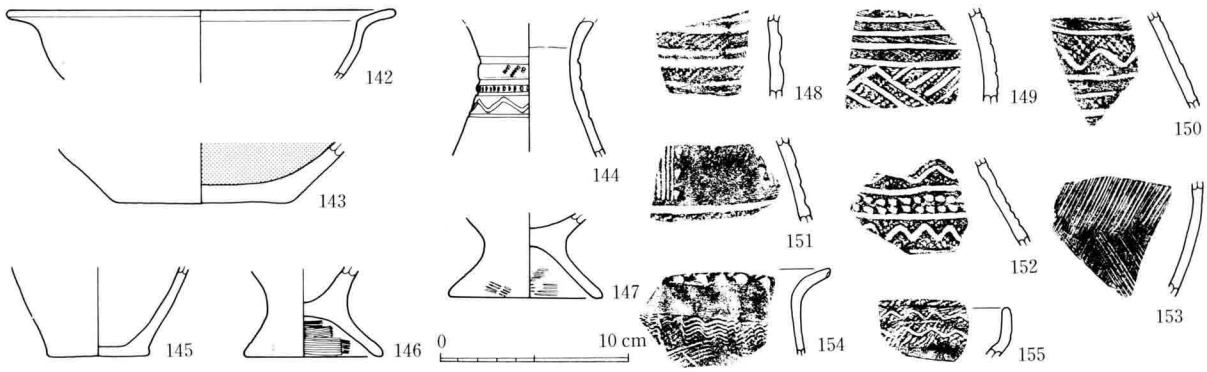
［遺構］（25図）　A区の東端に位置し、全形を単体で露呈した。SC102と重複関係にあり、この遺構よりも古い。また、主軸方向西壁は性格不明の竪穴状遺構と重複し、これを切り込んでいる。形態は隅丸長方形を呈する。主

軸方向はN60°Eを指し、主軸（東西軸）5.35m・直交軸4.8m・最大壁高25cmの規模になる。主柱穴は4個長方形配列である。床面は平坦で北・東に傾斜を有し、堅緻な部分は確認されない。炉は住居址および主柱穴間の中央に設けられた地床炉である。形状は主軸方向60cm・直交軸40cm規模の楕円形を呈し、底面が6cm程鍋底状に窪み、直径35cmのやや焼土塊化した火床を残す。西壁に併行する主柱穴間に焼土と扁平な自然石が認められた。入口の施設は南壁添いの中央に設けられ、長軸65cm・短軸40cm・深さ10cm程の隅丸長方形土坑と長軸両脇上に小穴各1個を配置している。東壁と西壁下に不連続な周溝状の溝が巡る。

［遺物］（26・44・45図）　住居址の露呈規模の割には土器の出土量は少なく、すべて破片である。器種には高坏（142）・浅鉢（143）・壷（144・148～152）・甕（145・153～155）・台付甕（146・147）がある。高坏・浅鉢は内外面共にヘラミガキが施され赤色塗彩される。壷の頸部文様は平行沈線文で区画された微隆帯に縄文（144・148）・半月形の連続刺突文（144）・山形文（144）がみられる。体部上半の文様には平行沈線文（149～152）・重山形文（149）・山形文（150・152）・連続刺突文（152）・縦位の直線文と刺突文（151）などがある。甕の口唇部には連続刺突文（154）・縄文（155）が施され、頸部に波状文（154）、体部に羽状文（154）が施文される。155は受口の口縁部で2条の山形




25図　SA 108 実測図（1：80）




26図　SA 108 出土土器実測図・拓影（1：4）

文がみられる。この他に打製石鏃（205）・磨製石鏃（217～219）・台石（247）が出土している。

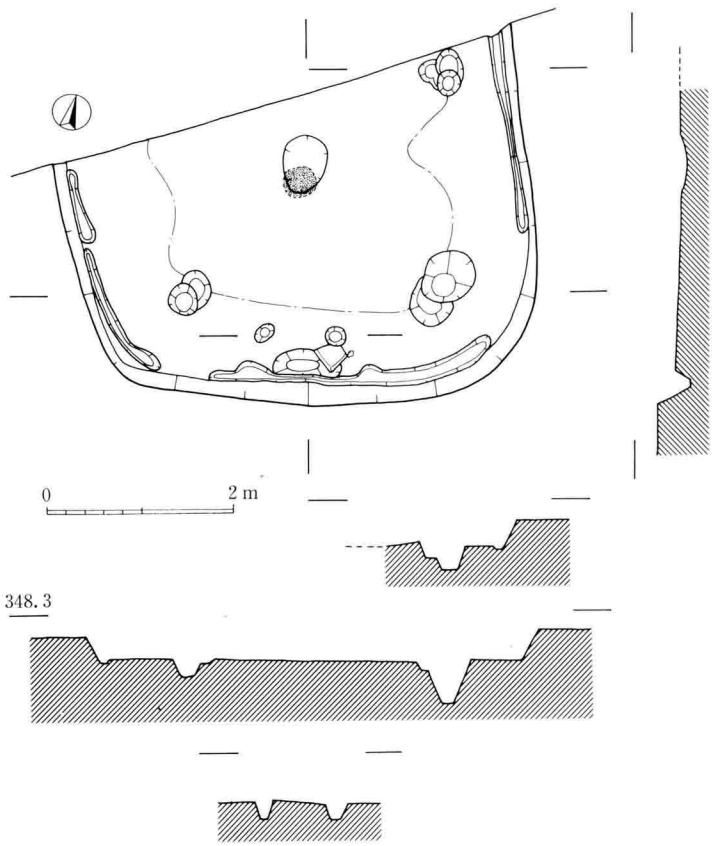
**109号住居址（SA109）**

［遺構］(27図)　B区の東側に位置するが、調査では北側が調査区域外に延びているため南半分程を露呈したにすぎない。形態は隅丸方形と推測され、主軸の規模等は不明であるが、直交軸4.4m前後を測る。主柱穴は3個確認され、4個方形配列になるものと思われる。炉は住居址および主柱穴間の中央に設けられた地床炉である。形状は主軸方向60cm・直交軸35cm規模の楕円形を呈し、底面が16cm程鍋底状に窪み、中央付近に直径32cmのやや焼土塊化した火床を残す。床面は北・東に傾斜を有するが、平坦で主柱穴間内は堅緻である。南壁添いの中央付近に長軸70cm・短軸26cm・深さ18cm程の楕円形土坑と長軸両脇上部に小穴各1個を配置している。各壁下に不連続な周溝状の溝が巡らされている。

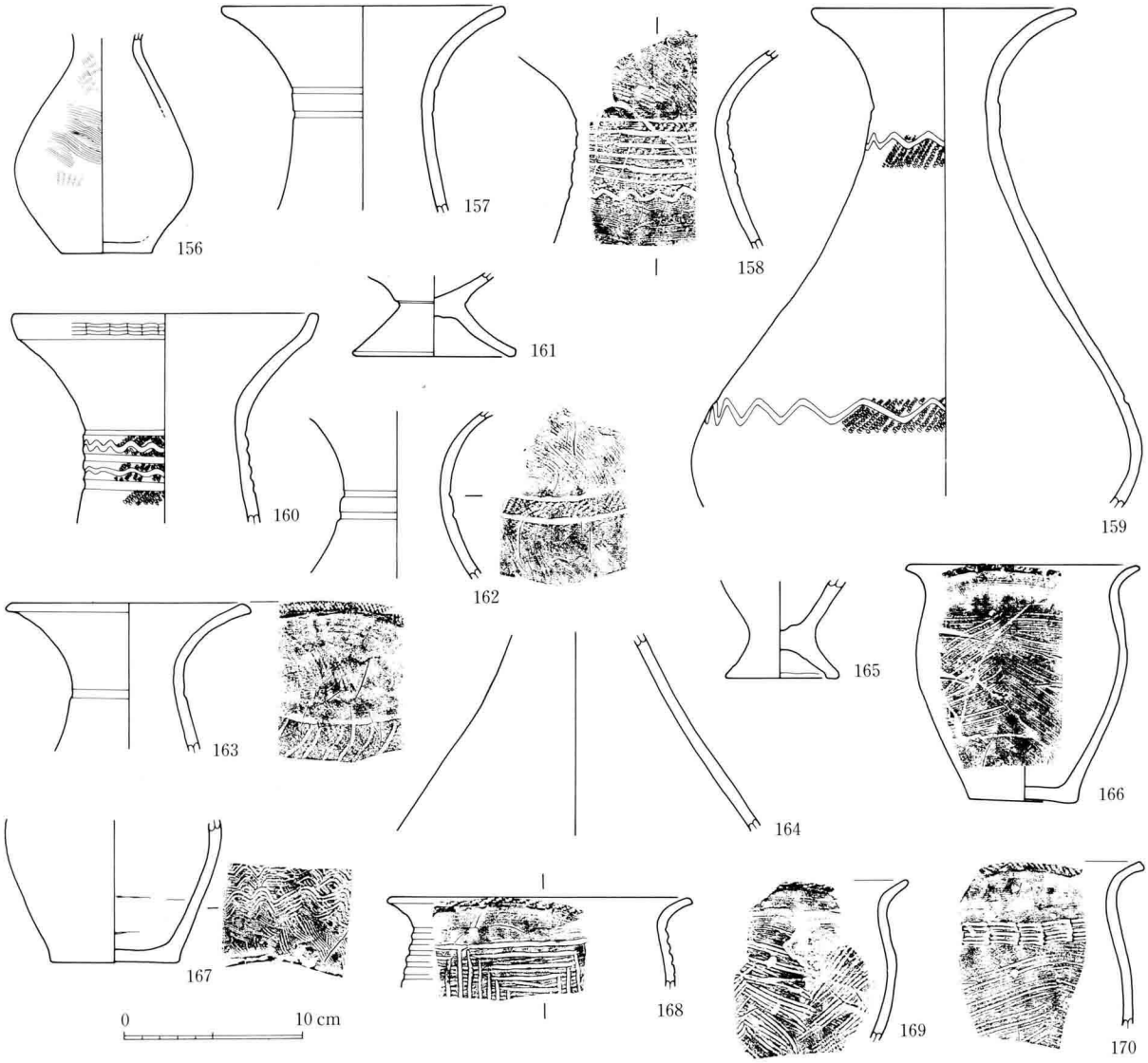
［遺物］(28・44・45図)　出土量は比較的多い。器種には内外面が赤色塗彩された高坏（161）・壷（156～160・162～164）・甕（166～170）・手捏ね様の台付甕（165）がある。160は受口口縁で口唇部が面取りされ、縄文が施される。口縁部には1帯の廉状文が巡る。壷の頸部文様は無紋のもの（156）、2条の平行沈線文のみのもの（157）、縄文地のままのもの（162）、山形文を加飾するもの（158～160）などがある。体部文様は頸部下から斜行曲線文風をなすもの（163）、縄文地に1条の山形文を巡らすもの（159）がある。甕は口唇部に縄文が配され、頸部に廉状文を巡らすもの（170）、体部に波状文（167）・羽状文（166・169・170）・コの字重ね文（168）などが施文される。この他に鑿形片刃石斧（225）・有孔垂玉（226）・磨石玉（227）・打製石器（236・237）・磨石（241）が出土している。

### (2) 環状溝址

円形または長円形を呈する浅い溝が巡る遺構である。高速道地点の調査事例では検出面より上層で火床や床面と推定される堅い面が確認されており、また、周溝に沿って柱穴であろう規格性のある小穴があることなどから、平地式住居址と考えられている。また、周溝は周堤構築のために掘られ、排水用機能もあったようである。今回の調査では周溝と土坑・小穴のみを検出した。また、住居址等と重複関係にあるものはこの遺構よりも新しい。環状溝址は弥生時代中期後半のみに限定され、松原遺跡において集中的に認められている。中野市の栗林遺跡からも検出されていることから、今のところ千曲川右岸の自然堤防上に展開しているものと思われる。




27図　SA 109 実測図（1：80）



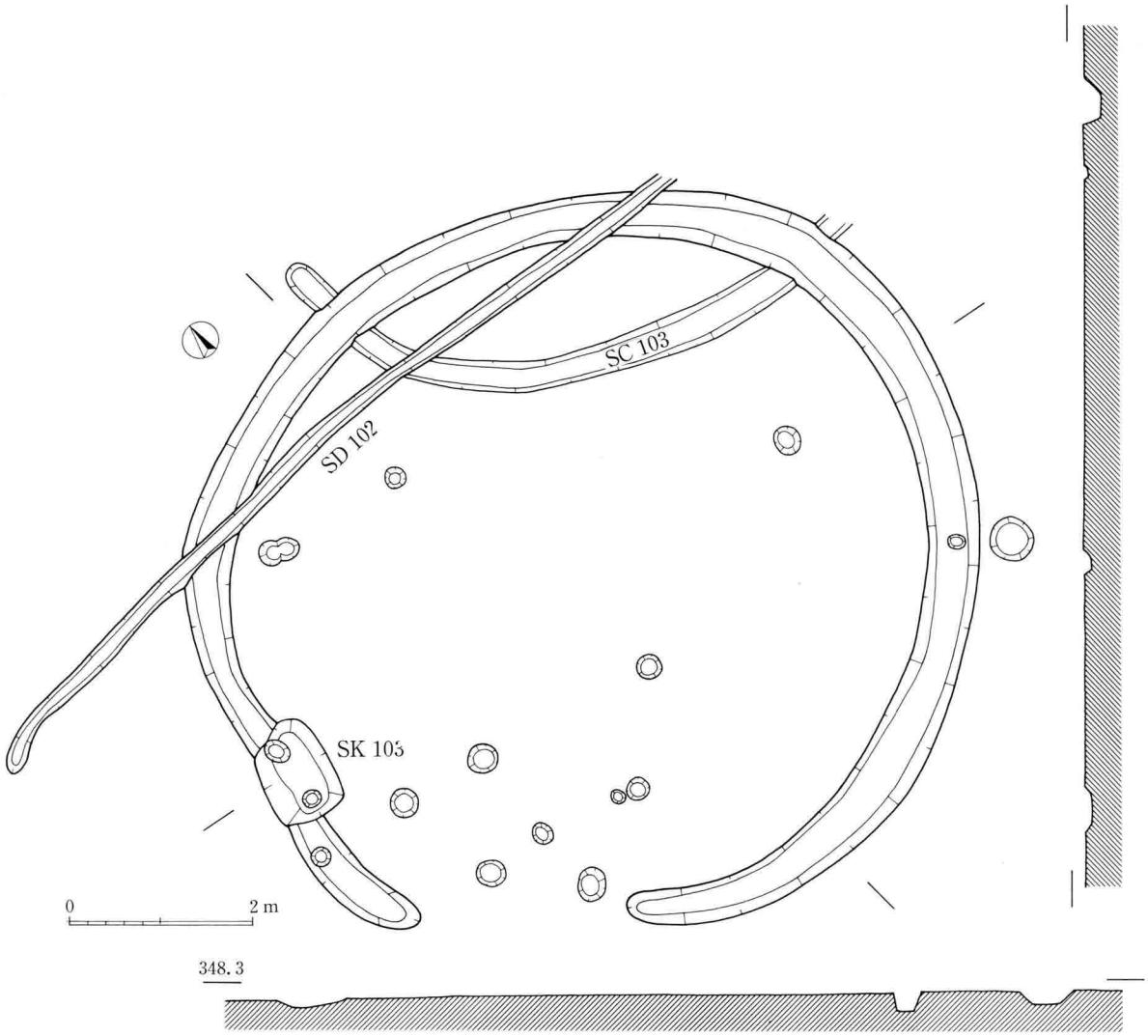

28図　SA 109 出土土器実測図・拓影（1：4）

**101号環状溝址（SC101）**

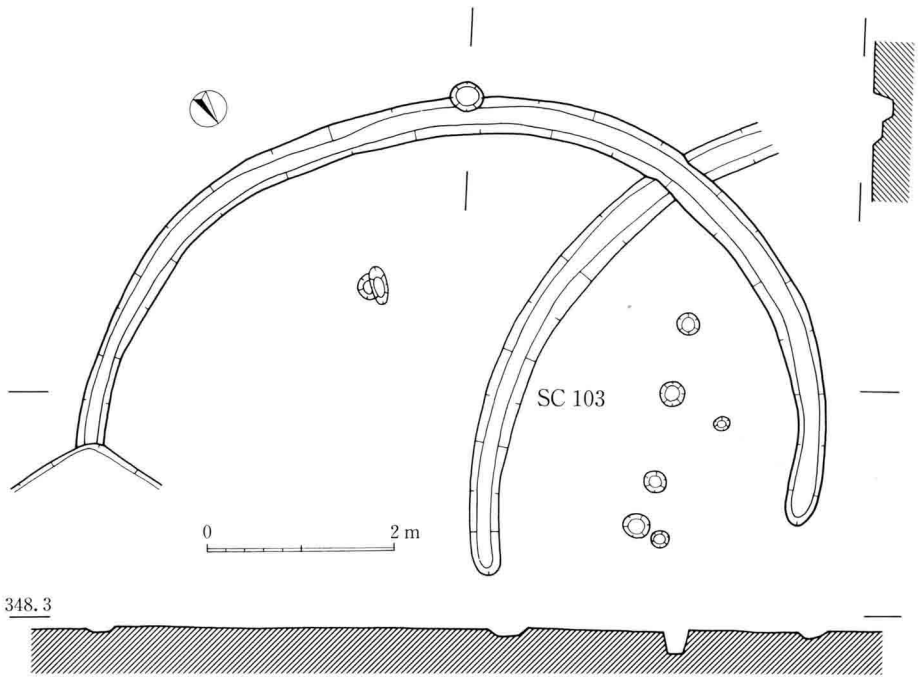
［遺構］（29図）　A区の東端に位置し、SA101・SC103・SD102と重複する。溝址間の新旧関係は不明であるが、本遺構は全形を単体で確認されている。形態は正円形に近く、外法の規模は東西軸8.9m・南北軸8.3mを測る。溝は幅40～65cm・深さ10～15cmの規模で、断面がU字形を呈する。周溝は南西部で約2.2mの空域が存在する。この空域部に2個の小穴があり、入口部と想定される。また、南の周溝部に長軸110cm・短軸80cm・深さ10cm程の隅丸長方形状の土坑（SK103）が掘り込まれており、2個の小穴を内包している。住居址の入口施設の在り方を参考にするとこの遺構の方が妥当性があるように思う。これが正しければ主軸方位はほぼ東西軸線上にある。周溝域内に12個の小穴を確認したが、柱穴としての小屋組配列は認められない。

**102号環状溝址（SC102）**

［遺構］（30図）　A区の東側に位置し、SA108・SC103と重複する。溝址間の新旧関係は不明であるが、本遺構は全形を単体で確認されている。調査で検出した溝址は長円形の南半分程を検出した。もともとこの半截円形で完




29 図　SC 101、SD 102、SK 103 実測図（1：80）

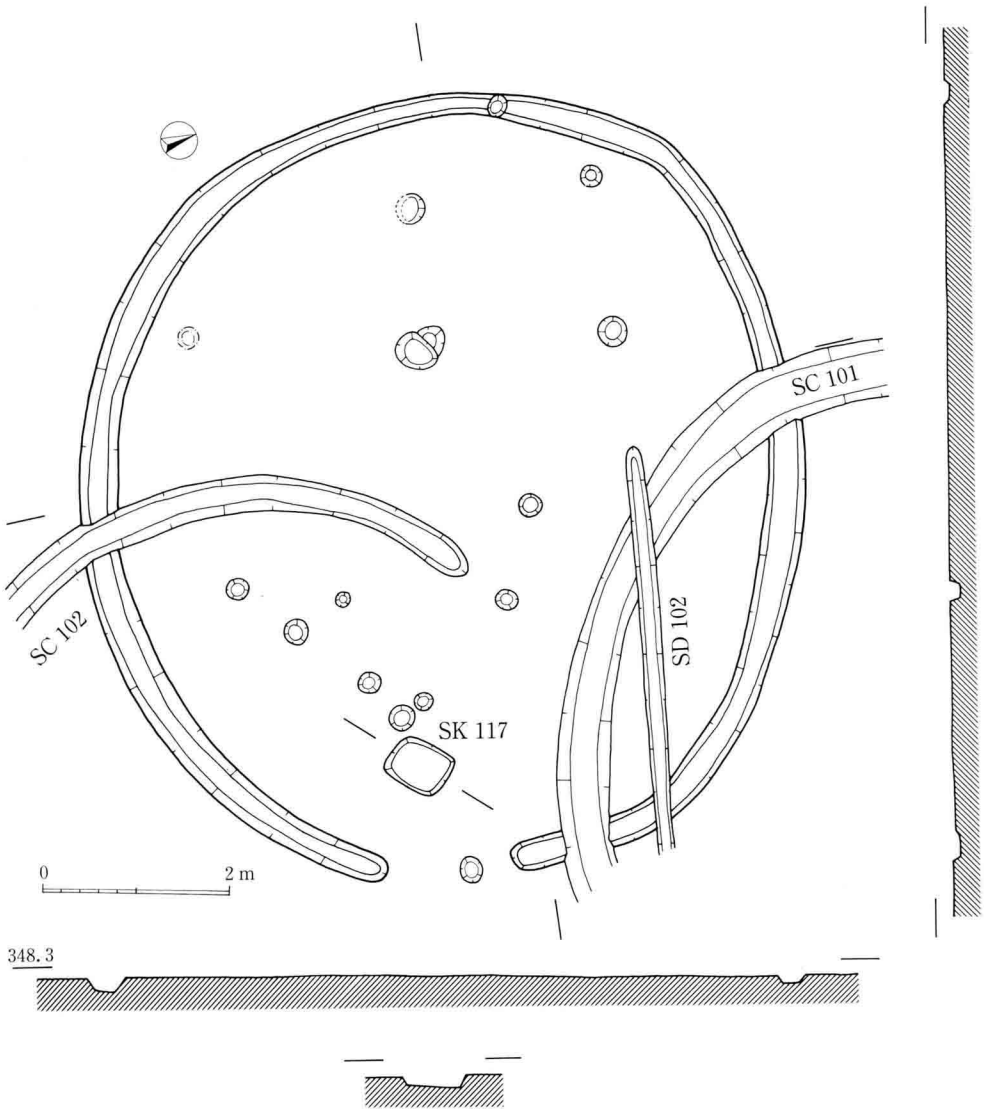



30 図　SC 102 実測図（1：80）

形なのか、溝自体が浅いため確認時に除去してしまったのか不明である。はたまた成形途上なのかもわからない。外法の規模は東西軸7.9m・南北軸（東西軸との交叉部まで）4.1mを測る。溝は幅30～40cm・深さ4～10cmの規模で、断面がU字形を呈する。入口部と想定される施設はみあたらない。北西部に集中して複数の小穴が存在するが、本遺構に付属するものではなく、SC103のものと考えられる。そうすれば本遺構に伴う小穴は皆無に近い。東西軸はN50°W方向を指す。

**103号環状溝址（SC103）**

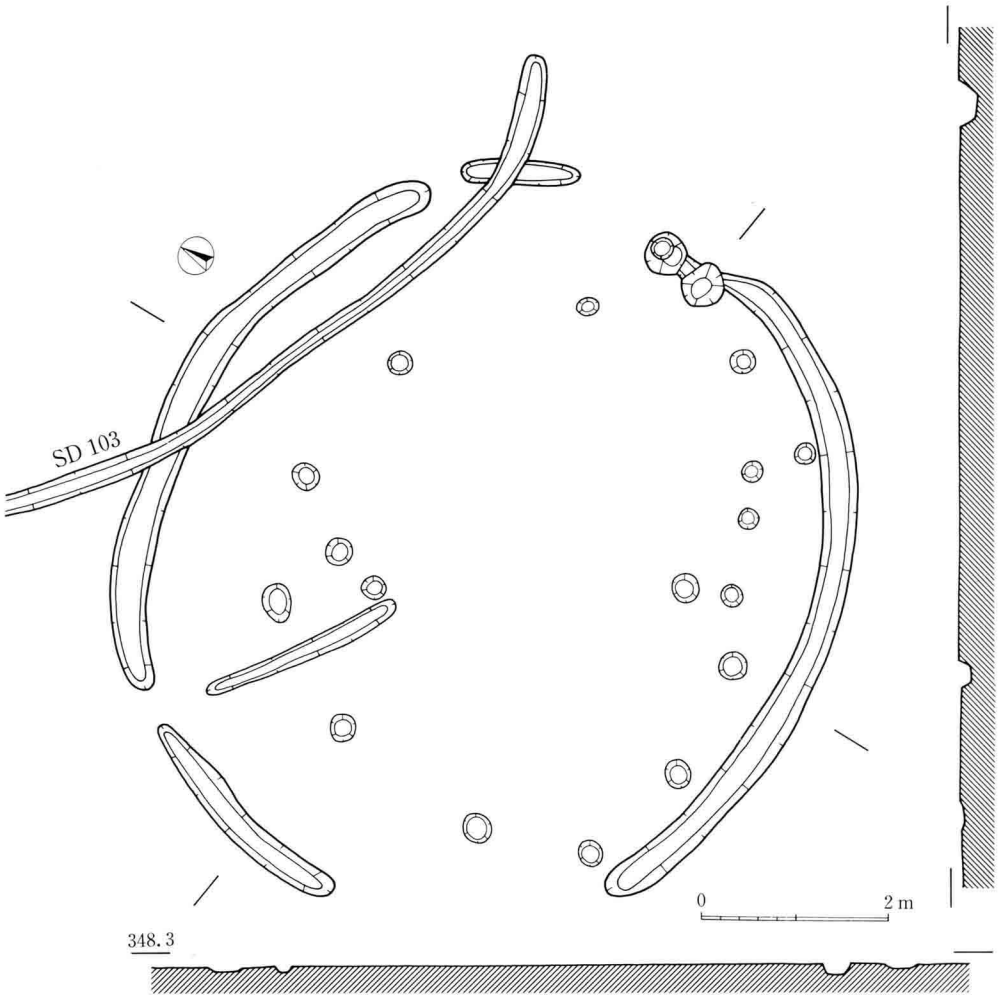
［遺構］（31図）　A区の東側遺構群の一つで、SA103、SC101・102、SD102と重複する。溝址間の新旧関係は不明であるが、本遺構は全形を単体で確認した。形態は東西方向の規模が大きい長円形を呈し、外法の規模は東西軸8.35m・南北軸7.65mを測る。溝は幅20～30cm・深さ6～12cmの規模で、断面がU字形を呈する。周溝は南西部で約1.3mの空域が存在する。この空域部に1個の小穴があり、入口部と想定される。これが正しければ主軸方位をN81°Wに求める。周溝域内に複数の小穴を確認し、SA103内の小穴を加えると南側に不規則ながら一応の柱穴としての小屋組配列は認められるが、北側からは小穴が確認されない。




31図　SC 103、SK 117 実測図（1：80）

### 104号環状溝址（SC104）

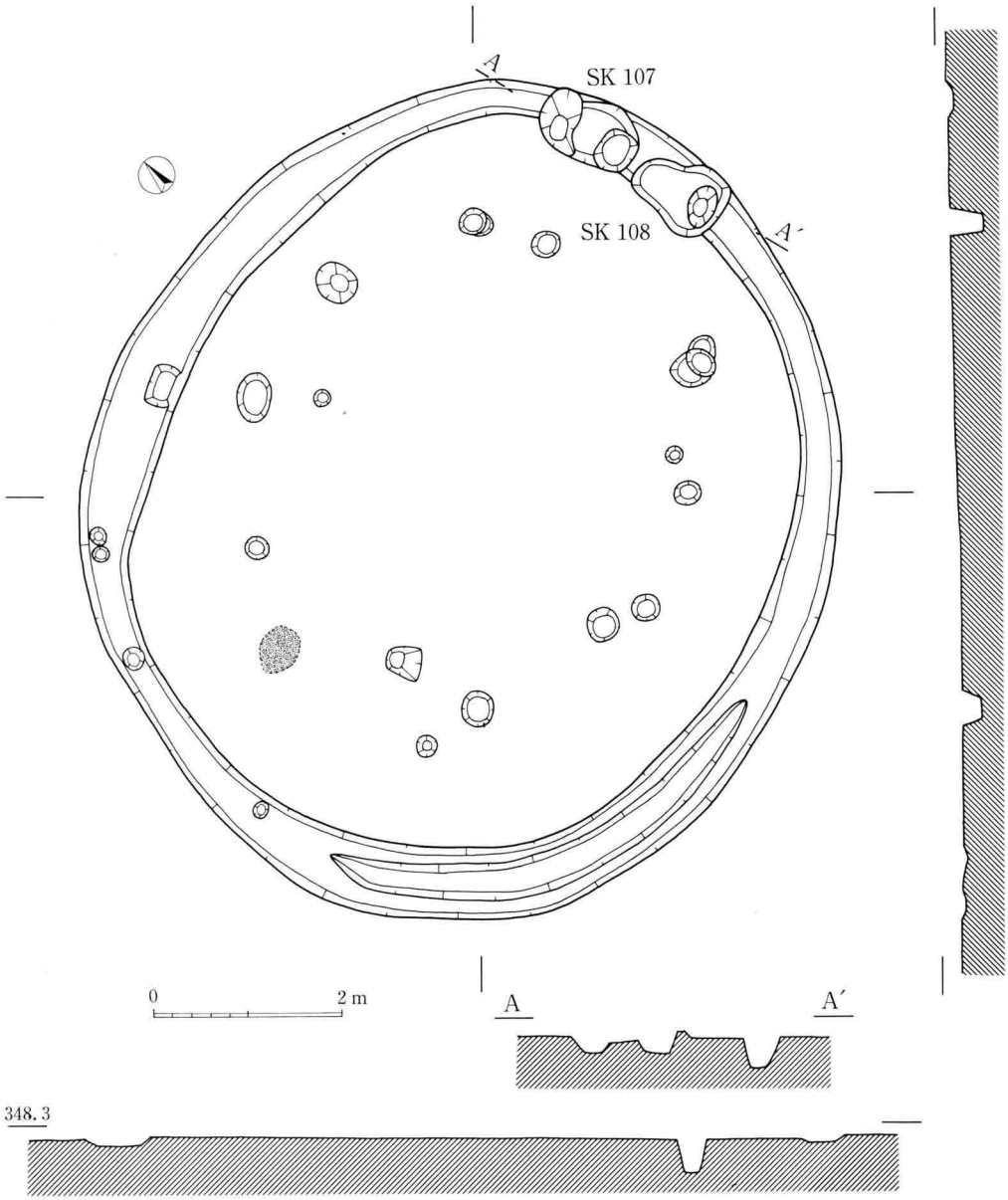
［遺構］（32図）　A区の中央付近に位置する。SD103と重複するが、新旧関係は不明である。本遺構は全形を単体で確認したが、不連続で複数の空域が存在する。全体の形態は長円形で、外法の規模は東西軸8.1m・南北軸7.5mを測る。溝は幅30～40cm・深さ5～8cmの規模で、断面がU字形を呈する。周溝は東と西に各2カ所の空域があり、特に南西部の約1.0mの空域と連結する2個の小土坑に注目し、入口部と想定する。他の空域は溝自体が浅いことから消滅し、本来は連続していた可能性がある。主軸方位はほぼ東西軸線上にある。周溝域内に多数の小穴が確認され、南と東に偏在するが、柱穴として楕円状の小屋組配列になる。




32図　SC 104 実測図（1：80）

### 105号環状溝址（SC105）

［遺構］（33図）　A区の中央に位置し、全形を単体で検出した。形態は長円形呈し、外法の規模は東西軸8.8m・南北軸7.9mを測る。溝は全周し、南西部が直線にして約4.7mにわたって2重周溝になる。規模は幅35～75cmと格差が大きく、深さ6～10cmを測る。溝の断面はU字形を呈する。また、北東の周溝部に長軸100cmと110cmの不整卵形土坑（SK108）・隅丸長方形状の土坑（SK107）が掘り込まれており、前者には1個・後者には2個の小穴を内包している。入口部の施設と考えられる。これが正しければ主軸方位はN72°Eにある。周溝域内に多数の小穴が確認され、楕円形配置のものをもって柱穴とする。北西の柱穴配列の外に長軸50cm・短軸40cm程の焼土が認められたが、火床は焼土塊化していない。




33図　SC 105、SK 107・108 実測図（1：80）

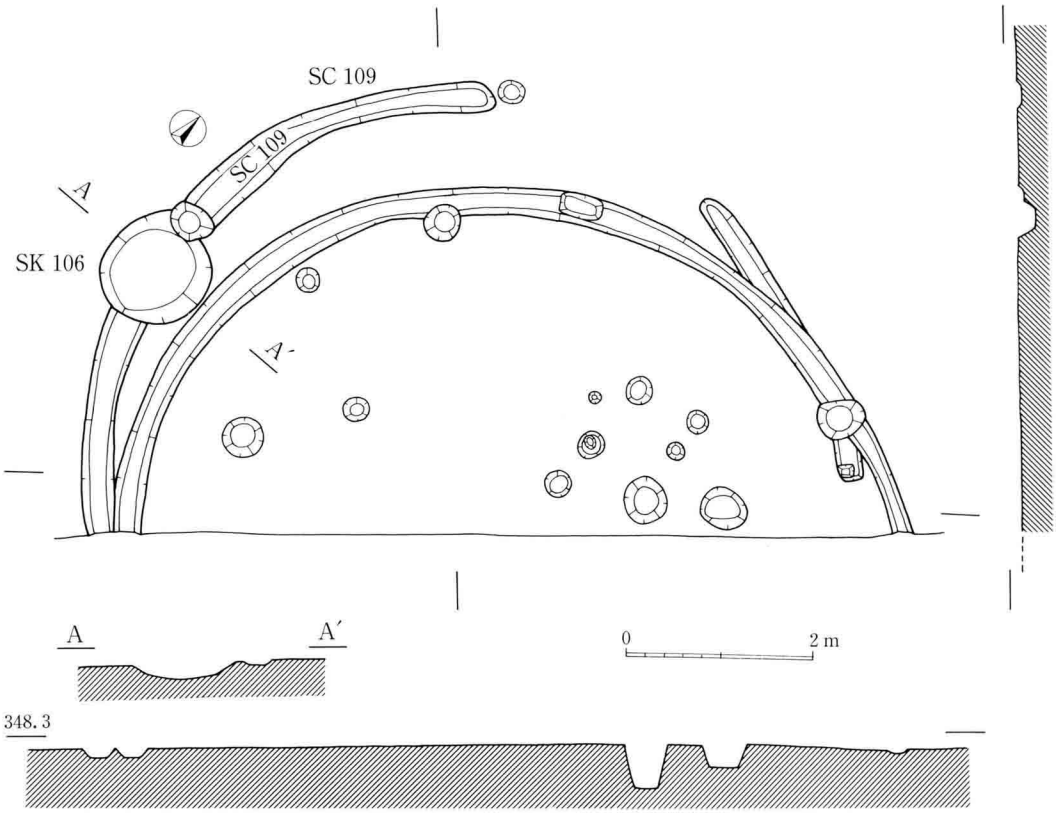
［遺物］（45図）　遺構内から磨製石包丁（228）が出土している。

**106号環状溝址（SC106）**

［遺構］（34図）　A 区の西端に位置する。SC109と大部分が重複するが、新旧関係は不明である。南側半分程が調査区外に伸びているため、規模および内部施設等は不明である。検出範囲からの所見では、溝が全周し、形態が長円形を呈し、長軸がほぼ東西方向にあるものと思われる。規模は検出範囲での東西軸8.4m を測る。溝は幅20～35cm・深さ５～８cmの規模で、断面がＵ字形を呈する。溝域内に多くの小穴が確認されたが、偏在しており柱穴として小屋組配列は認められない。

**107号環状溝址（SC107）**

［遺構］（35図）　B 区に位置し、SC108と大部分が重複する。北側半分程が調査区外に伸びているため、規模および内部施設等は不明である。検出範囲からの所見では溝が全周し、形態が長円形を呈し、長軸がほぼ東西方向にあるものと思われる。規模は検出範囲で東西8.7m を測るが、軸線の規模はこれよりも大きな数値になる。溝は幅




34図　SC 106・109、SK 106 実測図（1：80）

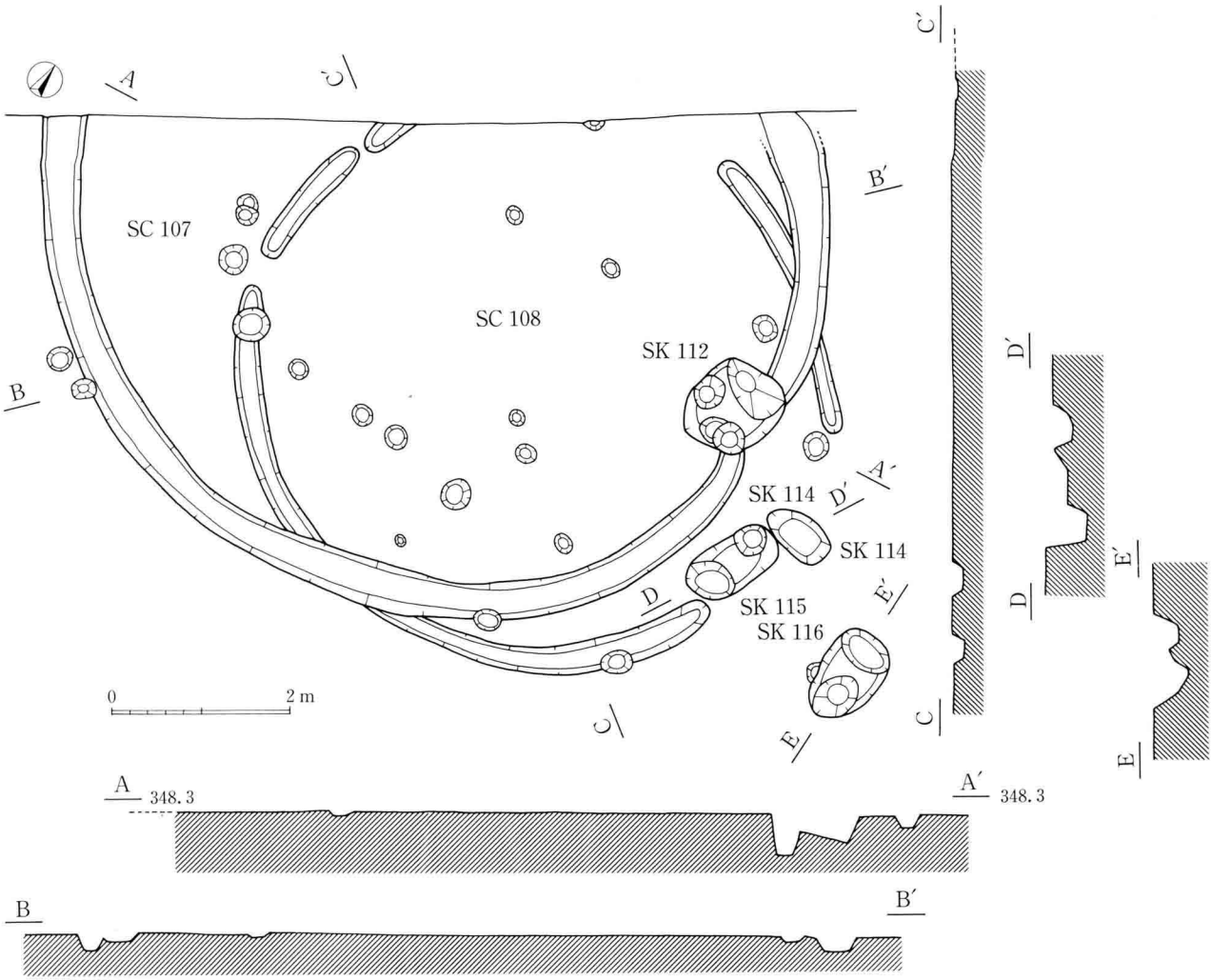
25～50cm・深さ15～20cmの規模である。断面がＵ字形を呈し、他の環状溝址よりも掘り込み等が明瞭な遺構である。遺構東の溝に長軸100cm・深さ27cm程の隅丸方形状の土坑が掘り込まれ、小穴４個を内包している。入口部遺構と考える。溝域内に多くの小穴が確認されたが、偏在しており柱穴として小屋組配列は認められないし、SC108のものと分離できないものが多い。

**108号環状溝址（SC108）**

［遺構］(35図)　Ｂ区に位置し、SC107と重複する。本遺構は北側の一部分を除き、ほぼ全形を露呈した。全体の形態は円形に近く、外法の規模は東西軸5.9m・南北軸6.5m を測る比較的小型の遺構である。また、円形から長円形に形態の変遷を求めればSC107より本遺構の方が古いものと考えられる。溝は幅18～32cm・深さ10～15cmの規模で、断面がＵ字形を呈する。周溝は北側の溝に不連続で複数の空域が存在する。特に東部の約2.3m の空域に連結するかのような小穴２個を内包する長軸1.1m の隅丸長方形土坑（SK115）と小穴に注目し、入口部の施設を構築する遺構と想定する。他の空域は溝自体が浅いことから消滅し、本来は連続していた可能性がある。主軸方位はほぼ東西軸線上にある。周溝域内に多数の小穴が確認されるが、柱穴としての小屋組配列にはならない。

**109号環状溝址（SC109）**

［遺構］(34図)　Ａ区の西端に位置する。SC106と大部分が重複するが、新旧関係は不明である。南側半分程が調査区外に伸びているため、規模および内部施設等は不明である。検出範囲からの所見では、溝が不連続で空域を有し、形態が長円形を呈し、長軸がほぼ東西方向にあるものと思われる。溝は幅25～45cm・深さ５～８cmの規模で、断面がＵ字形を呈する。溝域内には本遺構に所属すると思われる小穴が確認されない。東の溝に長軸1.2m 程の円形土坑（SK106）と小穴１個がみられるが、他の遺構の入口部と全く反対方向に位置することから入口部の遺




35図　SC 107・108、SK 112・114～116 実測図（1：80）

構ではないであろう。

### (3) 弧状溝址

環状溝址より溝の規模が小さいものの、両端の終結点が調査区内あるいはその周辺にあると考えられる弧状の溝址である。A 区のみに 2 条確認した。小穴や焼土等は伴わないが、環状溝址と何らかの関係がある遺構と考えられる。

**102号溝址（SD102）**

［遺構］（29図）　調査区の東端に位置し、SC101・102、ST101と重複関係にある。形態は若干弧状になるが、直線に近い。規模は全長約10m・幅15～20cmである。掘り込みは重複する環状溝址より深く25cm前後を測る。溝方向は東西である。

**103号溝址（SD103）**

［遺構］（32図）　調査区の中央東に位置し、SA104・SC104と重複関係にある。形態は北西から南西にかけて、SB 103～106の西側をとり囲むように弓張り状の弧を描く。北はSA104と重複して終結し、南は調査区内南端で終結する。規模は直線にして残存長約15m・幅12～20cmである。掘り込みは重複する環状溝址より深く15cm前後を測る。

### (4) 掘建柱建物址（建物址）

#### 101号建物址（ST101）

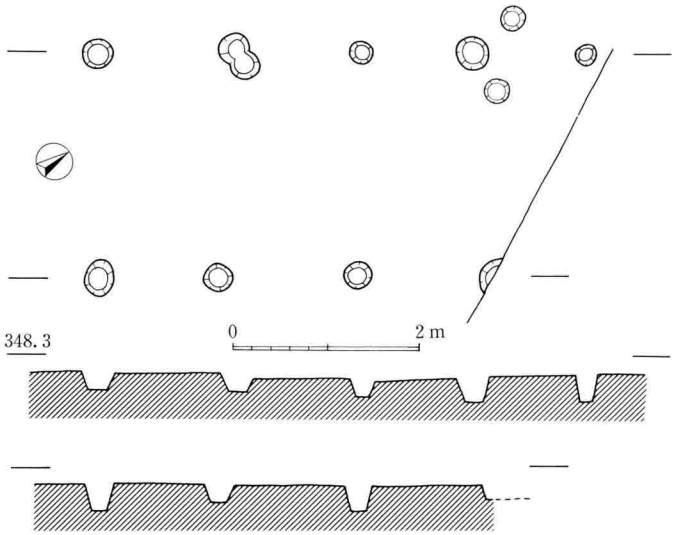
［遺構］(36図) 建物址はＡ区のみから確認されており、以下調査区名を省略する。調査区の東端に位置し、SC101、SD101・102と重複するが、新旧関係は不明である。また、調査で検出した形態は長方形を呈し桁間４間×梁間１間であるが、桁間が１ないし２間延びる可能性がある。規模は桁行5.2m・梁行2.3m を測る。桁柱穴芯々間は1.2～1.5m で、平均値は1.3m である。梁柱穴間は一定の数値になる。桁行方向はN25°Ｅである。

#### 102号建物址（ST102）

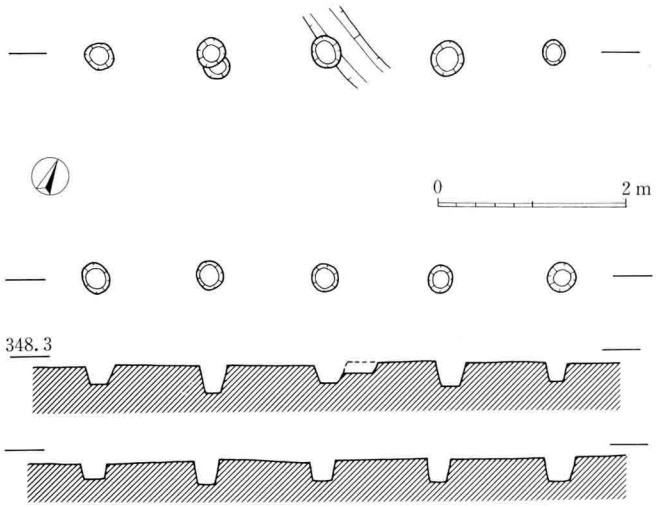
［遺構］(37図) 調査区の東に位置し、SC102と重複するが、新旧関係は不明である。形態は桁間４軒×梁間１間の長方形を呈する。規模は桁行4.9m・梁行2.35m を測る。桁柱穴芯々間は1.1～1.3m で、平均値は1.23m である。梁柱穴間は東端が広く2.4m の数値になる。桁行方向はN69°Ｅである。

#### 103号建物址（ST103）

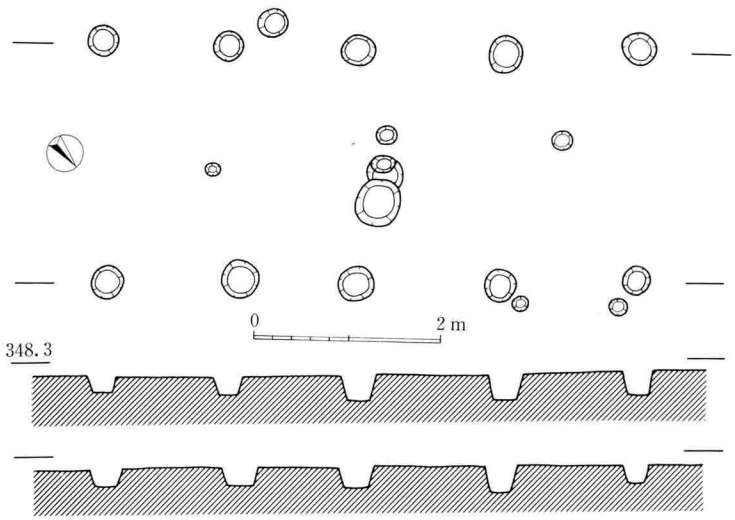
［遺構］(38図) 調査区の東側に位置し、東でSB102と近接するが、新旧関係は不明である。形態は桁間４間×梁間１間の長方形を呈する。規模は桁行西列5.7m・東列5.6m、梁行南列2.6m・北列2.5m と若干のゆがみがみられる。桁柱穴はそれぞれ対応する位置に柱穴が認められるが、芯々間は西列1.4～1.6m、東列1.2～1.55m とばらつきがみられる。梁柱穴間は南列が広く2.6m、北列2.5m を測る。桁行方向はN50°Ｗであ




36 図　ST 101 実測図（1：80）




37 図　ST 102 実測図（1：80）

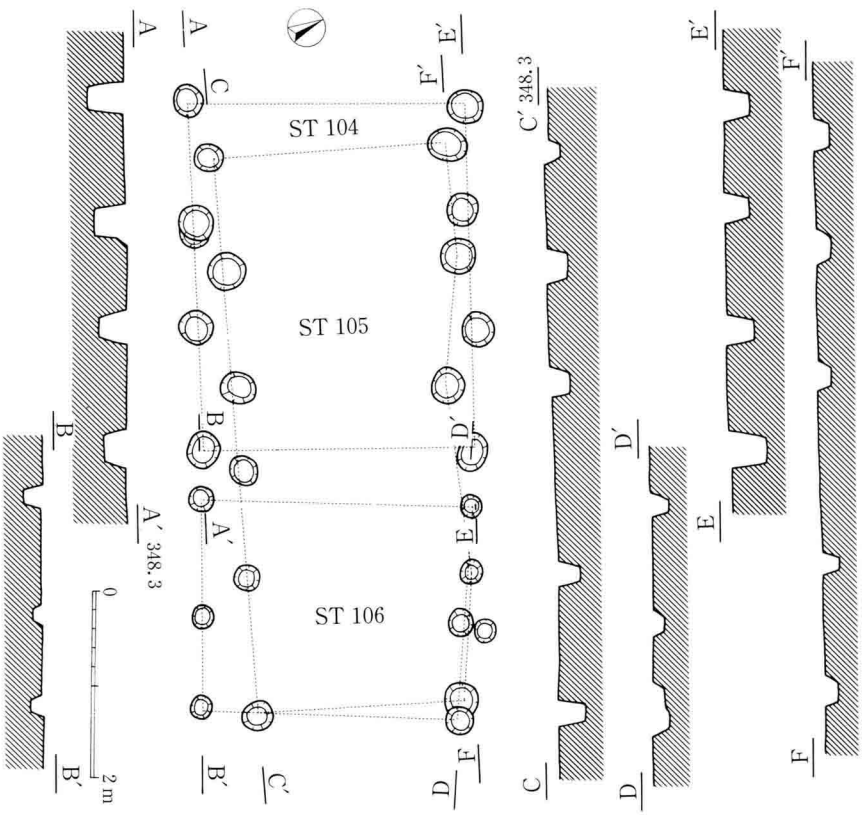



38 図　ST 103 実測図（1：80）

る。

**104号建物址（ST104）**

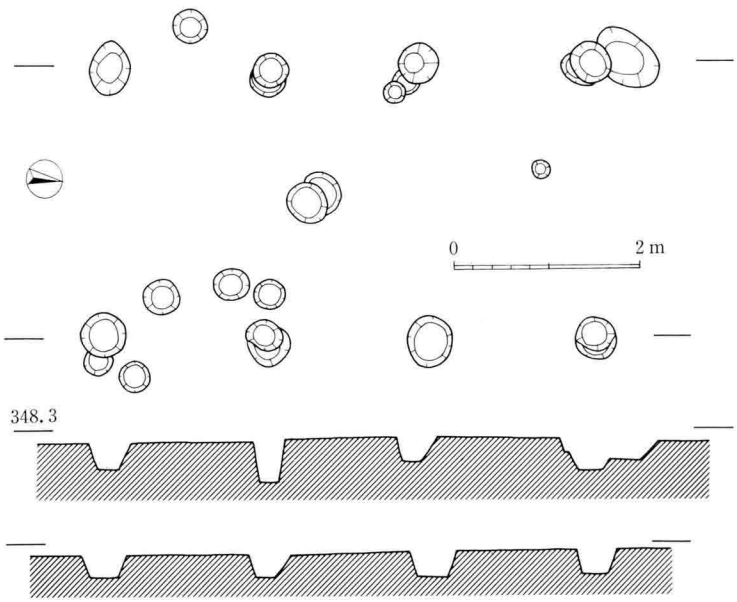
［遺構］（39図） 調査区の東側に位置する。南で桁行が同方向にあるST106と近接し、同じくST105と重複関係にあるが、遺構間の新旧は不明である。形態は桁間3間×梁間1間の長方形を呈する。規模は桁行南列・北列共に3.7mを測るが、北列は直線的にならない。梁行は西列3.0m・東列2.85mと若干のゆがみがみられる。桁柱穴はそれぞれ対応する位置に柱穴が認められるが、芯々間は南列1.1～1.3m、北列1.2～1.3mとほぼ一定である。桁行方向はN65° Wである




39図 ST 104～106 実測図（1：80）

**105号建物址（ST105）**

［遺構］（39図） 調査区の東側に位置する。桁行がほぼ同方向にあるST104・106と重複関係にあるが、遺構間の新旧は不明である。形態は桁行南列からみれば桁間5間と思えるが、西から4個目の柱穴に対応する北列の小穴が認められないことから桁間4間×梁間1間の建物址と推定する。また、南列は柱穴の芯々に軸線があるものの、北列においては直線的にならずぎくしゃくしている。規模は桁行南列5.95m・北列5.9m、梁行西列2.5m・東列2.2mと若干のゆがみがみられる。柱穴芯々間は南列では西から1.2m・1.2m・1.9m・1.5m、北列では1.2m・1.3m・2.0m・1.35mとばらつきがある。桁行方向はN67° Wである。




40図 ST 107 実測図（1：80）

**106号建物址（ST106）**

［遺構］（39図） 調査区の東側に位置する。ST105と重複し、新旧関係は不明である。形態は桁間2間×梁間1間の長方形を呈する。規模は桁行南列2.2m・北列2.3m、梁行西列2.9m・東列2.75mと若干のゆがみがみられる。

柱穴芯々間は南列では西から1.2m・1.0m、北列では1.25m・1.0m と不規則である。桁行方向は N63° W である。

**107号建物址（ST107）**

［遺構］（40図） 調査区の西側に位置し、北で３条の溝址と重複するが、新旧関係は不明である。形態は桁間４間×梁間１間の長方形を呈する。規模は桁行西列5.1m・東列5.2m、梁行南列・北列共に2.9m を測る。桁柱穴はそれぞれ対応する位置に柱穴が認められるが、芯々間は西列が1.5～1.9m と不規則であるが、東列はほぼ1.7m と一定である。桁行方向は N7° W である。

### (5) 土坑（SK、規模単位cm）

| 番号 | 図 | 形態 | 長軸・短軸・深 | 底面等 | 備考 | 遺物（図） |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 101 | 42 | 隅丸長方形 | 200・120・10 | 鍋底 | SA101より新 | 壷（42図171）・打製石斧（45図245） |
| 102 | 42 | 隅丸方形 | 50・52・16 | 平底 | A 区東単体検出 | |
| 103 | 29 | 隅丸長方形 | 110・80・10 | 小穴２個 | SC101入口部 | |
| 104 | 42 | 〃 | 80・60・15 | 平底 | A 区東単体検出 | |
| 105 | 42 | 瓢箪形 | 300・130・13 | 平底 | A 区中央単体検出 | |
| 106 | 34 | 円形 | 120・110・18 | 鍋底 | SC109溝 | |
| 107 | 33 | 隅丸長方形 | 110・70・ 7 | 小穴２個 | SC105入口部 | |
| 108 | 33 | 不整卵形 | 100・78・ 6 | 小穴１個 | 〃 | |
| 109 | 42 | 円形 | 70・64・ 6 | 平底 | A 区中央単体検出 | |
| 110 | 42 | 隅丸長方形 | 200・135・16 | 平底 | SB102と重複 | |
| 111 | 42 | 隅丸三角形 | 260・85。 8 | 平底 | A 区西単体検出 | 甕（42図172）・打製刃器（45図244） |
| 112 | 35 | 隅丸方形 | 100・100・27 | 小穴４個 | SC107入口部 | |
| 113 | | 隅丸長方形？ | —・—・10 | | C 区西端 | |
| 114 | 35 | 隅丸長方形 | 80・46・22 | 鍋底 | SK115に近接 | |
| 115 | 35 | 〃 | 110・55・22 | 小穴２個 | SC108入口部 | |
| 116 | 35 | 〃 | 108・70・18 | 小穴２個 | C 区単体検出 | |
| 117 | 31 | 長方形 | 66・59・14 | 平底 | SC103内 | |
| 118 | 42 | 不整円形 | 148・140・15 | 鍋底 | A 区中央単体検出 | |

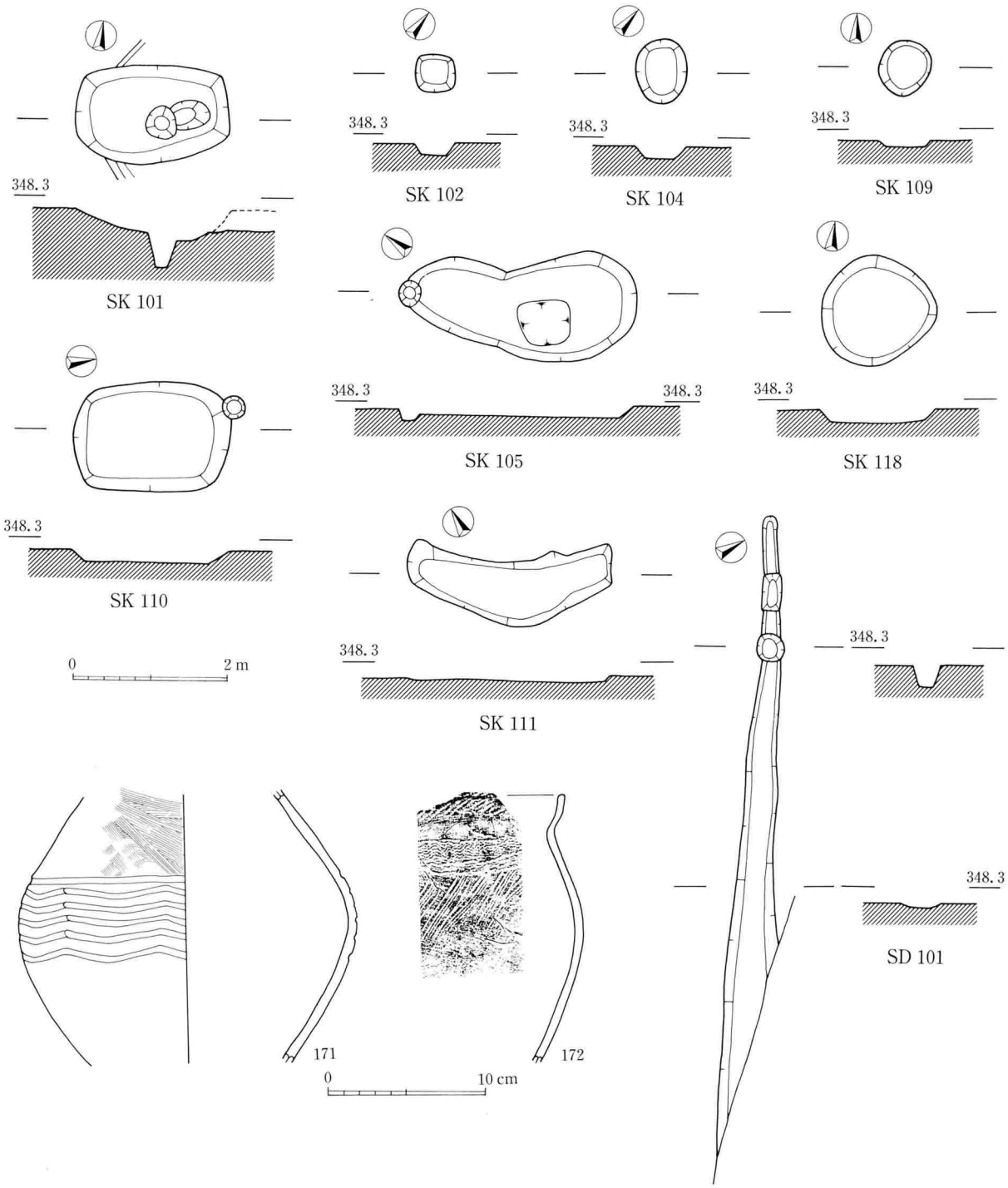
### (6) 溝址

**101号溝址（SD101）**

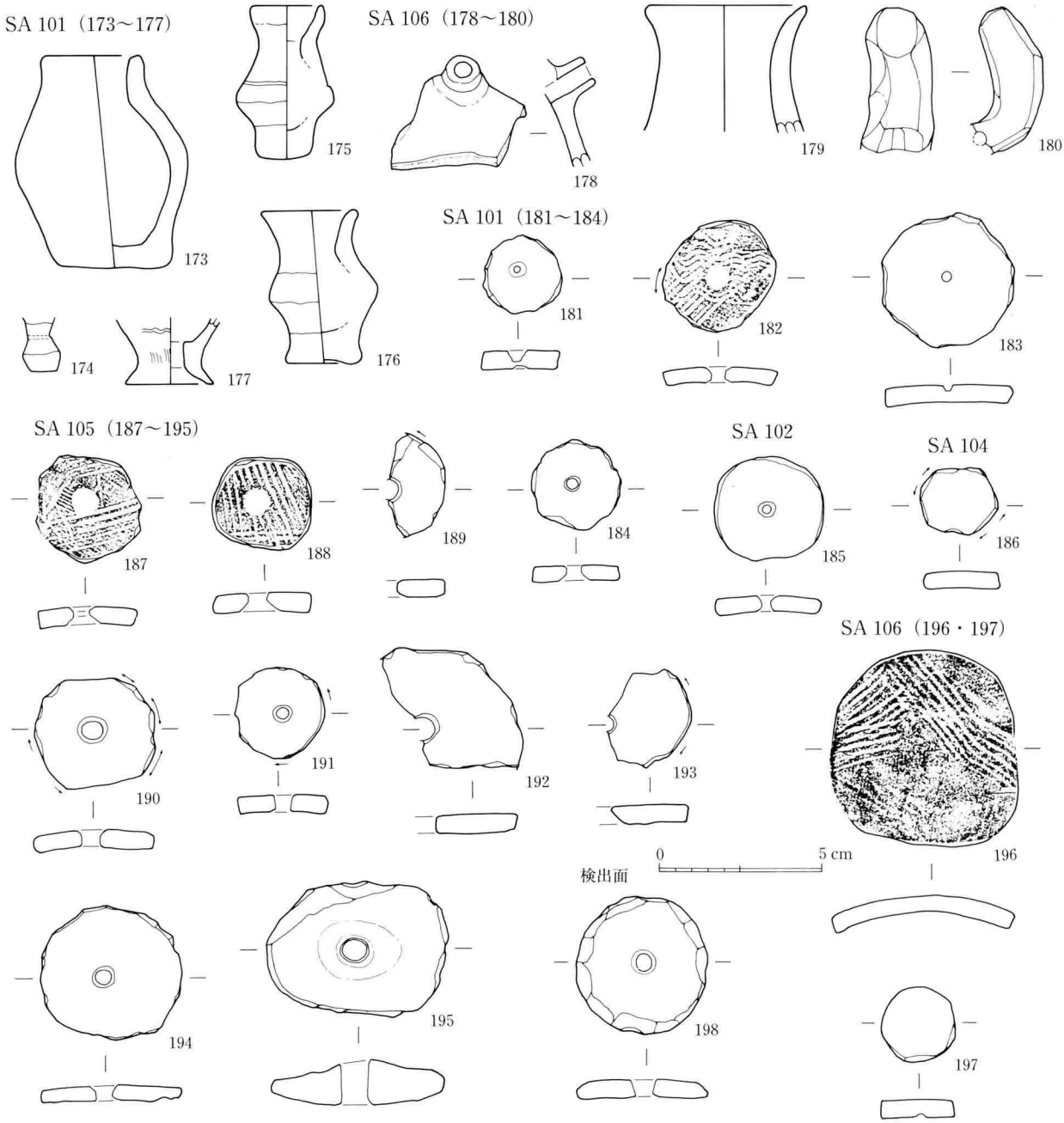
［遺構］（42図） A 区の東端に位置し、南側は調査区域外に延びている。形態は弧状溝址を思わせるが、直線的で南にいくに従い幅広になる。検出長は8.1m である。幅は起点の北端部が16cm、南の検出面で60cmを測る。深さは６～10cmと浅い。

**105・106・107号溝址（SD105・106・107）**

［遺構］（８図） A 区の北西端に位置し、両端とも調査区域外に延びる。３条の溝址は併行して掘り込まれるが、SD105・106は東端で合体し１条になる。形態はやや弧状を呈する。規模は検出長が28.5m、幅が３条とも50～90cm、深さが10～15cmである。



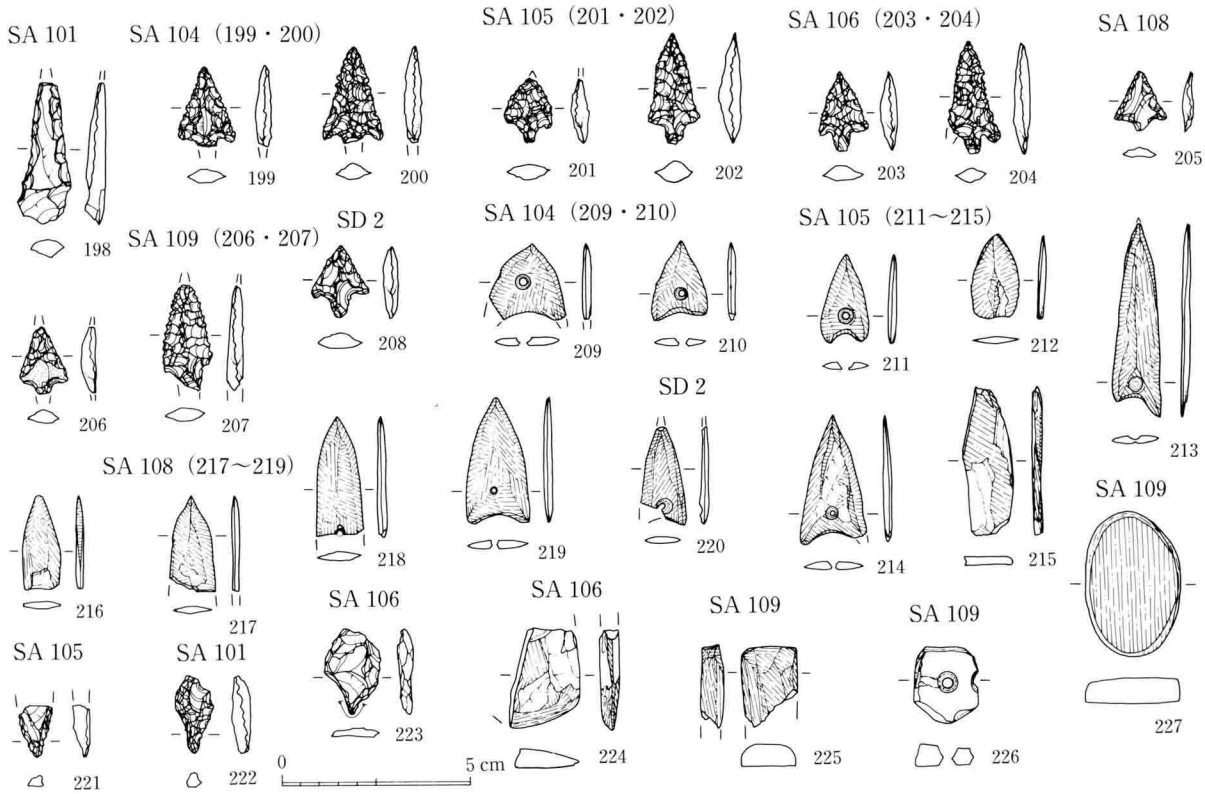

42図　土坑・溝址（1：80)、土坑出土土器（1：4）実測図




**43図　土製品・ミニチュア土器実測図（1：2）**

## 土製品観察表

| 番号 | 説　明 | 番号 | 説　明 | 番号 | 説　明 |
|---|---|---|---|---|---|
| 173 | 口径3.0cm・高6.5cm・完形 | 182 | 甕，径3.5cm・9g | 191 | 表裏赤彩，径2.7cm・6g，外周部分磨 |
| 174 | 頸部貫通口 | 183 | 表裏赤彩，径4.1cm・15g，未貫通孔 | 192 | 壷 |
| 175 | 口径2.0cm・高4.0cm，体部沈線文 | 184 | 〃，径2.8cm・7g | 193 | 〃，外周部分磨 |
| 176 | 口径2.9cm・高4.6cm | 185 | 甕，径3.9cm・8g | 194 | 〃，径4.3cm・14g |
| 177 | 底径2.0cm，底部円孔 | 186 | 〃，径2.4cm・4g，外周部分磨 | 195 | 土製，長径5.5cm・23g |
| 178 | 注口，外面赤彩 | 187 | 〃，径3.1cm・10g | 196 | 甕，長径6.0cm・29g・全周磨 |
| 179 | 口径4.8cm | 188 | 〃，径3.1cm・6g，全周磨 | 197 | 〃，径2.3cm・5g，未貫通孔 |
| 180 | 破損部円孔 | 189 | 壷，外周磨 | 198 | 表裏赤彩，径4.2cm・13g，外周打欠き |
| 181 | 表裏赤彩，径2.9cm・6g | 190 | 甕，径3.6cm・10g，外周部分磨 | | |

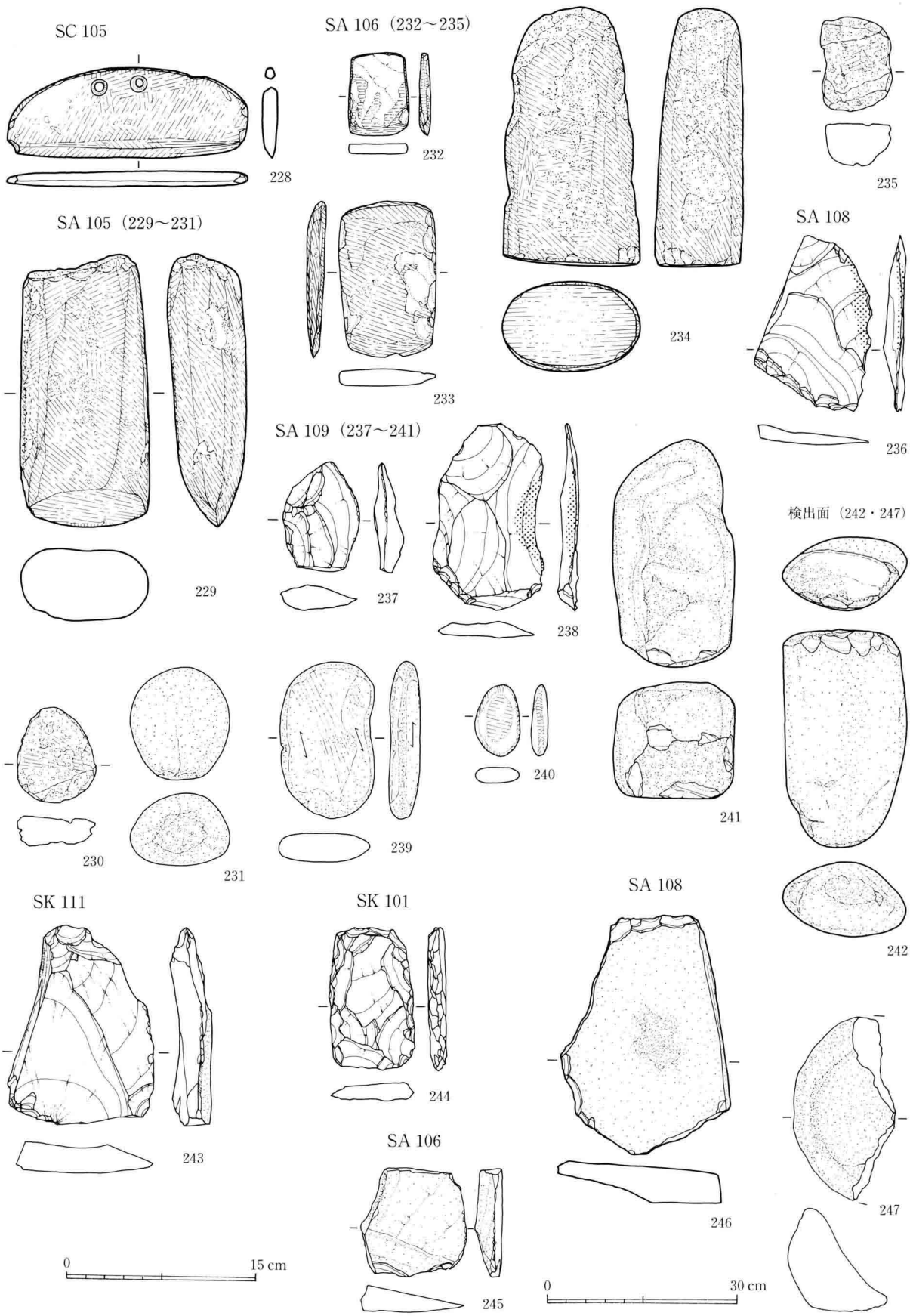



44図　石器・石製品実測図（1：2）

## 石製品観察表

| 番号 | 説明 | 番号 | 説明 | 番号 | 説明 |
|---|---|---|---|---|---|
| 198 | チャート，長3.8cm・幅1.4cm・2g | 215 | 硅質頁岩，長4.0cm・幅1.4cm・3g | 232 | 蛇紋岩，長2.8cm・15g |
| 199 | 黒曜石，長（2.1cm）・幅1.6cm・1g | 216 | 蛇紋岩，長2.5cm・幅1.1cm・2g | 233 | 〃，長5.5cm・幅3.5cm・77g |
| 200 | 〃，長（2.6cm）・幅1.6cm・2g | 217 | 硅質頁岩，長（2.6cm）・幅1.2cm・1g | 234 | 閃緑岩，長9.0cm・幅4.7cm・837g |
| 201 | 〃，長1.7cm・幅1.3cm・1g以下 | 218 | 〃，長（3.2cm）・幅1.2cm・（1g） | 235 | 軽石，長3.2cm・幅2.5cm・14g |
| 202 | 〃，長3.0・幅1.4cm・1g | 219 | 蛇紋岩，長3.4cm・幅1.6cm・2g | 236 | 粘板岩，長6.1cm・幅4.2cm・41g |
| 203 | 〃，長2.1cm・幅1.2cm・1g | 220 | 硅質頁岩，長2.6cm・幅（1.3cm）・（1g） | 237 | 〃，長3.7cm・幅2.8cm・29g |
| 204 | 〃，長3.0cm・幅（1.4cm）・（1g） | 221 | チャート，長（1.4cm） | 238 | 〃，長6.5cm・幅3.5cm・52g |
| 205 | 〃，長1.6cm・幅1.2cm・1g | 222 | 黒曜石，長2.0cm・幅1.0cm・1g | 239 | 砂岩，長5.5cm・幅4.3cm・94g |
| 206 | 〃，長1.8cm・幅1.2cm・1g以下 | 223 | チャート，長2.3cm・幅1.5cm・1g | 240 | 碧玉，長2.4cm・幅1.6cm・12g |
| 207 | 〃，長（2.8cm）・幅1.3cm・（1g） | 224 | 蛇紋岩 | 241 | 石英斑岩，長7.9cm・幅4.4cm・683g |
| 208 | チャート，長1.9cm・幅1.5cm・1g以下 | 225 | 碧玉 | 242 | 硬砂岩，長7.7cm・幅4.4cm・414g |
| 209 | 粘板岩，長（2.0cm）・幅（2.0cm）・2g | 226 | 流紋岩，長2.0cm・幅1.7cm・2g | 243 | 粘板岩，長7.0cm・幅5.3cm・162g，磨耗痕 |
| 210 | 〃，長2.1cm・幅1.5cm・1g | 227 | 碧玉，長3.9cm・幅2.5cm・14g | 244 | 蛇紋岩，長5.0cm・幅4.0cm・52g，未製品？ |
| 211 | 硅質頁岩，長2.4cm・幅1.3cm・1g以下 | 228 | 流紋岩，長8.6cm・幅3.2cm・77g | 245 | 安山岩 |
| 212 | 〃，長2.2cm・幅1.3cm・1g | 229 | 閃緑岩，長9.5cm・幅4.6cm・730g | 246 | 〃，長25.0cm・幅17.5cm |
| 213 | 蛇紋岩，長6.4cm・幅1.4cm・2g | 230 | 軽石，長3.4cm・幅2.8cm・8g | 247 | 〃，長（20.0cm）・深（10.0cm） |
| 214 | 硅質頁岩，長3.5cm・幅1.8cm・2g | 231 | 硬砂岩，長4.0cm・幅3.6cm・155g | | |

（注）石質の同定にあたっては、畠山幸司氏（長野市立博物館学芸員）の教示を得た。




45図　石器・石製品実測図（1：3、245～247は1：6）

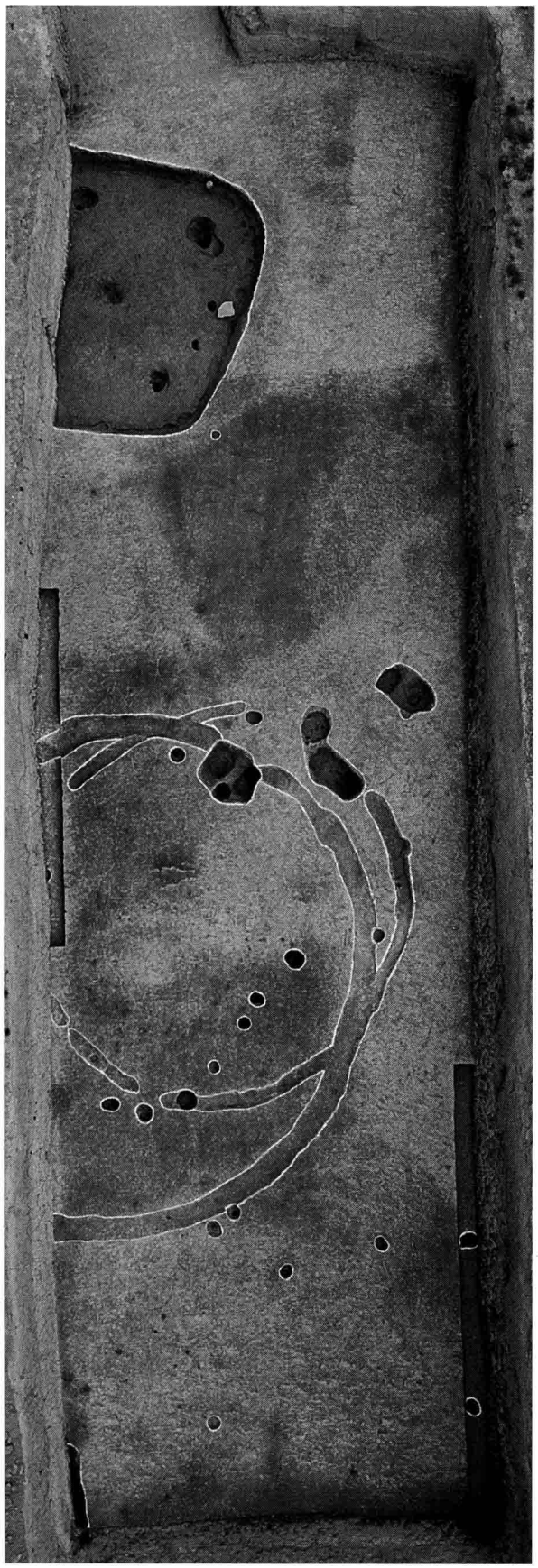
## 土器計測表

| 番号 | 種別 | 器種 | 法量（cm） | | | 遺存 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 底径 | 器高 | |
| ＳＡ101（10図） | | | | | | |
| 1 | 弥生 | 鉢 | | 7.4 | | ママ |
| 2 | 〃 | 〃 | | 8.4 | | 〃 |
| ＳＡ102（14図） | | | | | | |
| 19 | 弥生 | 高坏 | | | | 1/3 |
| 20 | 〃 | 〃 | | 10.0 | | ママ |
| 21 | 〃 | 壷 | 14.9 | 7.6 | 24.0 | 完形 |
| 22 | 〃 | 〃 | | 7.0 | | 2/3 |
| 23 | 〃 | 〃 | | | | ママ |
| 24 | 〃 | 〃 | 14.4 | | | 〃 |
| 25 | 〃 | 〃 | | 9.0 | | 〃 |
| 26 | 〃 | 〃 | | 10.2 | | 1/3 |
| 27 | 〃 | 〃 | | 10.0 | | ママ |
| 28 | 〃 | 甕 | 10.8 | 6.0 | 12.0 | 1/3 |
| 29 | 〃 | 〃 | 14.0 | | 6.4 | 1/2 |
| 30 | 〃 | 〃 | 20.4 | | | 1/6 |
| 31 | 〃 | 〃 | 16.0 | | | 1/3 |
| 32 | 〃 | 〃 | 22.4 | 7.6 | 25.5 | 3/4 |
| 33 | 〃 | 台付甕 | | 8.2 | | ママ |
| ＳＡ104（16図） | | | | | | |
| 34 | 弥生 | 鉢 | 18.0 | 8.6 | 6.6 | 1/6 |
| 35 | 〃 | 壷 | | 9.4 | | ママ |
| ＳＡ105（18図） | | | | | | |
| 46 | 弥生 | 高坏 | 16.6 | | | 1/2 |
| 47 | 〃 | 壷 | 13.8 | 8.0 | 20.2 | 完形 |
| 48 | 〃 | 〃 | 18.8 | | | 1/3 |
| 49 | 〃 | 〃 | 13.8 | | | 1/2 |
| 50 | 〃 | 〃 | 14.4 | | | 1/3 |
| 51 | 〃 | 〃 | | | | 〃 |
| 52 | 〃 | 甕 | | | | ママ |
| 53 | 〃 | 〃 | 17.6 | | | 〃 |
| 54 | 〃 | 〃 | 13.8 | 6.3 | 14.8 | 2/3 |
| 55 | 〃 | 〃 | | 7.2 | | ママ |
| 56 | 〃 | 甑 | | 6.8 | | 〃 |
| ＳＡ106（20～22図） | | | | | | |
| 57 | 弥生 | 鉢 | 14.6 | 6.6 | 6.2 | 1/8 |

| 番号 | 種別 | 器種 | 法量（cm） | | | 遺存 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 底径 | 器高 | |
| 58 | 弥生 | 鉢 | | 5.0 | | 1/2 |
| 59 | 〃 | 片口鉢 | 10.0 | 6.3 | 10.0 | 1/4 |
| 60 | 〃 | 鉢 | 11.8 | 7.7 | 13.2 | 完形 |
| 61 | 〃 | 高坏 | 18.3 | | | 1/10 |
| 62 | 〃 | 〃 | 18.2 | 10.8 | 12.0 | 完形 |
| 63 | 〃 | 細口壷 | 7.9 | | | ママ |
| 64 | 〃 | 壷 | 17.6 | | | 1/10 |
| 65 | 〃 | 細口壷 | 9.2 | | | ママ |
| 66 | 〃 | 壷 | 13.6 | | | 1/6 |
| 67 | 〃 | 〃 | | | | ママ |
| 68 | 〃 | 〃 | 10.1 | | | 〃 |
| 69 | 〃 | 〃 | 15.8 | | | 〃 |
| 70 | 〃 | 〃 | 11.9 | | | 〃 |
| 71 | 〃 | 〃 | 14.6 | | | 〃 |
| 72 | 〃 | 〃 | 15.6 | | | 2/3 |
| 73 | 〃 | 〃 | | 7.2 | | 〃 |
| 74 | 〃 | 〃 | | | | ママ |
| 75 | 〃 | 〃 | | | | 〃 |
| 76 | 〃 | 〃 | | | | 〃 |
| 77 | 〃 | 〃 | 15.7 | | | 〃 |
| 78 | 〃 | 〃 | | 6.8 | | 1/3 |
| 79 | 〃 | 〃 | | | | 2/3 |
| 80 | 〃 | 〃 | | 6.6 | | ママ |
| 81 | 〃 | 〃 | 14.2 | 8.8 | 35.1 | 2/3 |
| 82 | 〃 | 〃 | | 8.5 | | 3/4 |
| 83 | 〃 | 〃 | | 7.4 | | ママ |
| 84 | 〃 | 〃 | | | | 2/3 |
| 85 | 〃 | 〃 | | 9.4 | | ママ |
| 86 | 〃 | 甑 | | 5.2 | | 1/3 |
| 87 | 〃 | 高坏 | | 5.6 | | 1/4 |
| 103 | 〃 | 甕 | 19.8 | | | 1/3 |
| 104 | 〃 | 〃 | 19.6 | | | 1/8 |
| 105 | 弥生 | 甕 | 22.8 | | | 1/10 |
| 106 | 〃 | 〃 | 21.8 | | | 1/2 |
| 107 | 〃 | 〃 | 11.4 | | | 1/6 |
| 108 | 〃 | 〃 | 8.7 | | | 〃 |

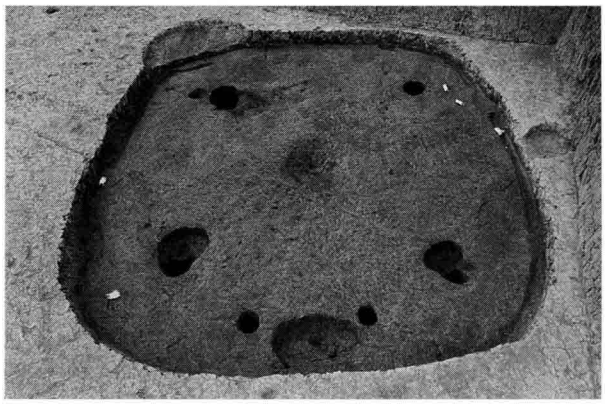
| 番号 | 種別 | 器種 | 法量（cm） | | | 遺存 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 底径 | 器高 | |
| 109 | 弥生 | 甕 | 15.0 | 6.7 | 17.3 | 完形 |
| 110 | 〃 | 〃 | 15.5 | 4.8 | 17.5 | 〃 |
| 111 | 〃 | 台付甕 | 13.1 | 8.5 | 13.0 | 〃 |
| 112 | 〃 | 〃 | | 8.6 | | ママ |
| 113 | 〃 | 甕 | 12.8 | | | 1/6 |
| 133 | 〃 | 〃 | | 5.0 | | ママ |
| ＳＡ107（24図） | | | | | | |
| 135 | 弥生 | 壷 | 7.2 | 5.9 | 15.0 | 完形 |
| 136 | 〃 | 〃 | 13.8 | | | ママ |
| 137 | 〃 | 〃 | | | | 〃 |
| 138 | 〃 | 〃 | 15.0 | | | 〃 |
| 139 | 〃 | 〃 | | | | 〃 |
| 140 | 〃 | 〃 | | 6.1 | | 〃 |
| 141 | 〃 | 〃 | | 9.8 | | 〃 |
| ＳＡ108（26図） | | | | | | |
| 142 | 弥生 | 高坏 | 20.6 | | | 1/8 |
| 143 | 〃 | 鉢 | | 9.2 | | ママ |
| 144 | 〃 | 壷 | | | | 〃 |
| 145 | 〃 | 甕 | | 6.6 | | 〃 |
| 146 | 〃 | 台付甕 | | 7.2 | | 〃 |
| 147 | 〃 | 〃 | | 8.2 | | 〃 |
| ＳＡ109（28図） | | | | | | |
| 156 | 弥生 | 壷 | | 5.2 | | ママ |
| 157 | 〃 | 〃 | 15.8 | | | 〃 |
| 158 | 〃 | 〃 | | | | 〃 |
| 159 | 〃 | 〃 | 14.8 | | | 3/4 |
| 160 | 〃 | 〃 | 17.0 | | | 1/2 |
| 161 | 〃 | 高坏 | | 8.6 | | ママ |
| 162 | 〃 | 壷 | | | | 〃 |
| 163 | 〃 | 〃 | 13.0 | | | 〃 |
| 164 | 弥生 | 壷 | | | | ママ |
| 165 | 〃 | 台付甕 | | 6.0 | | 〃 |
| 166 | 〃 | 甕 | 12.8 | 6.0 | 13.2 | 2/3 |
| 167 | 〃 | 〃 | | 7.0 | | ママ |
| 168 | 〃 | 〃 | 16.6 | | | 1/6 |

Ⅲ－1　A区・B区空中写真（上、北側）

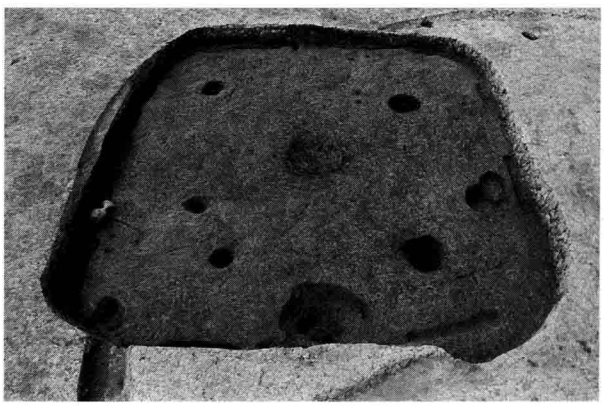


Ⅲ－2　B区空中写真

Ⅲ－3　A区北側遺構群



Ⅲ－4　SA 101

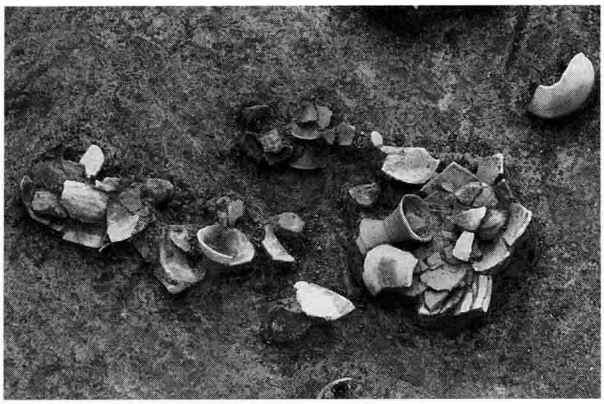


Ⅲ－5　SA 103

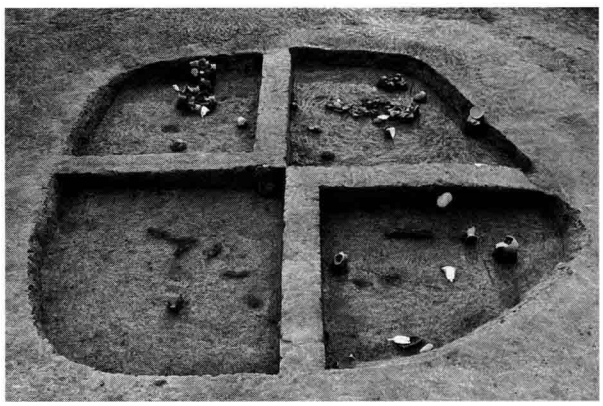
Ⅲ－6　SA 104

Ⅲ－7　SA 105

Ⅲ－8　SA 106



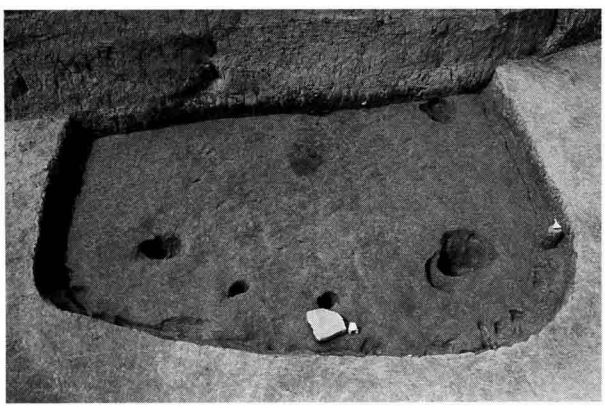
Ⅲ－9　SA 106 土器出土状態



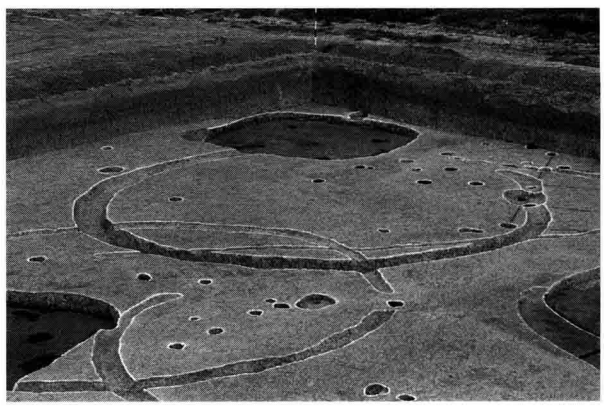
Ⅲ－10　SA 106 遺物出土状態

Ⅲ－11　SA 107

Ⅲ－12　SA 108



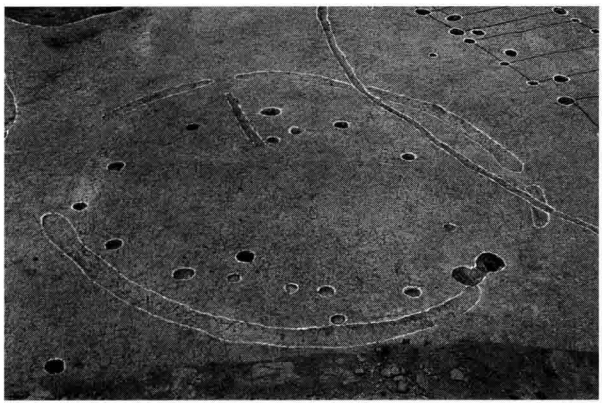
Ⅲ－13　SA 109



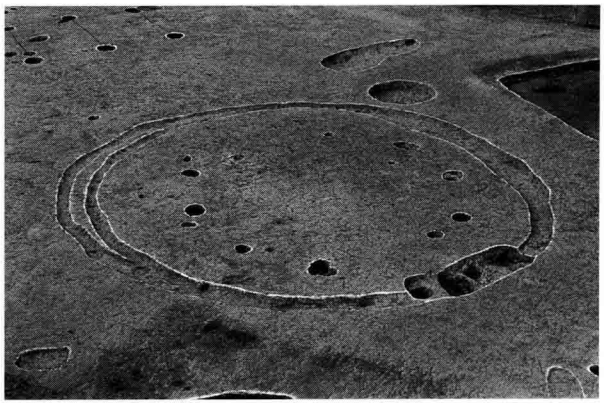
Ⅲ－14　SC 101

Ⅲ－15　SC 102

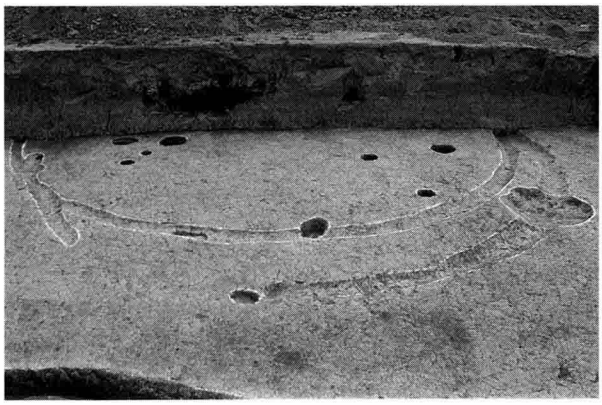
Ⅲ－16　SC 103



Ⅲ－17　SC 104

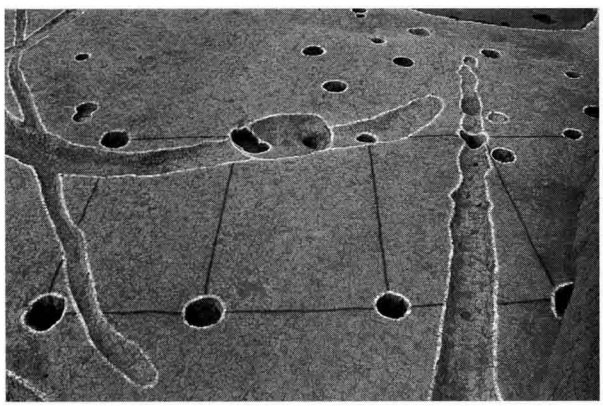


Ⅲ－18　SC 105

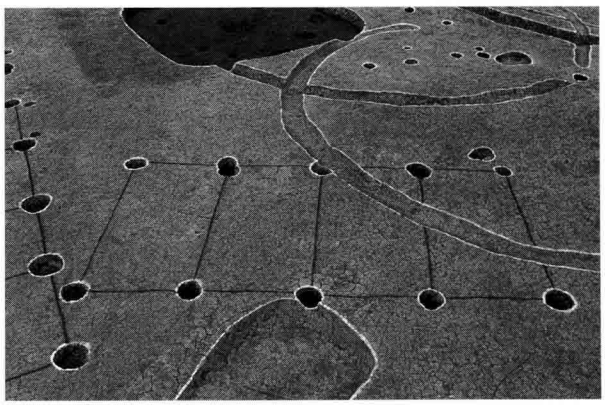


Ⅲ－19　SC 106

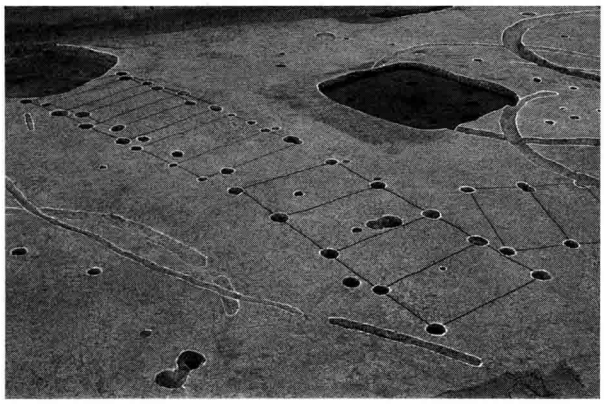
Ⅲ－20　SC 107（右）・108（左）



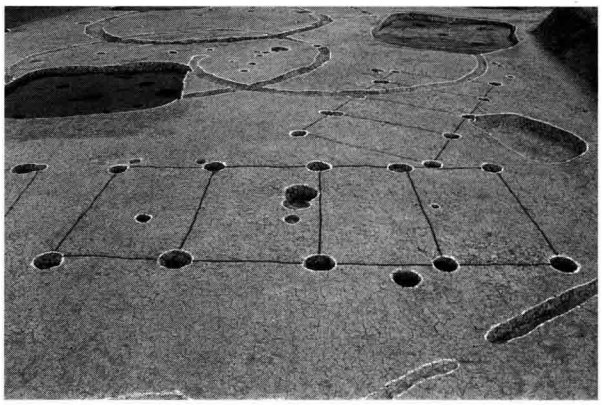
Ⅲ－21　ST 101



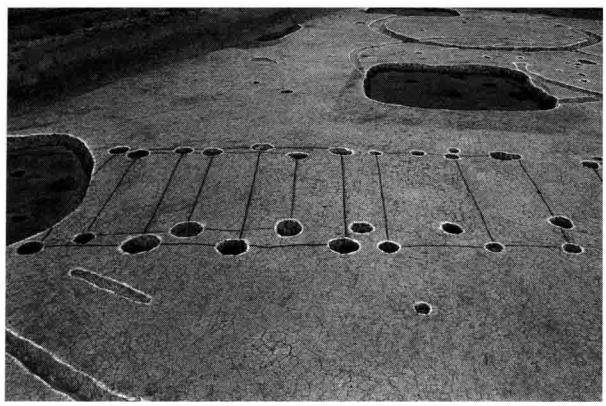
Ⅲ－22　ST 102



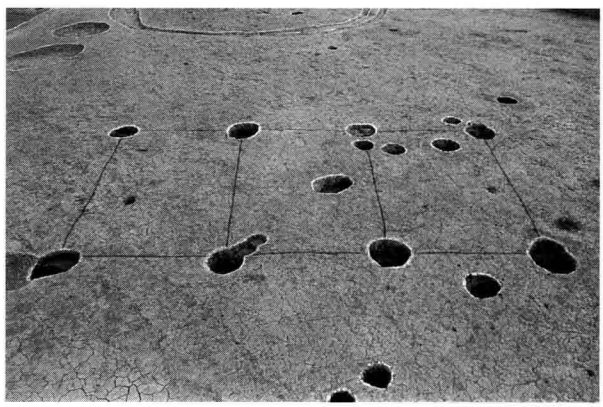
Ⅲ－23　ST 103～106



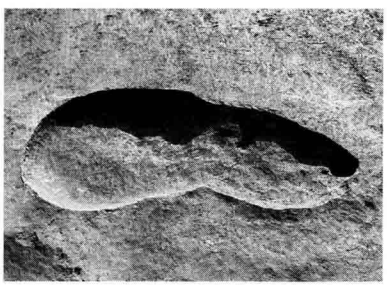
Ⅲ－24　ST 103



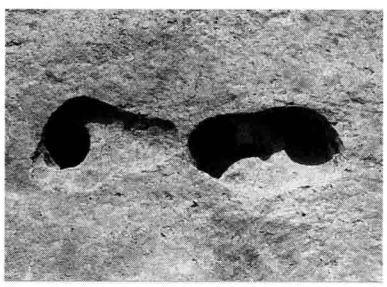
Ⅲ－25　ST 104（左下）・105（左上）・106（右）



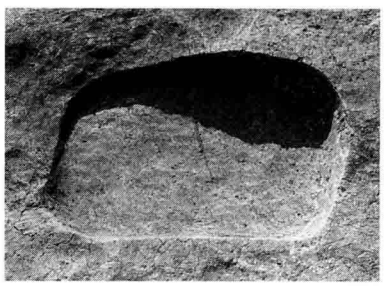
Ⅲ－26　ST 107



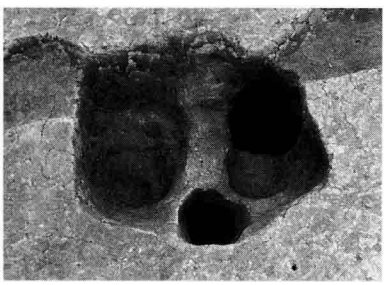
Ⅲ－27　SK 105



Ⅲ－28　SK 107（右）・108（左）

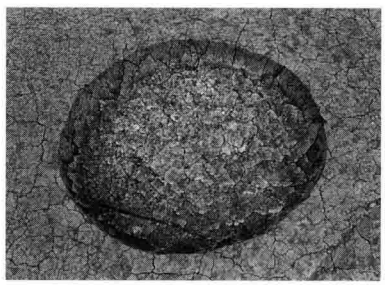


Ⅲ－29　SK 110



Ⅲ－30　SK 112

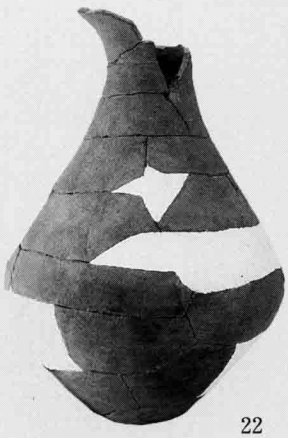
Ⅲ－31　SK 114（右）・115（左）



Ⅲ－32　SK 118

SA 103

21



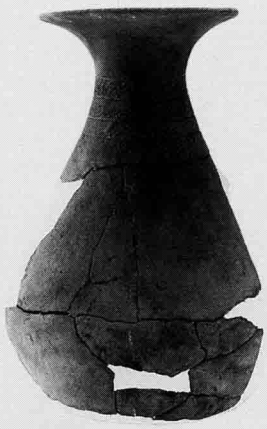
22

33

28

SA 105

47

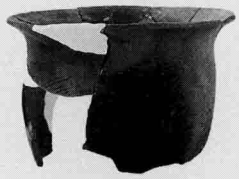


50

48

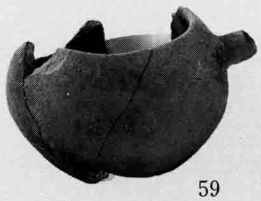
49

54

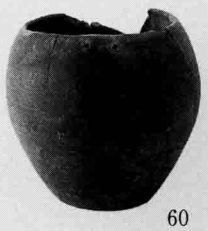


53

SA 106（1）



59

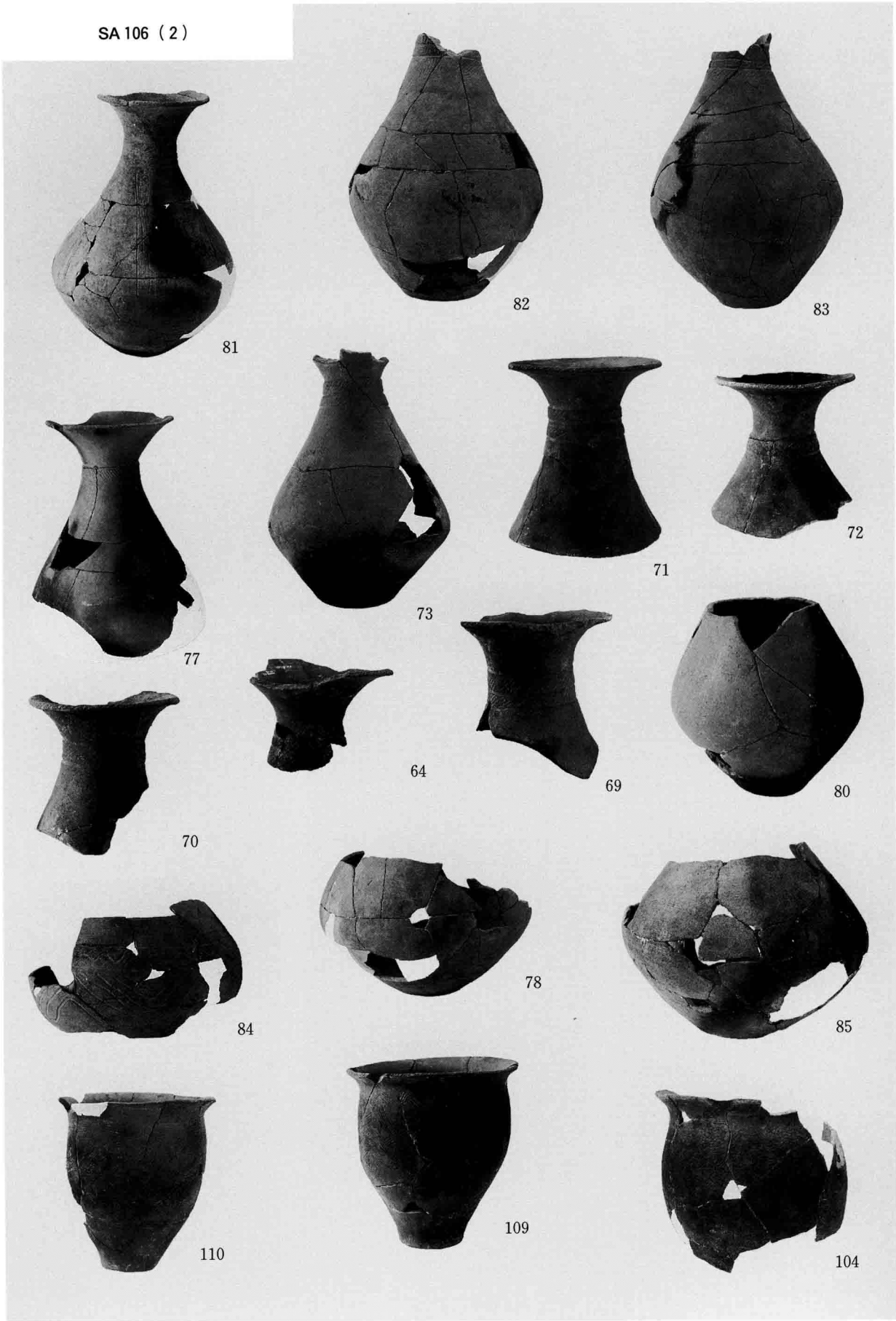


60

62

111

SA 106（2）

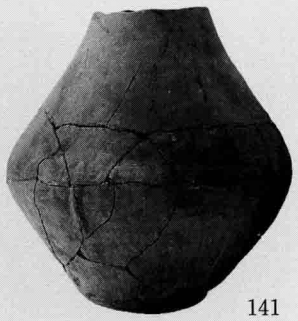


SA 107

135

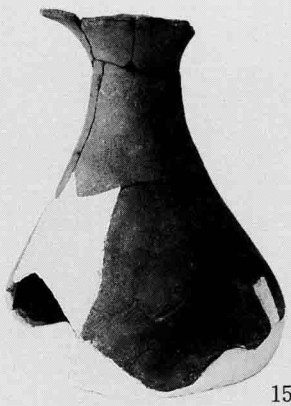
138

136


141

139

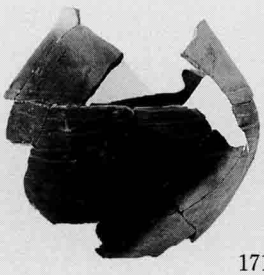
SA 109


159

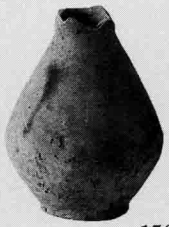
160

163

SK 101


171

157

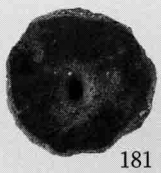

156

166

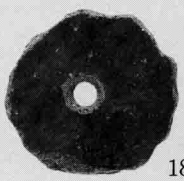
土製品

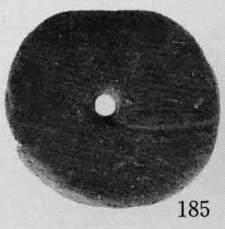
173 175 176 314 177 174

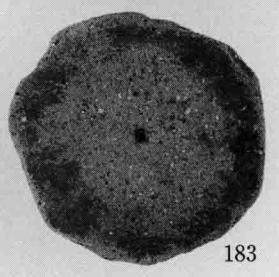
180

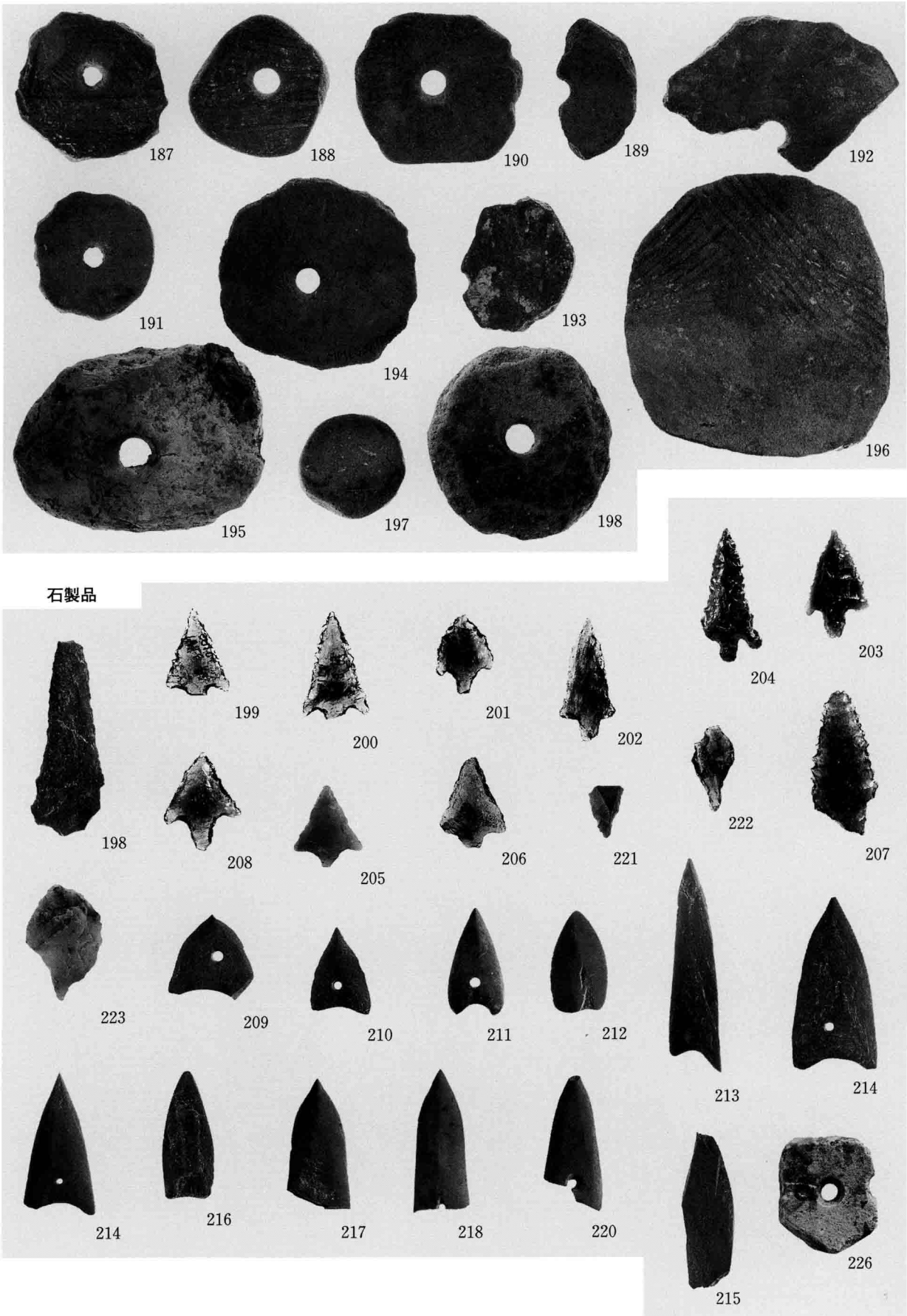

181

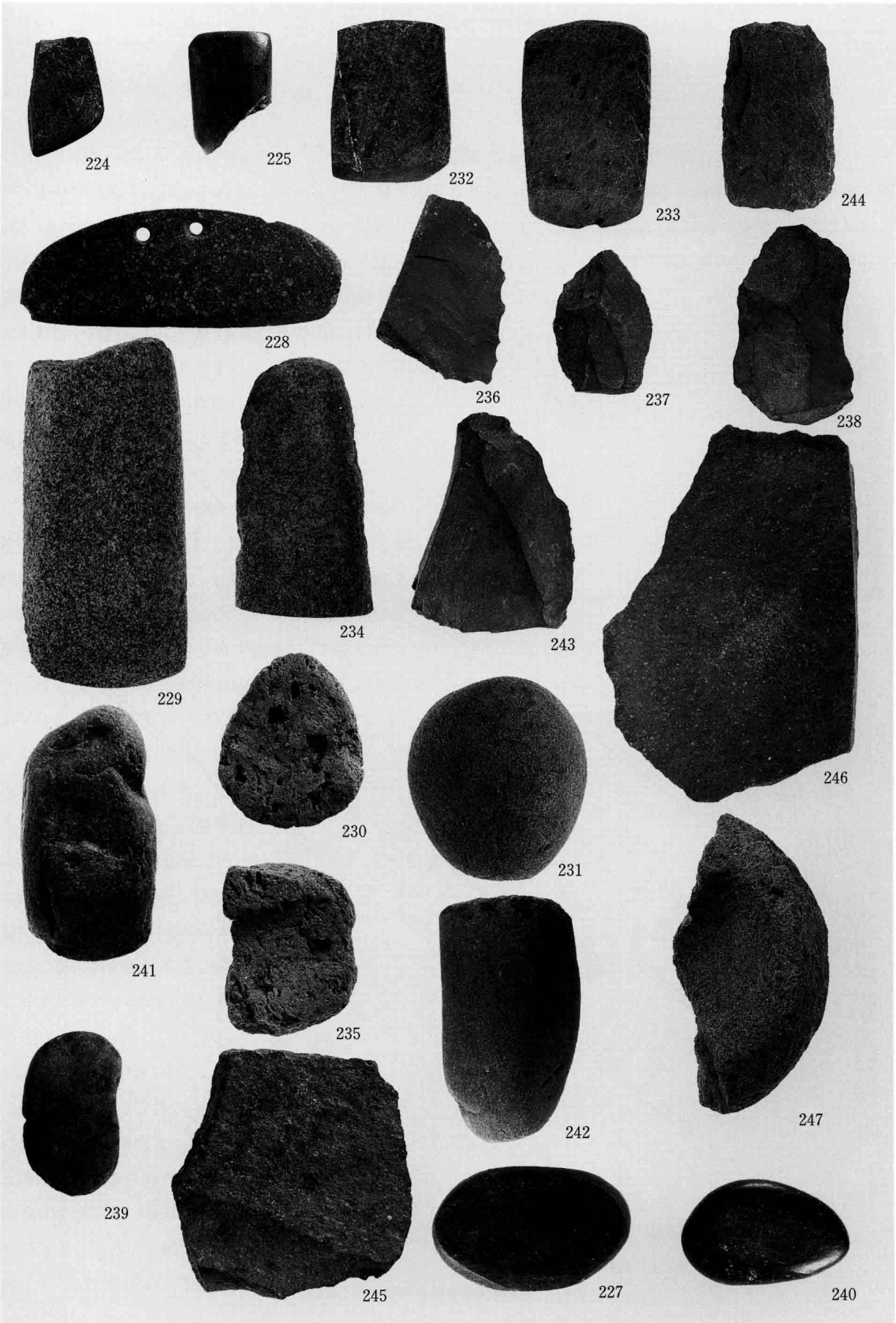
182

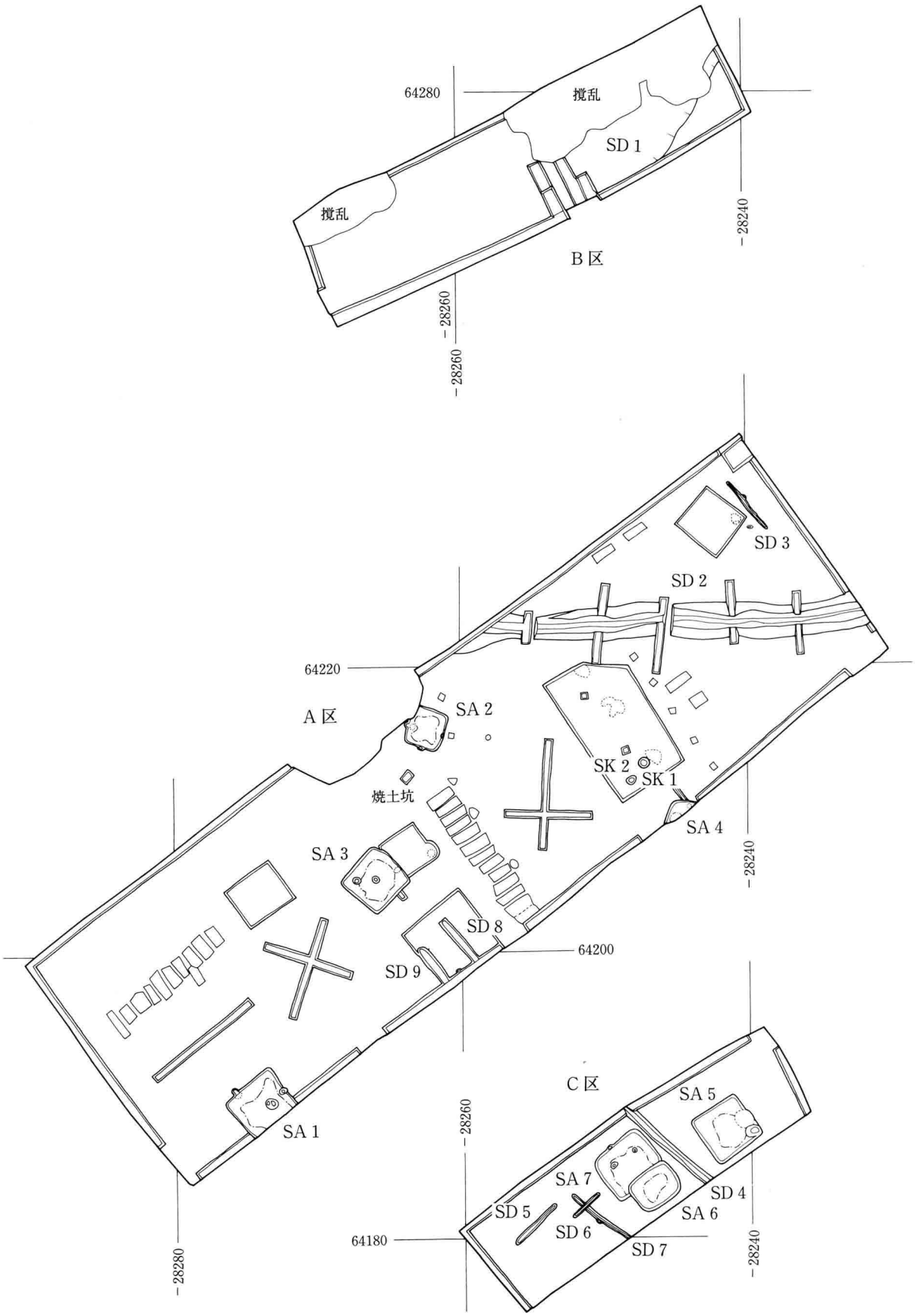

184


185


183


187
188
190
189
192
191
194
193
196
195
197
198
石製品
199
200
201
202
204
203
198
208
205
206
221
222
207
223
209
210
211
212
213
214
214
216
217
218
220
215
226


224
225
232
233
244
228
236
237
238
229
234
243
246
230
231
241
235
242
247
239
245
227
240



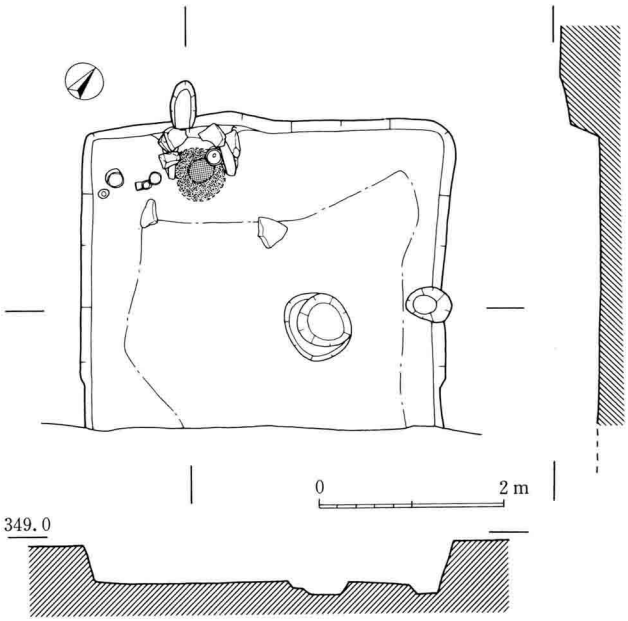

46 図　平安時代等遺構分布図（1：400）

## 第３節　平安時代の遺構と遺物

### (1) 竪穴式住居址（住居址）

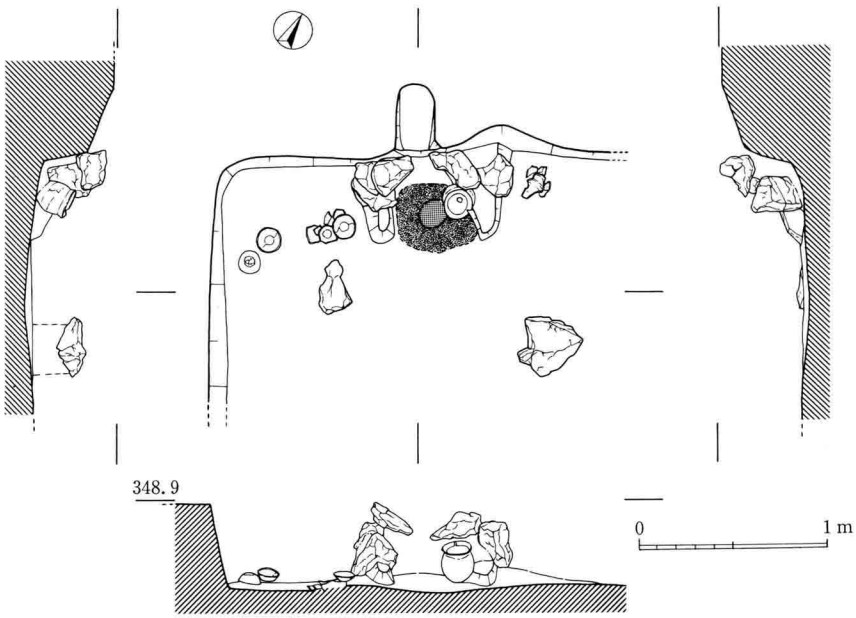
#### １号住居址（SA１）

［遺構］（47・48図）　Ａ区の西端に位置し、長軸60cm・短軸55cmの土坑を内包している。単体での検出ではあるが、南壁部は調査区域外にある。形態は方形を呈するものと思われる。主軸（南北）の規模は不明であるが、東西3.9mである。主軸方向はN40°Ｗを指す。検出面からの壁高は北42cm・西38cm・東46cmを測り、床面が東および南方向に傾斜を有する。また、床面は壁際を除き堅緻で良好な面をなす。カマドは北壁の左寄りに構築されており、角礫を用いた石芯両袖形のもので、構築当時の形態が一部残存していた。両袖先端の内法は45cm、奥行き55cm程の規模である。火床は５cm程窪み焼土塊化し、主軸方向42cmの範囲に焼土が認められた。煙道は壁外に50cm突出して残存する。カマド内に甕、左脇に坏等が散在していた。



47図　SA１実測図（１：80）

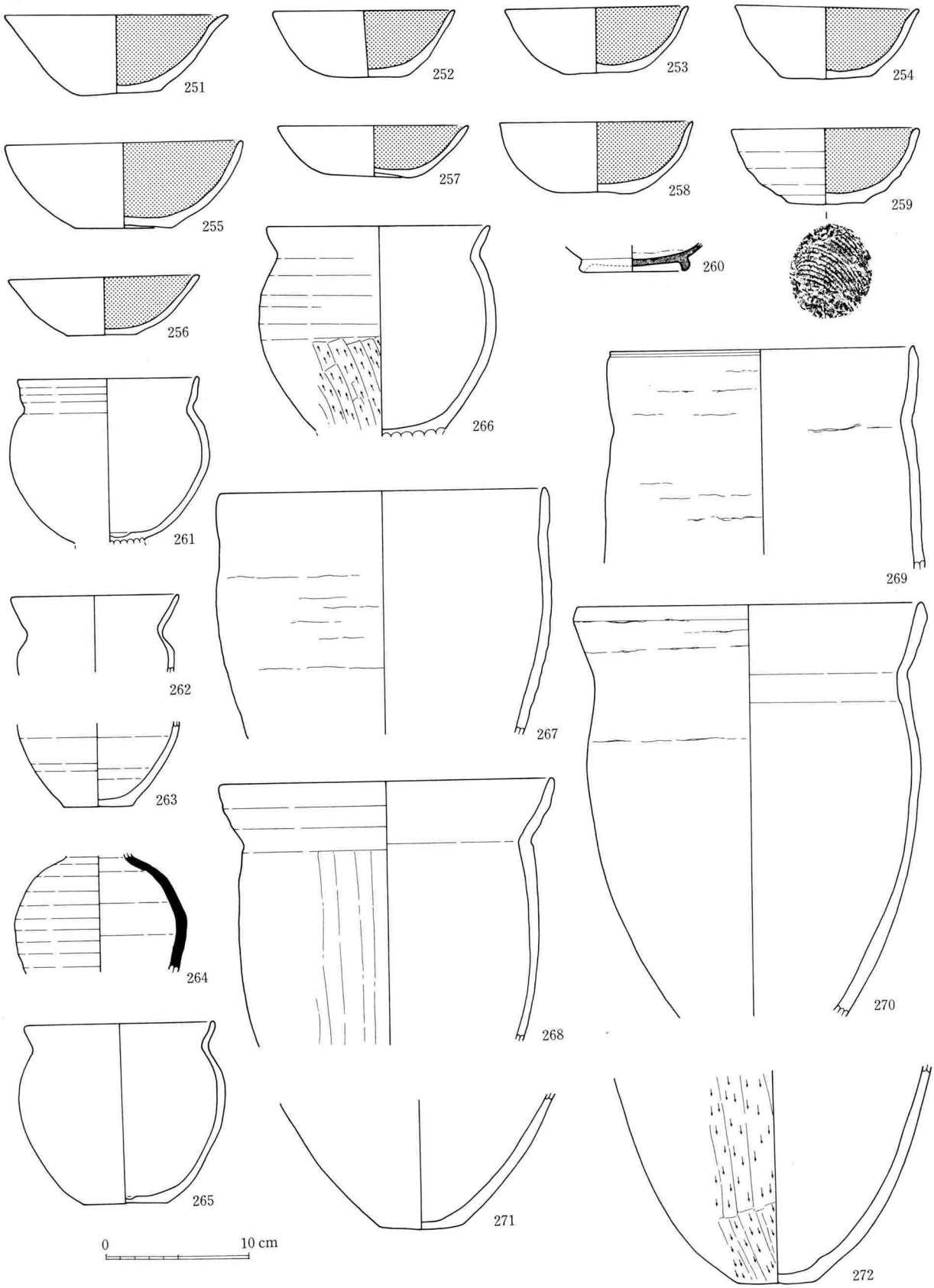
［遺物］（49図）　今回の調査では最も出土量が多い遺構である。器種には黒色土器坏（251～258）、土師器坏（259）・甕形鉢（261・262・265・266）甕（263・267～292）、須恵器長頸壷（264）、灰釉陶器碗（260）がある。坏の内面はヘラミガキ調整で、外面にはロクロ痕を残す。ロクロからの器体の切り離しは回転糸切りによるが、259のみ静止糸切りによっている。灰釉陶器碗底部外面は硯として使用されており、円形に朱墨痕が認められる。甕は長胴で砲弾形を呈し、口縁部が内湾気味に立ち上がる。267・269は最大径が体部にあり、深鉢形態になる。267・269・270には粘土紐の成形痕が残存する。調整はヘラケズリ・ヘラナデを多用する。



48図　SA１カマド実測図（１：40）

#### ２号住居址（SA２）

［遺構］（50図）　Ａ区の中央北に位置し、単体検出ではあるが、北西隅部は調査区域外にある。形態は北壁が長い台形を呈するものと思われる。主軸（東西）線上中央の規模は2.5mを測




49図　SA 1 出土土器実測図（1：4）

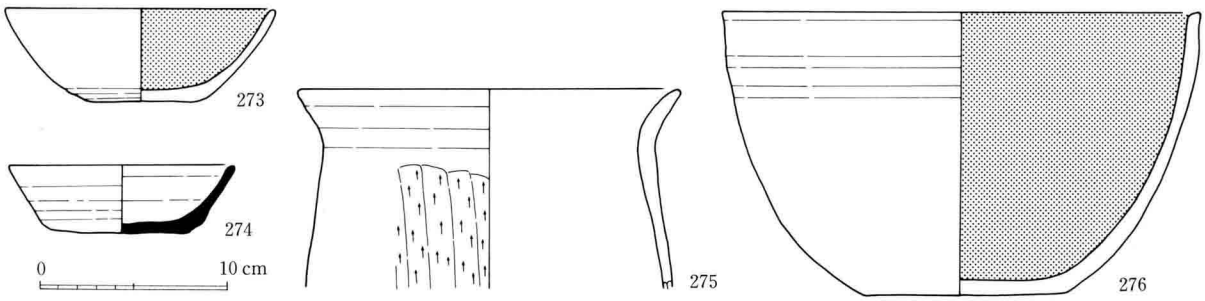
り、南北は3.9m の規模である。主軸方向は N73° W を指す。検出面からの壁高は26cmを測り、床面は平坦で、壁際を除き堅緻で良好な面をなす。カマドは西壁の左寄りに構築されており、両袖先端に角礫を用いた粘土製両袖形のもので、構築当時の形態が一部残存していた。両袖先端の内法は60cm、奥行き65cm程の規模である。火床は3cm程窪み、主軸方向76cmの範囲に焼土が認められた。煙道は立ち上がり部が残存しているにすぎない。

［遺物］(51図)　出土量は少量で、すべて破片出土である。器種には黒色土器坏 (273)・鉢 (276)、土師器甕 (275)、須恵器坏 (274) がある。黒色土器の底部外面の調整はヘラケズリ・ナデによっている。須恵器坏には糸切り痕を残す。甕は頸部が緩く屈曲し、体部にはヘラケズリが施される。この他に体部をヘラケズリにより極端に薄く仕上げる武蔵型甕が出土している。

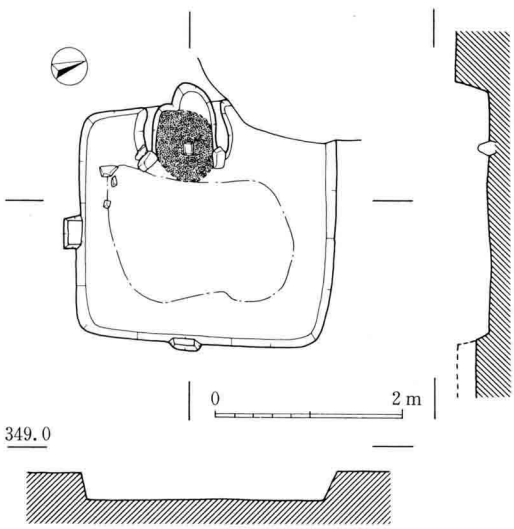
**3号住居址（SA 3）**

［遺構］(52図)　A 区の中央西に位置し、単体検出である。形態は北壁が若干張り出すが、基本形態は方形を呈する。主軸（南北）線上中央の規模は3.65m を測り、東西は3.55m の規模である。主軸方向は N45° E を指す。検出面からの壁高は40cmを測り、床面は東西方向で中央に高まりをみせ、壁際を除き堅緻で良好な面をなす。カマドは北壁の右寄りに構築されており、火床と支脚石両が残存していた。火床は平坦で、主軸方向45cm・東西33cmの範囲に焼土が認められた。煙道は確認されない。

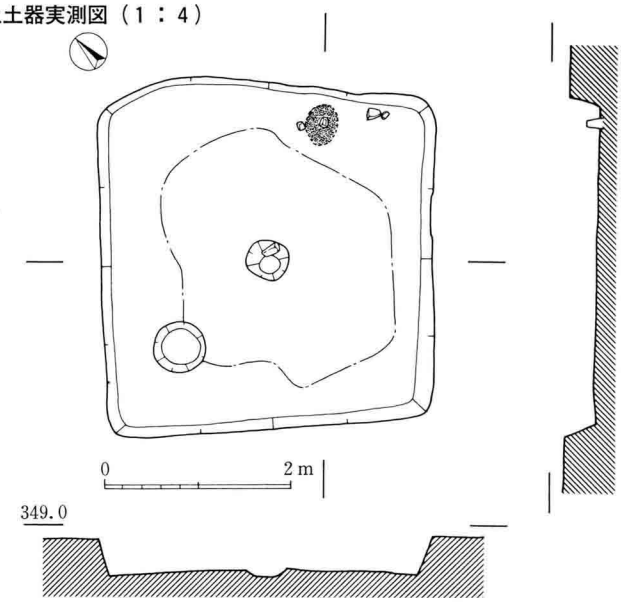
［遺物］(53図)　出土遺物量は少なく、器種には黒色土器坏（277～279・282～286)、土師器坏（280・281)・甕片があるにすぎない。底部外面には糸切り痕を残すが、285だけに外周がヘラケズリ調整をうける。この他特記遺物に灰白色を呈する飛騨産と推定される眼球状片麻岩製巡方（287）がある。縦4.2cm・横4.1cm・厚0.7cmを測り、大型の部類に属する。表面は平滑で、裏面の四隅には帯留めの潜穴が穿たれている。



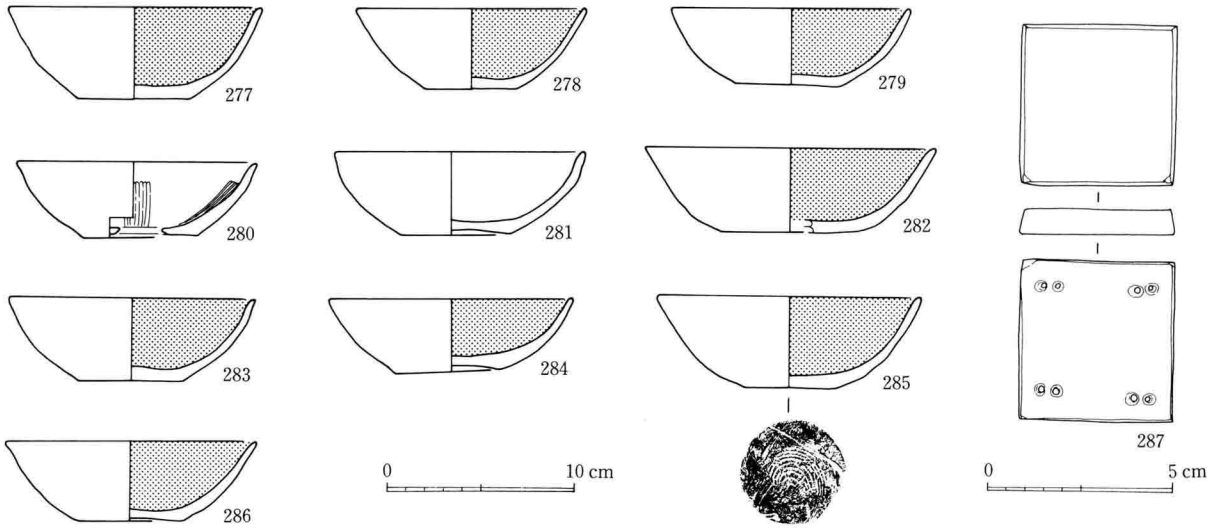

50図　SA 2 出土土器実測図（1：4）




51図　SA 2 実測図（1：80）




52図　SA 3 実測図（1：80）




53図　SA 3 出土土器（1：4）・石製品（1：2）実測図

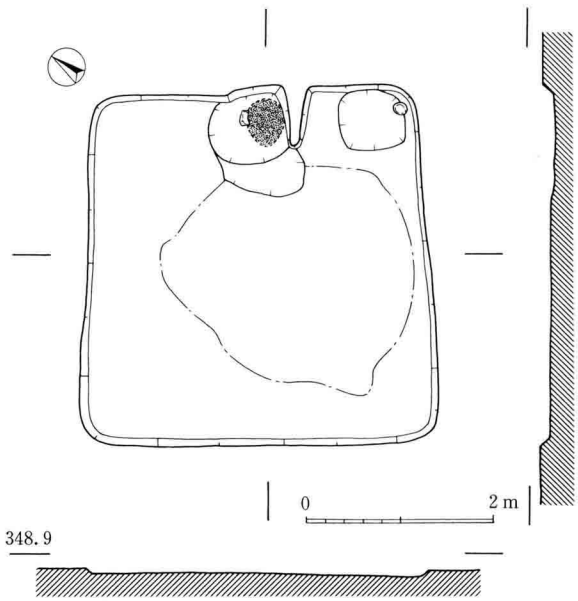
### 4号住居址（SA 4）

［遺構］（46図）　A区の中央東に位置し、単体検出ではあるが、北西隅部を露呈したにすぎない。形態は方形を呈するものと思われるが、規模置等は不明である。主軸方向はN22°Eを指す。検出面からの壁高は14cmを測り、床面は南北に傾斜を有するが、平坦で壁際を除き堅緻で良好な面をなす。カマドは北壁の左寄りに構築されていたものと思われ、壁下に直径25cm程の焼土が認められた。

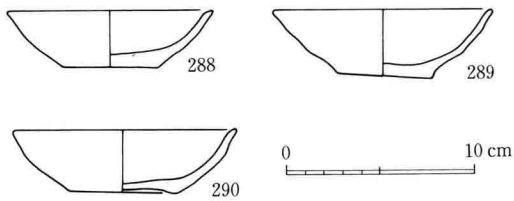
［遺物］　黒色土器坏・土師器甕片が出土しているが、図上復元可能なものはない。

### 5号住居址（SA 5）

［遺構］（54図）　C区の中央東に位置し、単体で検出した。形態は西壁が長い台形を呈する。主軸（南北）の規模は3.8mを測り、南北は軸線中央が3.65mの規模である。主軸方向はN55°Eを指す。検出面からの壁高は5cm程と浅く、床面は平坦で中央から東にかけて堅緻な面が認められた。カマドは北壁の中央に構築されており、粘土製両袖形のものであるが、調査では右袖部と火床を確認したにすぎない。火床は3cm程窪み、主軸方向50cm・東西40cmの範囲に焼土が認められた。北東隅に隅丸方形状の深さ5cm程度の浅い掘り込みがみられ、貯蔵穴の用途が考えられる。




54図　SA 5 実測図（1：80）




55図　SA 5 出土土器実測図（1：4）

［遺物］（55図）　出土量は少なく、形態をうかがえるものは土師器坏3個体（228～290）にすぎない。ロクロ成形で、底部に糸切り痕を残す。

### 6号住居址（SA 6）

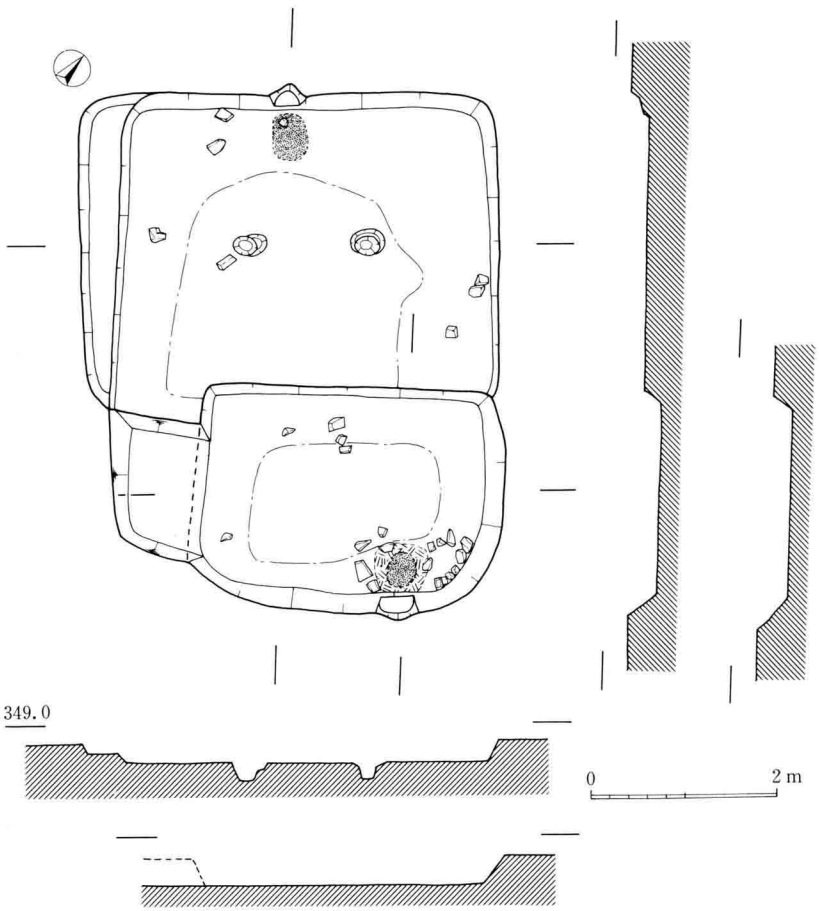
［遺構］（56図）　C区の中央に位置し、SA7と唯一の重複関係にあり、これよりも新しい。形態は主軸方向の南壁が隅丸状になるのに対し、北壁側は直角状を呈する長方形である。長軸は対軸の東西にある。主軸（南北）の規模は2.4m、東西3.25mである。主軸方向はN141°Eを指す。検出面からの壁高は30cm程で、床面は平坦で壁際を除き堅緻な面をなす。カマドは南壁の左隅に構築されており、角礫を用いた石芯両袖形のものと思われ、煙道の立ち上がり部と構築石材が残存していた。長軸48cmの火床と周辺に炭化物の散布がみられた。なお、東壁直下の角礫は意識的に配列されているが、性格は不明である。

［遺物］（57図）　出土量は少ない。器種には土師器坏（291）・鉢（298・300）・羽釜（299）、黒色土器坏（292・293）・椀（294～296）、灰釉陶器皿（297）がある。黒色土器の内面はヘラミガキが施され、292には暗文がみられる。300の外面にはタタキ調整痕、内面には成形痕が残存する。

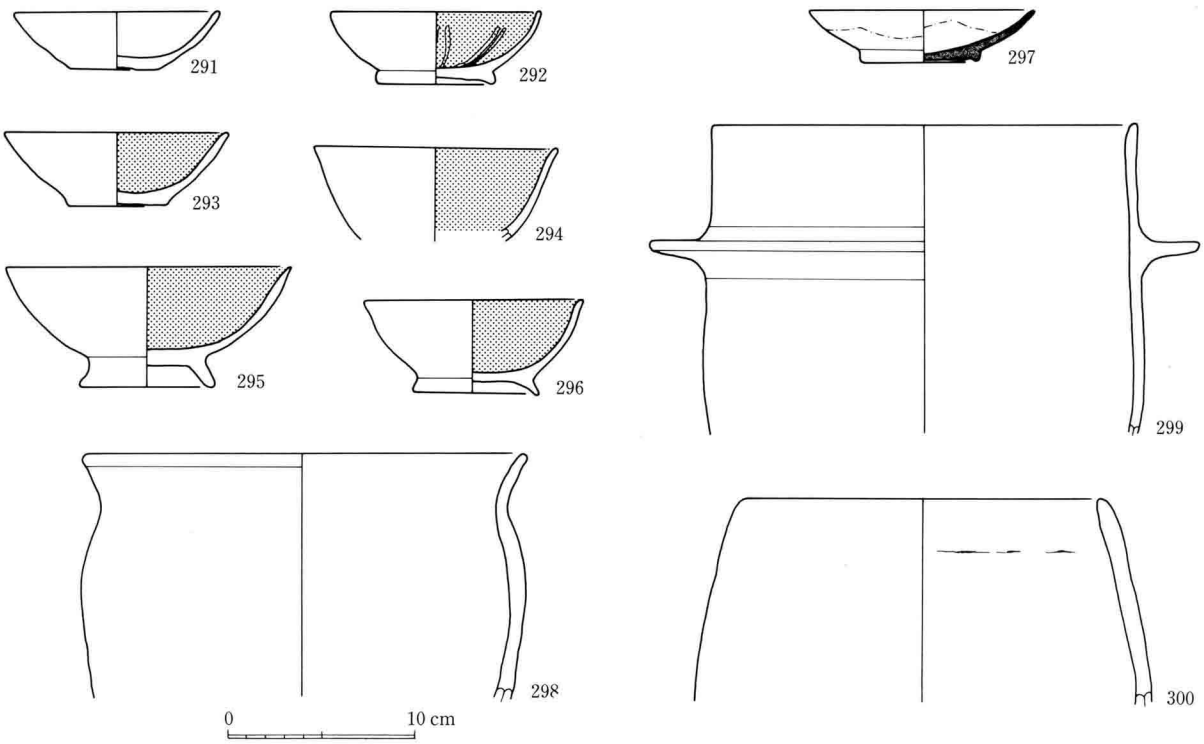
### 7号住居址（SA 7）

［遺構］（56図）　C区の中央に位置し、SA6と竪穴状遺構と重複関係にある。形態は南西隅を遺構検出の際破壊してしまったため定かではないが、東壁の南が屈曲の状態から隅丸方形を呈するものと思われる。主軸（南北）の規模は不明であるが、東西4.0mを測る。主軸方向はN36°Wを指す。検出面からの壁高は20cm程で、床面は平坦で壁際を除き堅緻な面をなす。カマドは北壁の中央に構築されているが、調査では煙道の立ち上がり部と主軸方向50cm・東西40cmの火床のみを検出した。住居址中央北寄りに北壁に併行して2個の小穴が認められた。柱穴と考えられるが、南壁沿いのものは確認されない。

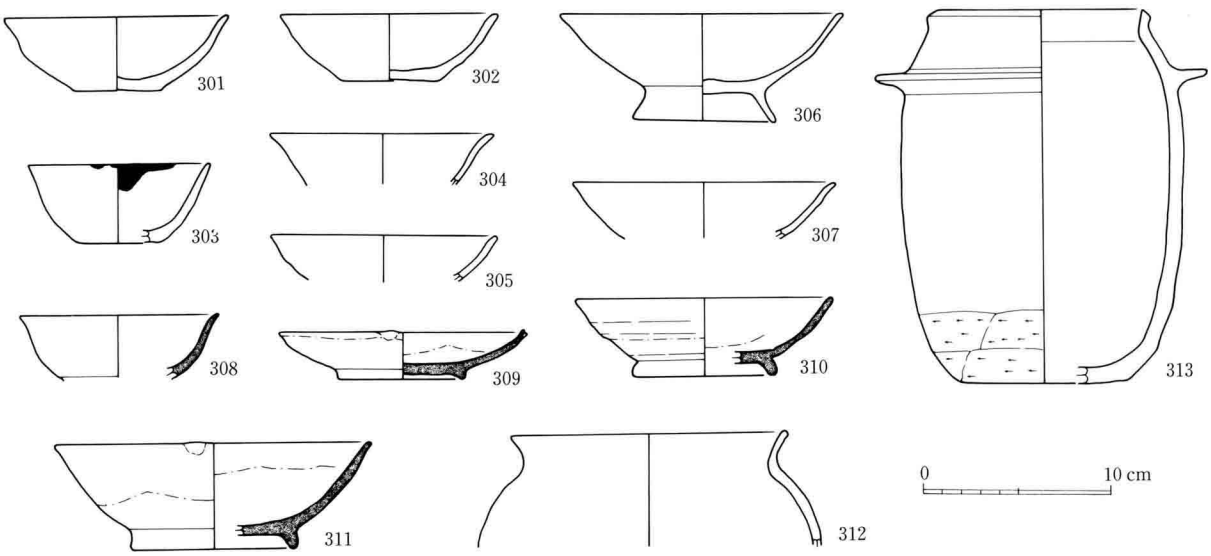
［遺物］（58図）　出土量は比較的多いが、すべて破片である。器種には土師器坏（301～305）・椀（306・307）・甕（312）・羽釜（313）、緑釉陶器碗（308）、灰釉陶器輪花皿（309）・碗（310）・輪花碗（311）がある。この他に図示できなかったが黒色土器坏片が出土している。303の口縁部付近には油煙痕を残すいわゆる灯明皿である。緑釉陶器は深緑色を呈し、灰釉陶器の施釉方法は漬け掛けである。羽釜の口縁部は内傾し、口唇部は面取りされる。




56図　SA 6（下）・7（上）実測図（1：80）




57図　SA 6 出土土器実測図（1：4）




58図　SA 7 出土土器実測図（1：4）

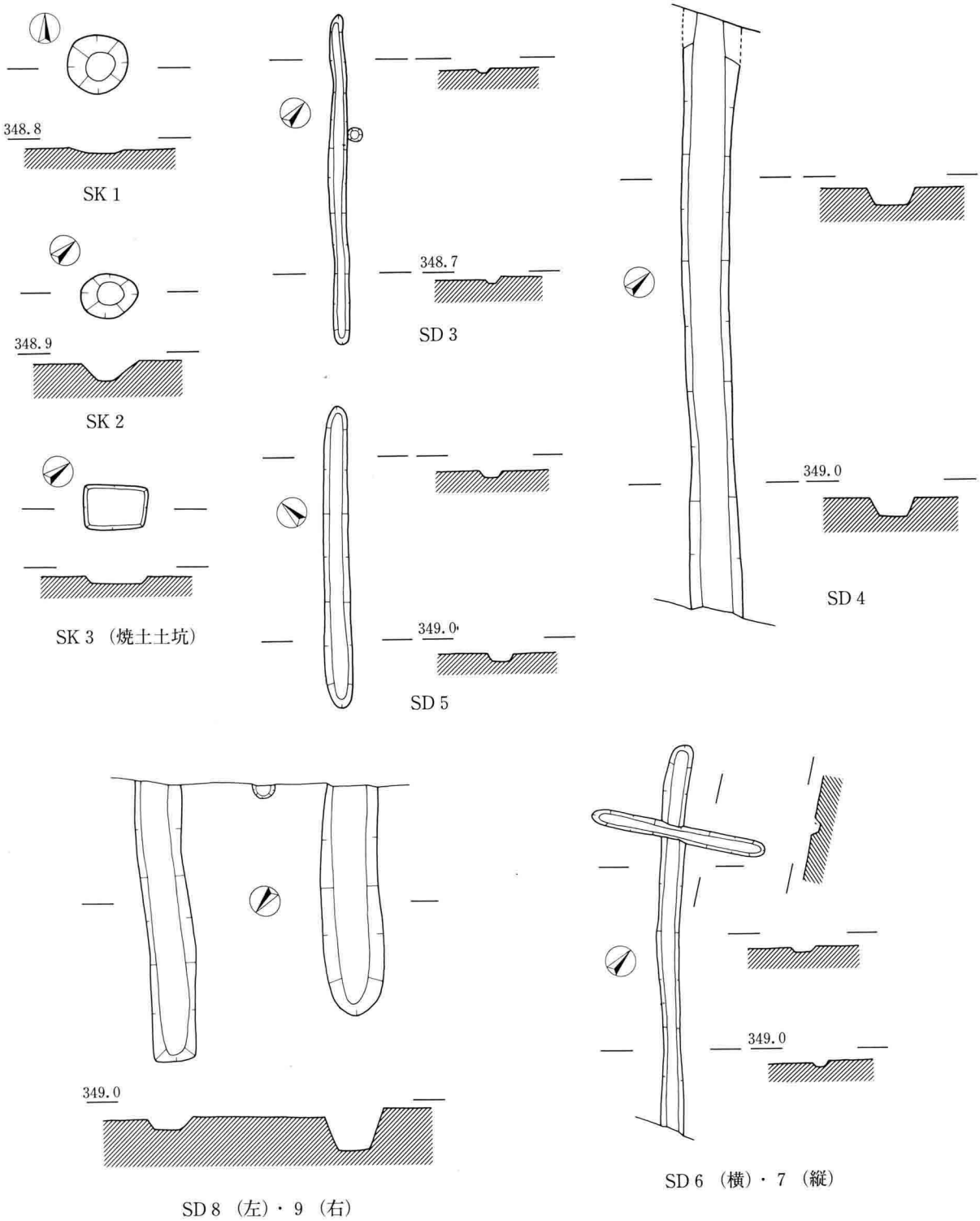
### (2)　土坑

#### 1号土坑（SK 1）

［遺構］(59図)　A区の中央東に位置し、SK2と近接する。形態は円形を呈し、長軸80cm・深さ8cmの規模である。東側に焼土が認められたが、本遺構との関係は不明である。遺物の出土はない。

#### 2号土坑（SK 2）

［遺構］(59図)　A区の中央東に位置し、SK1の西側にある。形態は卵形を呈し、長軸75cm・短軸最大幅70cm・深さ24cmの規模である。遺物の出土はない。




**59図　土坑・溝址実測図（1：80）**

**焼土土坑（SK 3）**

［遺構］(59図)　A区の中央、SA2の西に位置する。形態は北壁がやや長い台形状を呈し、北壁83cm・南壁75cm・南北軸55cm・深さ10cmの規模である。長軸方向はN40°Eを指す。底面および各壁は焼土塊化しており、強い火熱を受けたことをうかがわせる。焼骨等の遺物は出土しなかったが、規模や残存形態から推測して火葬施設の可能性がある。

### (3) 溝址

#### 1号溝址（SD 1）

［遺構］(46図)　B区の南東隅部で、旧河川と思われる右岸肩部を確認したにすぎない。傾斜はなだらかに落ち込んでおり、人為的な所作は感じられない。おそらく中世以前の河川跡であろう。遺物は土師器と須恵器の小破片が数点出土しているにすぎない。

#### 2号溝址（SD 2）

［遺構］(46図)　A区の東側に位置し、ほぼ南北方向に掘り込まれた遺構である。調査区からみるとはす方向の状態である。両端は調査区外に延びているが、区内では直線的な在り方を示している。検出規模は長さ30m程、幅1.6～2.5m・深さ50～60cmを測る大型の溝である。掘り方は2段掘りで、側面は緩傾斜のテラス状をなす。性格は不明であるが、この遺構より東側に居住施設がみられないことから、集落を取り巻く排水の用途を推測する。

［遺物］(60図)　出土量は少ない。器種に手捏ね様坏（314）・高台付底部穿孔土器（316）、黒色土器坏（315）がある。手捏ね様坏は弥生時代に属するものであろう。高台付底部穿孔土器はヘラミガキが外面および高台内部までおよんでいる。また、体部内面はナデ調整が施されるものの砂粒子の浮遊がめだち、ざらついていることから中世以降の土器と考えられる。

#### 3号溝址（SD 3）

［遺構］(59図)　A区の東端に位置し、単体での検出である。直線的な遺構で、全長4.3m・幅18～25cm・深さ5cm前後の規模になる。溝方向はN40°Wである。出土遺物はない。

#### 4号溝址（SD 4）

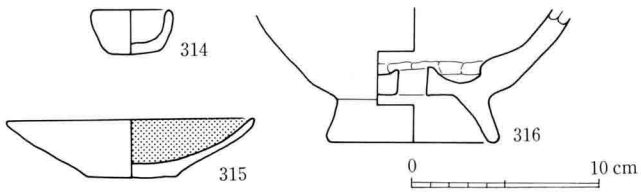
［遺構］(59図)　C区の中央に位置する。両端は調査区外に伸びており、直線的な在り方を示している。検出規模は長さ7.8m程、幅55～70cm・深さ22～26cmを測る。性格は不明であるが、排水の用途を推測する。溝方向はN48°E指し、方向・規模からA区のSD8と接続する可能性がある。図示できる遺物の出土はない。

#### 5号溝址（SD 5）

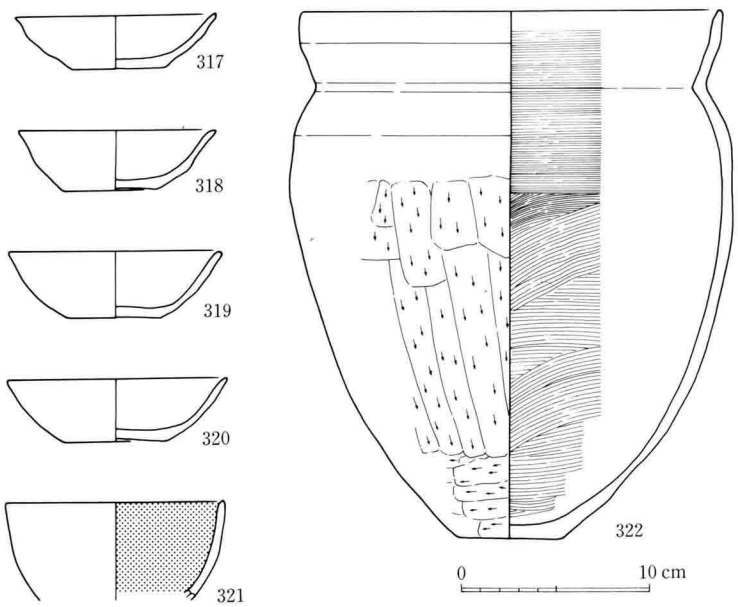
［遺構］(59図)　C区の西端に位置し、単体での検出である。直線的な遺構で、全長3.95m・幅30cm・深さ10cm前後の規模になる。溝方向はN50°Eである。出土遺物はない。

#### 6号溝址（SD 6）

［遺構］(59図)　C区の西側に位置し、SD7と直交する。直線的な遺構で、全長2.3m・幅20cm・深さ10cm前後の規模になる。溝方向はSD5と同じである。出土遺物はない。




60図　SD 2 出土土器実測図（1：4）




61図　検出面出土土器実測図（1：4）

### 7号溝址（SD７）

［遺構］（59図）　Ｃ区の西側に位置し、SD6と直交する。直線的な遺構で、南は調査区域外に延びる。検出長5.0m・幅20～30cm・深さ50cm前後の規模になる。溝方向はN48°Ｅである。出土遺物はない。

### 8号溝址（SD８）

［遺構］（59図）　Ａ区の西側に位置する。直線的な遺構で、南は調査区域外に延びSD4と接続する可能性がある。検出長3.6m・幅55～60cm・深さ18cm前後の規模になる。溝方向はN39°Ｗである。出土遺物はない。

### 9号溝址（SD９）

［遺構］（59図）　Ａ区の西側に位置し、SD8と併行する。直線的な遺構で、南は調査区域外に延びる。検出長3.0m・幅70～80cm・深さ55cm前後の規模になる。出土遺物はない。

### 土器計測表

| 番号 | 種別 | 器種 | 法量（cm） | | | 遺存 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 底径 | 器高 | |
| ＳＡ１（49図） | | | | | | |
| 251 | 黒色 | 坏 | 15.6 | 5.6 | 5.4 | 完形 |
| 252 | 〃 | 〃 | 12.5 | 5.8 | 4.6 | 〃 |
| 253 | 〃 | 〃 | 12.6 | 4.8 | 4.5 | 〃 |
| 254 | 〃 | 〃 | 12.3 | 6.0 | 5.0 | 〃 |
| 255 | 〃 | 〃 | 16.4 | 6.5 | 5.9 | 1/4 |
| 256 | 〃 | 〃 | 13.2 | 4.7 | 4.0 | 〃 |
| 257 | 〃 | 〃 | 13.2 | 5.4 | 3.5 | 1/2 |
| 258 | 〃 | 〃 | 13.3 | 5.4 | 5.0 | 完形 |
| 259 | 土師 | 〃 | 13.0 | 5.5 | 5.2 | 1/2 |
| 260 | 灰釉 | 碗 | | 6.9 | | ママ |
| 261 | 土師 | 甕形鉢 | 12.6 | | | 1/2 |
| 262 | 〃 | 〃 | 11.4 | | | 1/6 |
| 263 | 〃 | 甕 | | 4.8 | | 1/3 |
| 264 | 須恵 | 長頸壺 | | | | ママ |
| 265 | 土師 | 甕形鉢 | 13.0 | 5.9 | 12.6 | 2/3 |
| 266 | 〃 | 〃 | 15.5 | | | 完形 |
| 267 | 〃 | 甕 | 22.4 | | | 1/6 |
| 268 | 〃 | 〃 | 23.0 | | | 1/3 |
| 269 | 〃 | 〃 | 21.2 | | | 〃 |
| 270 | 〃 | 〃 | 24.0 | | | 1/2 |
| 271 | 〃 | 〃 | | 5.6 | | 2/3 |
| 272 | 〃 | 〃 | | 5.4 | | 1/3 |
| ＳＡ２（51図） | | | | | | |
| 273 | 黒色 | 坏 | 14.4 | 5.6 | 4.9 | 2/3 |
| 274 | 須恵 | 〃 | 12.0 | 7.2 | 3.6 | 〃 |
| 275 | 土師 | 甕 | 20.2 | | | 1/10 |

| 番号 | 種別 | 器種 | 法量（cm） | | | 遺存 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 底径 | 器高 | |
| 276 | 黒色 | 鉢 | 25.6 | 10.7 | 15.1 | 1/4 |
| ＳＡ３（53図） | | | | | | |
| 277 | 黒色 | 坏 | 13.5 | 6.0 | 4.9 | 2/3 |
| 278 | 〃 | 〃 | 12.2 | 4.8 | 4.3 | 1/4 |
| 279 | 〃 | 〃 | 12.8 | 5.6 | 4.1 | 1/6 |
| 280 | 土師 | 〃 | 12.3 | 6.1 | 4.0 | 完形 |
| 281 | 〃 | 〃 | 13.2 | 5.7 | 4.3 | 1/4 |
| 282 | 黒色 | 坏 | 15.5 | 7.2 | 4.5 | 1/4 |
| 283 | 〃 | 〃 | 13.1 | 5.7 | 4.4 | 1/8 |
| 284 | 〃 | 〃 | 13.0 | 5.5 | 3.9 | 1/2 |
| 285 | 〃 | 〃 | 14.0 | 4.9 | 4.8 | 1/8 |
| 286 | 〃 | 〃 | 13.4 | 5.4 | 4.2 | 4/5 |
| 287 | 石製 | 巡方 | 縦4.2・横4.1・厚0.7 | | | |
| ＳＡ５（54図） | | | | | | |
| 288 | 土師 | 坏 | 10.9 | 4.9 | 3.0 | 2/3 |
| 289 | 〃 | 〃 | 11.6 | 5.1 | 3.5 | 完形 |
| 290 | 〃 | 〃 | 11.9 | 5.7 | 3.3 | 2/3 |
| ＳＡ６（57図） | | | | | | |
| 291 | 土師 | 坏 | 10.8 | 4.5 | 3.0 | 完形 |
| 292 | 黒色 | 〃 | 10.6 | 6.0 | 3.9 | 1/4 |
| 293 | 〃 | 〃 | 11.8 | 4.9 | 3.9 | 1/8 |
| 294 | 〃 | 〃 | 13.0 | | | 1/4 |
| 295 | 〃 | 椀 | 15.2 | 7.0 | 6.3 | 1/8 |
| 296 | 〃 | 〃 | 11.5 | 6.4 | 3.9 | 完形 |
| 297 | 灰釉 | 皿 | 11.6 | 6.1 | 2.7 | 1/2 |
| 298 | 土師 | 甕 | 23.4 | | | 1/6 |
| 299 | 〃 | 羽釜 | 22.5 | | | 〃 |

| 番号 | 種別 | 器種 | 法量（cm） | | | 遺存 |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | 口径 | 底径 | 器高 | |
| 300 | 土師 | 鉢 | 19.4 | | | 〃 |
| ＳＡ７（58図） | | | | | | |
| 301 | 土師 | 坏 | 11.8 | 4.6 | 3.9 | 1/4 |
| 302 | 〃 | 〃 | 11.4 | 5.0 | 3.6 | 〃 |
| 303 | 〃 | 〃 | 9.6 | 4.2 | 4.2 | 1/2 |
| 304 | 〃 | 〃 | 11.8 | | | 1/4 |
| 305 | 〃 | 〃 | 12.0 | | | 〃 |
| 306 | 〃 | 椀 | 15.0 | 7.4 | 5.7 | 2/3 |
| 307 | 〃 | 〃 | 14.0 | | | 1/3 |
| 308 | 緑釉 | 碗 | 10.6 | | | 1/4 |
| 309 | 灰釉 | 輪花皿 | 12.5 | 6.6 | 2.5 | 〃 |
| 310 | 〃 | 碗 | 13.6 | 7.4 | 4.1 | 1/6 |
| 311 | 〃 | 輪花皿 | 16.8 | 8.3 | 5.7 | 1/4 |
| 312 | 土師 | 甕 | 14.6 | | | 1/6 |
| 313 | 土師 | 羽釜 | 10.9 | 11.0 | 19.8 | 1/10 |
| ＳＤ２（60図） | | | | | | |
| 314 | 弥生 | 手捏 | 4.0 | 2.2 | 2.3 | 完形 |
| 315 | 黒色 | 皿 | 13.0 | 4.8 | 3.1 | 3/4 |
| 316 | 高台付底部穿孔土器 | | | 8.8 | | ママ |
| 検出面（61図） | | | | | | |
| 317 | 土師 | 坏 | 10.6 | 5.0 | 2.8 | 2/3 |
| 318 | 〃 | 〃 | 10.4 | 4.9 | 3.2 | 〃 |
| 319 | 〃 | 〃 | 11.3 | 4.8 | 3.5 | 1/2 |
| 320 | 〃 | 〃 | 11.6 | 5.3 | 3.3 | 1/4 |
| 321 | 黒色 | 鉢 | 11.6 | | | 〃 |
| 322 | 土師 | 甕 | 22.2 | 5.4 | 38.0 | 1/2 |

Ⅲ－33　A区全景

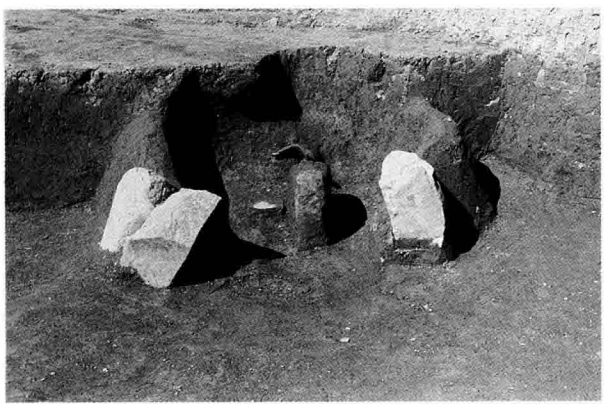
Ⅲ－34　B区全景

Ⅲ－35　SA 1

Ⅲ－36　SA 1 カマド

Ⅲ－37　SA 2

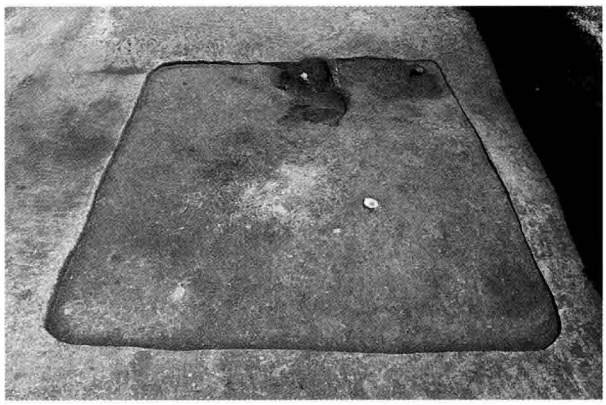
Ⅲ－38　SA 1 カマド



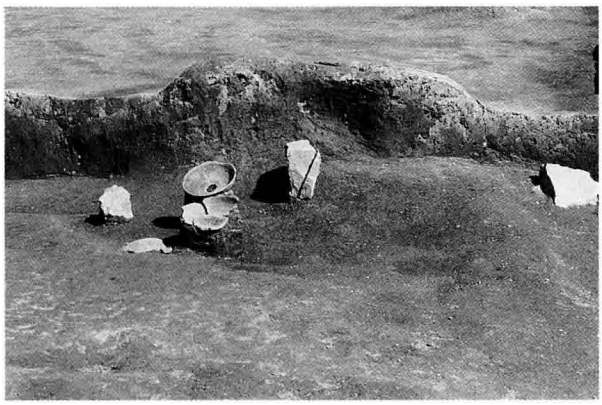
Ⅲ－39　SA 2 カマド

Ⅲ－40　SA 4

Ⅲ－41　SA 3



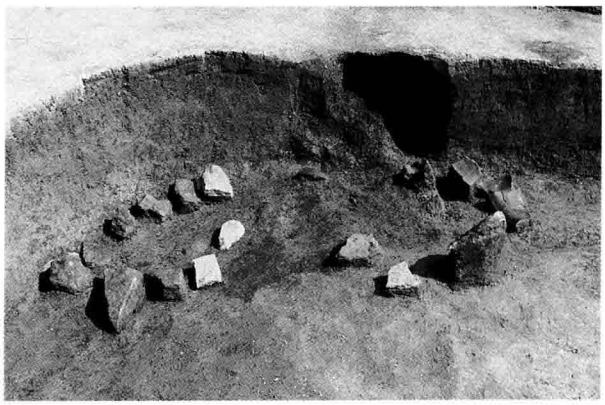
Ⅲ－42　SA 5



Ⅲ－43　SA 3 カマド

Ⅲ－44　SA 6

Ⅲ－45　SA 6（下）・7（上）



Ⅲ－46　SA 6 カマド

Ⅲ－47　SD 1

Ⅲ－48　縦列土坑群

SA 1

251

252

253

257

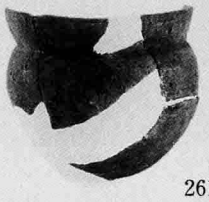
254

255

260

258

259


261

266

270

SA 2

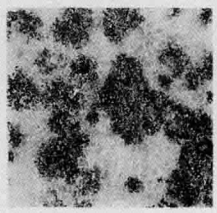
273

274

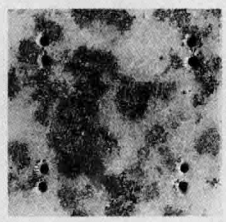
276

SA 3

277



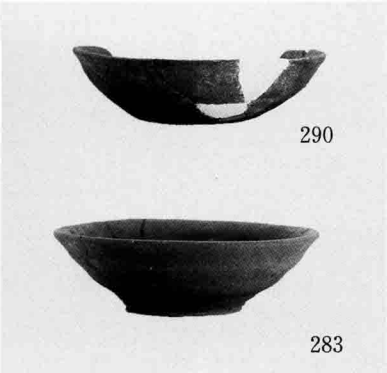
280


281

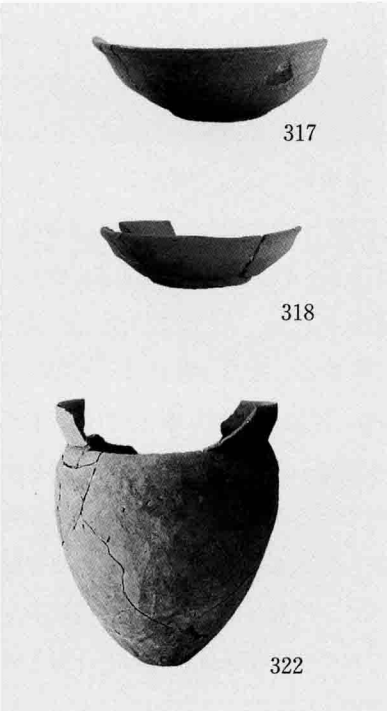
284

286

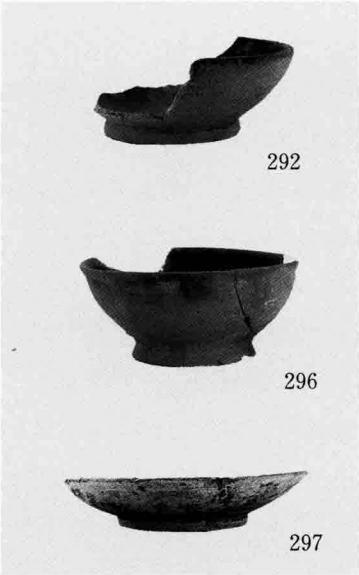
SA 5




検出面

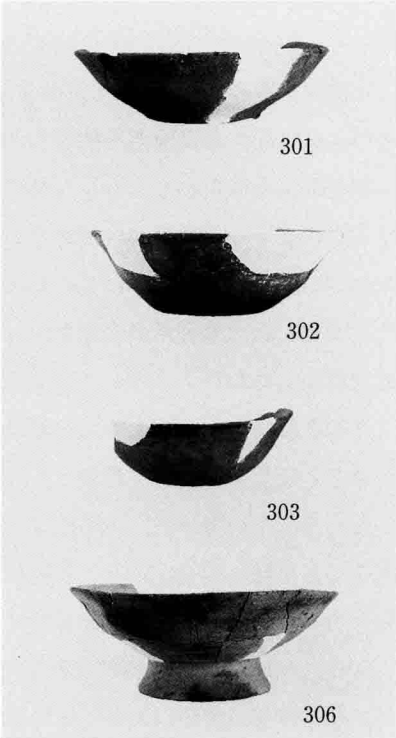



SA 6




SD 2

SA 7



# 第Ⅳ章　結　語

保護対象面積は1,670㎡と狭小なものであったが、遺跡の北限に近い調査地であり、平安時代と弥生時代中期後半の二面にわたる遺構面を検出した意義は大きい。

調査地は千曲川がもたらした堆積土の集積による自然堤防上に位置する。自然堤防における土砂堆積の状況は平安遺構面から弥生時代中期後半の遺構面まで約80cmの比高差がある。この時間差を800年とすると１年に平均10cmづつ土砂堆積があったものと推定され、洪水や冠水にたびたびさらされたことを意味する。そのためこの期間は安定した土地利用ができなかったものと思われ、弥生時代後期から奈良・平安時代初頭まで大規模集落の形成が認められない。このことは上流域の四ツ屋遺跡にもあてはまる。

松原遺跡において弥生時代中期後半の集落の中核は、第Ⅱ章第２節で記述したとおり環濠が認められた高速道地点および農協地点の字高畑（４図）にあり、当該調査地はその北縁部の北端でかつ東端に位置することが判明してきた。今回検出した遺構は住居址９軒・環状溝址９基・掘建柱建物址７棟・溝址８条・土坑20基・小穴等である。住居址は環状溝址等と重複関係にあるが、住居址間で重なりあうものはなく全て単独検出である。出土遺物からは時間差をうかがうことができないが、主軸方向に相違が認められる。北方向に対して西方向に傾くもの（SA101～103・109)、ほぼ東西方向にあるもの（SA104・105・107)、東方向に傾くもの（SA106・108）があり、この相違は前後関係による時間的な変遷と考えられる。住居址の規模は５ｍ前半のものが２軒、他は4.5m前後を測る。形態は隅丸方形呈し、４個の主柱穴を穿ち、壁下には不連続の周溝状溝を巡らし、入口部に土坑と両脇に２個の小穴を配し、主柱穴間の奥まった位置に地床炉を設ける構造を基本としている。環状溝址にも前後関係が認められ、重複関係にあるもの（SC101と103、102と103、106と109、107と108)、拡幅されたもの（SC105）がある。形態は円形ないし長円形を呈し、長軸８ｍ台の大型のものが多い。環状の溝は入口部と想定される空間を除き、全周するものと不連続なものがある。この遺構は平地式住居址と考えられているが、小穴がほぼ円形に配列しているものは２基（SC104・105）にすぎず、焼土が確認されたのはSC105のみである。入口部とみられる位置には住居址と同様土坑状掘り込みが認められる。当地における弥生時代の住居址が円形→隅丸方形→長円形→長方形と変遷するのに対比すれば、後期への移行期の遺構と考えられる。隅丸方形の竪穴住居址が先行し、引き続き環状溝址が出現した可能性も両者の重複関係からもうかがえる。掘建柱建物址どうしでも重複関係にあるものが認められ、存続期に時間差がみられる。住居址と重複するものは建て替えが想定されるSB104の１棟あるだけであり、環状溝址と重複するものが２棟あることからこれらの建物址は住居址に付随するものであろう。形態は桁間４間×梁間１間のもの多く、３間×１間・２間×１間のものも各１棟検出したが、規模・柱穴間の距離が不揃いである。小屋程度の建物を予想する。この他SA106はいわゆる焼失住居址であるが、遺物の出土状態からおそらく住居廃絶後焼却したものと思われる。多量の土器の出土はそのほとんどが炭化材より上部の覆土中からで、焼却後あるいは埋没途上に投棄されたものであろう。

平安時代においても集落の北限地域にあたり、住居址を７軒検出しているがその在り方は散在的である。重複関係にある２軒を除き他は単独での検出である。重複するSA６・7の関係は、掘り方においてはSA7の方が深い。出土遺物のうち坏・椀類ではＳＡ６が黒色土器が多いのに対して、SA７にはみられなくなり替わって土師器が凌駕するようになる。このような傾向から前者を９世紀末葉に、後者を10世紀前半に位置付けられよう。概ね本調査地における主要年代を９世紀後半にもとめる。また、カマドの所在位置から更に細分化できるものと思われる。

# 報告書抄録

| | |
|---|---|
| ふりがな | まつばらいせき　ご |
| 書名 | 松原遺跡Ⅴ |
| 副書名 | —JA 長野県経済連 LP ガス充填所建設地点— |
| シリーズ名 | 長野市の埋蔵文化財 |
| シリーズ番号 | 第92集 |
| 編著者名 | 矢口忠良・飯島哲也 |
| 編集機関 | 長野市教育委員会埋蔵文化財センター |
| 所在地 | 〒381-2212　長野県長野市小島田町1414番地　TEL 026-284-0004・FAX 026-284-0106 |
| 発行年月日 | 1998（平成10）年３月31日 |
| 印刷所 | 信毎書籍印刷株式会社 |

| 所収遺跡（ふりがな） | 所在地（ふりがな） | コード 市町村 | コード 遺跡番号 | 経緯度（世界測地系） | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 松原遺跡Ⅴ（まつばらいせきご） | 長野県長野市松代町（ながのけんながのしまつしろまち）東寺尾字松原東3317（ひがしてらおあざまつばらひがし）他 | 20201 | | 北緯 36°34′13″<br>東経138°12′24″ | 19970212<br>～19970328<br>19970407<br>～19970425 | 1,670㎡ | LP ガス充填所建設 |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 松原遺跡Ⅴ | 集落跡 | 弥生時代中期 | 住居址　9軒<br>環状溝址　9基<br>掘建柱建物址　7棟<br>溝址　8条<br>土坑址　20基 | | 松原遺跡北端の集落跡 |
| | | 平安時代前期 | 住居址　4軒<br>溝址　1条<br>土坑　4基 | | |


長野市の埋蔵文化財第92集

松原遺跡Ⅴ

平成10年3月25日　印刷
平成10年3月30日　発行

編集　長野市教育委員会
発行　埋蔵文化財センター
印刷　信毎書籍印刷株式会社